
六愿学園 六学除霊部

光騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六愿学園 六学除霊部

【Nコード】

N8924T

【作者名】

光騎

【あらすじ】

40年振りに突如現れた悪霊妖怪達。

偶然、その場に居合わせていた神楽坂は「霊能力」を使い、悪霊を倒す事に成功する。成り行きで『除霊部』という妙な役職を押し付けられた神楽坂は、学園に発生する怪事件を仲間と共に解決していく。

六愿学園六学除霊部CTESの改訂版です

除霊部キャラクター

—メイン—

> i 8 7 1 3 — 1 3 2 2 <

■ 神楽坂光志 かくらさか こうじ

年齢：18歳 ♂

身長：168cm

体重：61kg

役職：3年5組

使用武器：棒状の物なら何でも（モップ、箒など）

霊質：雷

> i 8 7 1 7 — 1 3 2 2 <

■ 天河摩琴 てんかわ まこと

年齢：18歳 ♀

身長：165cm

体重：??kg

サイズ：89 / ?? / ??

役職：3年1組 除霊部代表

使用武器：聖架「ロザルヘルム」

霊質：聖

―サブ―

> i 8 7 1 6 ― 1 3 2 2 <
ながお けんいち
■長緒健一

年齢：18歳 ♂
身長：183cm
体重：65kg
役職：3年5組
使用武器：体術
霊質：氷

> i 3 0 4 1 2 ― 1 3 2 2 <
かいば もみじ
■海羽紅葉

年齢：16歳 ♀
身長：158cm
体重：??kg
サイズ：75 / ?? / ??
役職：1年7組
使用武器：召霊
主な召霊：雷獣ライヤ
霊質：特殊

> i 8 7 1 8 — 1 3 2 2 <
篠崎慶斗しのかき けいと

年齢：17歳 ♂

身長：170cm

体重：60kg

役職：2年7組

使用武器：神刀「龍閃」

主な技：「龍虎双神流」旋乱刃 閃空龍牙斬

霊質：水

> i 8 7 1 9 — 1 3 2 2 <
蒼芭佐由里あおば さゆり

年齢：17歳 ♀

身長：174cm

体重：??kg

サイズ：87/?/?/?/?

役職：2年7組

使用武器：神刀「白虎」

主な技：「龍虎双神流」旋乱刃 地烈虎砲斬 猛虎襲突破

霊質：風

> i 2 6 9 4 4 — 1 3 2 2 <
上村裕也かみむら ゆつや

年齢：17歳 ♂

身長：175cm

体重：62kg

役職：2年7組

使用武器：体術（空手）

霊質：無

除霊部その他

> i 8 8 0 3 — 1 3 2 2 <
ながさわしほ

■ 長沢志穂

年齢：19歳 女

身長：170cm

体重：??kg

役職：3年2組

霊質：特殊

> i 8 8 0 4 < r u b y > < r b > 1 3 2 2 <

■ 朝倉崇 < / r b > < r p > (< / r p > < r t > あさくらたかし
< / r t > < r p >) < / r p > < / r u b y >

年齢：19歳 男

身長：178cm

体重：65kg

役職：3年6組（不登校中）

使用武器：斬魔刀”双呀”

霊質：魔焰

> i 3 0 4 3 1 — 1 3 2 2 <
さくまれいな

■ 佐久間玲奈

年齢：18歳 ♀
身長：165cm
体重：??kg
役職：3年5組（統刃学園からの転入）
使用武器：暗器
霊質：一般人

― 風特機 ―

>i30433<ruby><rb>1322<
■ 桐島湊</rb><rp>（</rp><rt>きりしまみなと
</rt><rp>）</rp></ruby>

年齢：19歳 ♀
身長：177cm
体重：??kg
役職：4年6組 風紀委員会
使用武器：空手
霊質：一般人
風紀特別機動部 隊長 兼 委員長
元女子空手道部主将

あさひなゆつじ
■ 朝比奈勇誠

年齢：19歳 ♂

身長：186cm

体重：85kg

クラス：4年5組 風紀委員会

霊質：一般人

風紀特別機動部 副隊長

元男子空手道部主将

――3年5組――

■吉原直明
よしはらなおあき

年齢：18歳 ♂

身長：173cm

体重：60kg

クラス：3年5組

霊質：一般人

――教師――

■藍苑涼子
あいぞのりよつこ

年齢：25歳 ♀

身長：172cm

体重：?? kg

クラス：3年2組担任

科目：科学

役職：3学年主任 兼 除霊委員会顧問

霊質：一般人

>i30983<ruby><rb>1322<

■山城炎</rb><rp></rp><rt>やましろほのお
</rt><rp></rp></ruby>

年齢：25歳 ♂

身長：185 cm

体重：82 kg

クラス：3年5組担任

科目：体育

役職：生徒指導委員長

霊質：一般人

――六学以外の人物――

>i30434――1322<

かぐらぎかのぞみ

■神楽坂希

年齢：16歳 ♀

体重：?? kg

学校：地元の高校

霊質：一般人

神楽坂の義妹。

>i30435<r u b y><r b>1322<

■篠崎楓</r b><r p>(</r p><r t>しのぎ</r
t><r p>かえで</r p></r u b y>

年齢：16歳 ♀

体重：?? kg

学校：地元（京都）の高校

霊質：水

篠崎の妹。

■星龍和人
せいりゅう かすと

年齢：17歳 ♂

身長：168 cm

体重：54 kg

学校：統刃学園

使用武器：神眼

主な技：霊視 テレパス等

霊質：特殊

000：プロローグ

幽霊や妖怪といった超常的存在^{オカルト}、霊能力と呼ばれる特殊な力を持つてそれらと戦った者たちの記録は、日本を始め世界各地に文献として残され、伝承として今日に語り継がれている^{こんにち}。

現代社会においても、超常的存在である彼らは、たびたび悪さを起こす。と、いつでも相手に自分の声を届けたり、周囲の物体を動かすといった悪戯程度で、昔のように人間に直接危害を与えることは滅多にない。

はるか昔、都^{みやこ}に邪悪な幽霊（悪霊）や妖怪の群れが現れ、当時の霊能者と戦ったと記録が残っているが、近年では妖怪どころか幽霊が現れること自体少なくなっている。

古くから人々は、超常的存在に畏怖の念を抱いてきた。

死んだ人間が霊となって現世に現れた幽霊、奇怪な姿で様々な現象を起こし災いをもたらす妖怪、これらは時代が変わっても人々の生活と密接に関わっている。

その関係は現代^{いま}も変わることはないのだ。

001：40年振りの悪霊

国立六愿学園。

広大な敷地に大きな校舎が並ぶ、全国でも有数のマンモス校。その歴史は古く、今年で創立百周年を迎える。

西洋建築を思わせる校舎が特徴で通路や照明、学内並木は外国の学校に迷い込んだのかと思わせる雰囲気を持っている。

百年も続くこの学園も七不思議や怪談話といったものは、ありふれたものだが実際、本物が現れたのは今から40年ほど前、それもグラウンドのど真ん中にポツンと、男性の霊らしき姿が確認されちよつとした騒ぎになった程度。その霊は立ち尽くしたままブツブツと独り言を言ったあと、すぐに消えて二度と現れることはなかった。それ以来、六愿学園は静かな当たり前の日常が送られている。

この日、第一体育館では五クラス合同で体育の授業が行われていた。

種目は男女で別けられ、男子はバスケット、女子はステージ側でバレーの二種目。

ボールを追う声や、掛け声が聞こえる館内のある一角では、自分の出番を待つ大勢の生徒が座っていた。

生徒達が待機している場所で、バスケットボールが放物線を描いた。

ボールは備え付けのネットに収まるかに見えたが、無常にもリン

グに弾かれてしまう。

「――げっ!？」

シュートを放った青年は愕然とする。

外れたボールは三回バウンドした後、床に転がっていった。

「くそぉ」

床に転がったボールを見ながら、青年は嘆いた。

彼の名は『神楽坂光志』かくらみかこうじ

黒い髪に、鋭い目、身長は平均的だが、丈夫で引き締まった体つきをしている。今時には珍しいミニグラスを掛けているのが特徴だ。

服装は、三年生である事を意味する青いラインが入った紺色のジヤージ。上着のファスナーを全開にして黒いシャツを出している。そのだらしない格好から、彼の性格も読み取れるようだ。

言動は荒く、口より先に手が出てしまうタイプだが、優しい一面も持っている。

中学時代は多くの問題を起こして数回、自宅謹慎を受けた過去があり、全体的に粗暴な印象を受けるが、それでも落ち着いたほうだ。

「っしやーっ!」

神楽坂の対戦相手だった男は、ガッツポーズをした。

天然パーマが目立つ彼は『吉原直明』よしはらなおあき

神楽坂のクラスメイトだ。

二人は試合の合間に、フリースローの賭けをしていた。結果は神楽坂の敗北（四勝五敗）で終わる。

「とうとう負け越しかよ……」

今回こそは、と意気込んでいただけに神楽坂は肩を落とした。

「えーと、今回は直明に……」

「流石に三つも食いきれねーし、残りは健一とかにやるか。俺って何て良い奴なんだ……」

「そういや、三つ賭けてたんだっけか」

神楽坂は、ばつが悪そうな表情を浮かべた。

今回の賭けに気合を入れる意味も兼ねて、この勝負に三つ賭けていたことが仇となった。

二人が賭けていた物は昼食の調理パンだが、『カツサンド』は学園で最も人気が高い商品の一つ。ゆえに売り切れる速度も尋常ではないので、手に入れるだけでも一苦労させられる代物だ。

「やれやれ、四次限目終了と同時に戦場か……」

「骨くらいは拾ってやるぜ光志？」

気楽に笑う吉原に、神楽坂は苦笑う。

その時、Aコートから女子の黄色い声援が聞こえてきた。

彼女たちの目当ては、単独でディフェンスの網を掻い潜り、華麗なシュートを放つ長身の男子生徒のようだ。

「……健一の奴、相変わらず凄げえ人気だよな」

「そうだな」

羨ましがる吉原に、神楽坂は淡白な返事をする。

華麗にシュートを決めた彼は『ながおけい長緒健一』

183cmと長身で、常に冷静沈着、頭脳明晰、更にスポーツ万能と非の打ち所がない。

神楽坂とは幼少時からの幼馴染で、服装は彼とは象徴的にキチンと着ている。

神楽坂は嫌味で素っ気無い返事をしたわけではない。

幼馴染である長緒が異性に人気があることは、幼少時から知っているからである。

「……光志、また負けたのか」

試合を終え、女子生徒の声援と共に長緒が戻ってきた。どうやら彼のチームが勝利したようだ。

「健一！ カップンを三つ手に入れたぜ！お前に一つお裾分けしてやるよ！」

吉原は神楽坂の肩にポンと手を置いた。

「健ちゃん、試合中に見てたのかよ……」

「……まあな。光志、次は俺と賭けてもするか？」

「じよ、冗談じゃねえぜ、余所見しながら一人でゴールを決めれる健ちゃん相手に勝てるわけねえだろ」

長緒と勝負した日には、カップン十個では済まない。
神楽坂の様子に、長緒はフッと笑った。

「つてか直明、何時まで肩に手置いてんだ」

肩に乗せた手を離そうとしない吉原は、ステージを見ていた。

「何見てんだよ」

「摩琴ちゃんだ！　摩琴ちゃん！」

「誰だそれ」

神楽坂と長緒は、ステージの方を見てみた。

ステージ側のコートではバレエが行われているが、この距離では誰が誰だか判断できない。

「この距離で良く分かるな」

「当たり前だろ、俺の摩琴ちゃんセンサーに狂いはないぜ！」

「……どんなセンサーだ」

流石の長緒も突っ込んだ。

「お前ら、摩琴ちゃんを知らねーのか！？」

「名前——くらいなら聞いたことがあるな」

「し、信じられねー、俺が摩琴ちゃんの良さを教えてやる！」

「いや、遠慮しとくぜ」

「んだとっ！」

「ああ、もう分かったから落ちっ——」

騒ぐ吉原を落ち着かせようとしていた神楽坂は、表情が固まり、視線は釘付けになった。

吉原の背後に、殺気と怒りのオーラが立ち上がっている。彼はまだ気付いてはいないが、赤ジャージに身を包んだ『鬼』（教師）が

何時の間にか立っていた。

その教師は三人も良く知る人物。

「光志、なに固まつ——ぶべっ!？」

ゴンツ、と重い衝撃が吉原の脳天を襲った。

最後まで気付かなかった吉原は、鬼教師の怒りの拳固を受けて白い煙を上げながらうつ伏せに倒れる。

「てめえら、俺の授業をサボるたあ覚悟できてんだろうなあ！ 罰として腕立て千回！」

男性教師は、館内隅にある小スペースを指差した。

近くには掃除用具が納められたロッカーが置かれ、壁にはモップが立て掛けられている。

「俺もかよっ！」

「なんだ神楽坂、文句でもあるのか？」

「い、いや……」

吉原に鉄槌を下したのは、五組の担任である『山城炎』やましほのお

まるで燃え上がる炎を連想させる、赤い髪を後ろに流したオールバックがトレードマーク。自衛隊に所属していた経歴を持つ武闘派教師だ。男子の間では恐れられているが、生徒の悩みや相談を積極的に聞いてくれたりと周りから頼りにされている教師でもある。

三人は罰として腕立て伏せ千回（実際には五十回）をする羽目になるのだった。

汗だくになりながらもノルマである五十回を何とか達成した神楽

坂と吉原は、汗で濡れた上着を脱ぎ捨てて床に転がる。

それに比べて長緒は、二人と同じ運動量にも関わらず殆ど汗を掻いていなかった。

「な、なんで健一は汗かいてねーんだよ……」

「……さあな。汗を掻く程では無いだけではないか？」

「ば、化物かよ……」

さらりと答える長緒に、吉原は苦笑いながら冷たい床に体をくっつけた。

「……？」

二人の隣で仰向けになって息を整えていた神楽坂は、館内の異変に気付कि上体を起こした。

館内の照明が僅かだが明滅している。

一つや二つくらいならば電球の寿命がきたのかとも考えられるが、全ての照明が明滅するのはおかしい。

しばらく様子を伺っていると、明滅する間隔が更に大きくなった。ここまで大きくなると、他の生徒も気付き始める。

「な、なんかおかしくね？」

吉原も異常に気付いたのか、天井を見上げている。

館内にいる全員が異変に気付き、周囲を見回していた。

「……光志」

「分かつてる」

館内の雰囲気以前と比べて、明らかに変わっていた。

空気は重く、息苦しさすら感じられる。

首の後ろがチリチリと警鐘を鳴らし、本能が、魂が危険を知らせる。

これは電球の寿命でも、故障でもない、原因はたった一つ。

この館内に不気味に漂う邪悪な力。それは、ドス黒く、体に纏わり付いてくるかのような粘性のある不快な気配、しかもそれは次第に勢力を増していつている。

その異変に神楽坂と長緒だけが気付いていた。

「お、おいっ！ 光志、健一！ あれを見てみるよっ！」

吉原が我が目を疑いながらコート内を指差した。

床に落ちていたバスケットボールが、まるで意思を持ったかのように独りでに動いている。

勝手に動くはずがないボールは、数メートル転がったあと宙に浮くという考えられない現象を起こした。

その怪奇現象はボール一つだけに留まらず、隅に置かれていたステンレス製のボール籠からも次々に浮遊し始める。そして、ついには館内にあった全てのボールが宙に浮いた。

明らかに異常な現象が、第一体育館に起っていた。

激しく明滅していた照明が、バチツという電気がショートした音を立てて消えた。

全ての照明が消えたわけではなく、体育館中央付近の照明だけが

消え、その範囲だけが暗くブラックホールのようになっている。それ以外の照明は、いまだ明滅を続けているが全体的に見ても薄暗さは拭えない。まだ昼間だというのに、夜になったと間違えるような暗さだ。

宙に浮いた無数のボールは、完全に静止した状態で動こうとしない。

ボールは天井に届くのもあるかと思えば、床からたった数センチしかなかったりと間隔はバラバラだ。

「ど、どうなってんだよ……！」

吉原は目の前で起っている現象を理解できず、動揺を隠せない。落ち着きを失った吉原をよそに、神楽坂と長緒は宙に浮いているボールには目も暮れず、照明が消えてその範囲だけが暗くなった館内中央を見据えていた。

「まさか、うちの学園に現れるとはな」

神楽坂は落ち着いた口調で言う。

館内に漂っている邪悪な力は、照明が消えた館内中央部を中心に渦を巻いている。

吉原を始め、他の生徒もこの渦巻く力に気付いてはいない。神楽坂と長緒の二人だけが感じている力だ。

渦は更に勢いを増していく。

まるで体育館が竜巻に取り込まれたかのようだ。

その勢いが最高潮に達した時、渦は何の前触れもなく一瞬にして消え去った。

同時に、中心を見据えていた神楽坂の眉がピクリと反応する。

消えた渦の中心に、人らしき影が現れた。

陽炎のように薄っすらと現れた人影は、こちらからでは正面を見ることはできないが、シルエットから男性だと判断できる。

彼は顎に指を掛けて、何かについて思案をしているように見えたが、その顔に生気が全く見られない。

存在自体が希薄な上に、この距離では詳しく分からないが白衣らしき服を羽織っており、左胸には身分証と思われる物を提げている。しかも、その衣類には血痕がベツタリと染み付いていた。

彼は人間だったと言った方が良かったらう。

それは、40年の沈黙を破り、六愿学園に超常的存在（霊）が現れた瞬間だった。

002：聖銀の十字架

ついにパニックが起った。

今まで空中で静止していた無数のボールが、突然動き出したからだ。

まるで大砲から撃ち出されたかのようなボールは、猛スピードで飛びまわる。

その中の一つが窓に激突し、鋼線の網が入った強化ガラスは粉々に砕け散った。

だが、それだけでは終わらなかった。

今まで開放されていた鉄製の扉が、次々に閉まりだす。

第一体育館は吹き抜けの二階建てで、隣のA校舎との渡り廊下も含めて出入口は五箇所存在する。その全てが封鎖されてしまった。

神楽坂と長緒は、体育館中央部にいる男性の霊を見続けていた。宙に浮いたボールも、閉鎖された扉も、悪霊と化した彼が引き起こしていると見て間違いない。

「な、何してんだよ！ 早く逃げるんだよっ！」

伏せた状態の吉原は、神楽坂のジャージの裾を引っ張って避難を促した。

しかし、神楽坂は逃げようとしなない。それは彼の隣に立っている長緒も同じだった。

「どっちにせよ、出入口は封鎖されてんだろ？ 直明そのまま伏せてた方がいいぜ？」

「じよ、冗談じゃねーぜっ！ 一体何が起ったんだよ！」

吉原を始め、他の生徒たちには悪霊の姿は見えてはいないようだ。

その時だった。

神楽坂の視界に、一人の女子生徒が現れる。

悪霊との間に割り込んだ彼女との距離は約五十メートル。

背中を向けているので顔を見る事はできないが、腰まで垂れた青い髪であることだけは分かった。しかも、彼女は手に持った何かを悪霊に向けているようだ。

「ま、摩琴ちゃんが危ないっ！」

伏せたまま吉原が叫ぶ。

どうやら彼女が前に言っていた生徒のようだ。

同時に神楽坂は、自分と近いもの（・・・）を彼女から感じていた。

（あの女子、悪霊の姿が見えてるのか？ いや、俺たちと同じ（・・・）なら可能性はあるな）

「……光志、奴の力が高まっているぞ」

悪霊の変化に気付いた長緒が言う。

悪霊はまだ現世に現れてはいない、現世に限りなく近い境界にいる状態だ。その状態にも係わらず数々の現象を起こし、館内をパニックに陥れる力。これ以上、悪霊が力を増すと被害が更に拡大する恐れがある。

彼女がどうであれ、このまま様子見しているわけにもいかなかった。

「仕方ねえな。健ちゃん」

「……分かった。俺は扉をこじ開けて活路を開く。彼女の方は任せ
たぞ」

「ああ、任しとけ」

神楽坂は余裕のある返事を返す。

扉へ向かう長緒の背中を見送りながら、神楽坂は壁に立て掛けて
あったモップを手に取った。金属製の長柄に、黄色い楕円形ヘッド。
汚れをふき取る分厚く柔軟な繊維が付けられたフロア用のモップだ。

「お、おいっ！ どこ行くんだよっ！」

「いいから、直明、お前はそこでジっとしてろよ？」

そう言い聞かせながら、神楽坂はモップを肩に担いで不敵に笑っ
た。

神楽坂の往く手を阻むかのように、ボールが次々に襲い掛かって
くる。

それを一つ、また一つと、走る速度を落さないように最低限の動
きでかわす。

ボールと体の間隔は数センチ、その中の一つが左側頭部を掠めた。
だが、神楽坂は動揺することなく速度を保ち走り続ける。ニアミス
ではなくボールの軌道を完全に見切っていた。

彼女がいる所まで、二十メートル程となった時だった。

「きゃあああっ！！」

「なっ——」

悪霊の攻撃を受けたのか、彼女は悲鳴と共に神楽坂の方へ大きく吹き飛ばされた。

十メートル上空を舞うように飛ぶ彼女は、背中を床に向ける形で受身を取れる状態ではない。

このままでは危険だと感じた神楽坂は、手に持っていたモップを投げ捨てて走り出した。

「くそっ!!」

神楽坂は全力で走る。

この距離では間に合うかどうかのギリギリのライン。

十メートル……九メートル……五メートル。

弧を描くように落下する彼女。

渾身の力を込めて走る神楽坂。

二人の視線が合った。

神秘的な光を持つサファイアのような、彼女の青い瞳。

一秒にも満たない出来事が何時間にも感じられる。

理由は分からなかったが、それが神楽坂の足に力を入れさせた。

「おおおおっ!!」

神楽坂は気合を込めながら跳んだ。

自身の受身は考えず、両手の筋が切れそうなくらい前に伸ばす。彼女が床に叩きつけられるまで、既に一メートルを切っている。何としても彼女と床の間に、両手を、せめて片手だけでも割り込ませなければならなかった。

ドンツという音と共に、神楽坂は彼女の姿を見失ってしまう。彼の胸部が床に激突し、その衝撃と痛みで目を閉じてしまった。だが、その両腕からは彼女の感触がしっかりと伝わってくる。神楽坂は床に体のいたるところを強打しつつも、間一髪のところまで彼女を受け止めることに成功。彼女は無事だったが、既に意識を失っていた。

「な、何とか間に合ったか。それにしても無茶する奴だな……」

体中に走る痛みに耐えながら、神楽坂は体を起こして彼女を抱き寄せる。

その時、神楽坂は彼女に目を奪われた。

ふわりと羽のように広がるしなやかで艶のある髪、触れたでも傷つけてしまいそうな白く透き通った繊細な肌。まるで眠り姫のように意識を失った彼女の表情は、どこか優しくそれでいて気品を失うことが無い。その美しい姿は神楽坂を釘付けにするには十分だった。

「……光志！ 前を見ろっ！」

「！？」

彼女に気を取られていた神楽坂は、ハッと我に返った。

「ちっ！」

長緒の警告に気付いた時には既に、バスケットボールが迫ってきていた。

その距離、約十五メートル。高度は床から二十センチほど。

砲弾のようなボールの速度を考えると今から彼女を抱いて回避するには遅すぎる。しかも彼女を助けた際に体中を痛めてしまい動きも鈍くなっている。それに加えてあの高さでは身を伏せてやり過ごすことも不可能だ。

絶体絶命かと思われた。

神楽坂は最悪、自分の体を盾にしようと考えていたが、それを見越していたかのようにモップが床を滑ってきた。

それは神楽坂の直ぐ横にピタリと止る。

途中で投げ捨てたはずのものが何故手元に、普通ならそう考えてしまつかもされないが、神楽坂は疑問を持つこともなくモップを手にとった。

バキンッと、モップとボールが当たったとは思えない金属音が響く。

その音と同時に、バスケットボールは明後日の方へ飛んでいった。神楽坂は左手に持ったモップの柄を、ボールの射線上に合わせて弾き返していたのだ。

「……どうやら間に合ったようだな」

長緒が神楽坂のもとに駆けつける。

「健ちゃん、助かったぜ」

神楽坂はモップを見せる仕草をした。

鋼線が入った強化ガラスを砕く威力を持つボールを弾いたモップの柄には、凹みどころか傷の一つも入っていない。代わりに薄っす

らと輝く光がモップ全体を覆い、無数の繊維が集まったヘッド部は電気が流れているかのように逆立っていた。

「……俺がいるとはいえ、迂闊だぞ光志」

「わ、わりい……」

とても見惚れていたとは言えない。神楽坂は彼女を抱いたまま頭を掻いた。

本当ならすぐにでも床に寝かせてやりたいが、館内には凶器と化した無数のボールが壁などに当たり跳ね返りながら飛び交っている。彼女をこの状況下で放ってはおけない。

「それより健ちゃん、扉の方はどうなったんだ？」

「……心配ない、既に退避済みだ」

長緒は親指で後方を指差した。

既に館内後方の扉が三つ開放され、生徒の避難は自分達を除いて完了している。

生徒を迅速に避難させ、更に丸腰の神楽坂にモップを届けるなど実に鮮やかな手際だ。

「流石だな健ちゃん」

「……この程度は造作もないことだ。それよりも」
「だな」

この現象を起こしている元凶がまだ残っている。

神楽坂は彼女の背中に左腕を回す。そして、モップを杖代わりにしながら抱き上げるように立ち上がった。

「さて、これ以上暴れられても困るからな。さっさと終わらせるぜ」

左手に持ったモツプの先を悪霊に向ける。

すると、悪霊はゆっくりとその姿を現した。

白衣の下にはワイシャツにネクタイ、スラックスのスーツ姿。両足首から先は薄く靴を履いているのかどうかまでは分からない。頭蓋骨が透けて見えるような顔は俯き、ブツブツと独り言を言っている。

その内容を一部聞き取ることができた。

<……プ……クト……ジェ……ハ完璧ダッタハズ………>

「何を言ってる？」

「……分からんが白衣を着て身分証を付けているところを見ると、何処かの研究員だったのかもしれない」

「僅かに理性（生前の記憶）は残っているようだが……」

神楽坂はもう一つ気が付いた。

それは悪霊の両脚に絡んだ太い鎖だ。

堅牢な鎖は床から伸びて、まるで蛇のように巻きついている。

「……地縛霊？」

鎖に気付いた長緒は怪訝な声を出した。

地縛霊とは、自分が死んだ事を受け入れられなかったり、強い恨みや無念を抱いたまま死亡し、その土地や建物から離れなくなつた霊のこと。地縛霊は決して切れることがない魂縛の鎖（魂鎖）に繋がれ、永遠にその魂を縛られ続ける。

しかし、目の前の悪霊は少し違うようだ。

本来ならば魂鎖に繋がれ動くこともできないはずだが、当初から悪霊は移動していた。

「まだ地縛霊になりきってないのか……？」

その可能性も捨てきれない。

「……だが、それも時間の問題だろう。それならば俺達にできる」とは一つしかない」

「完全な悪霊と化す前に滅する」

「……そうだ。もはや成仏させる事は不可能だ」

一瞬、神楽坂は悪霊を哀れむような表情を見せた。

「できれば、こうなる前に訴えてもしてくれればな……」

左手に持ったモップが光に覆われていく。

<……邪魔……ヲ……スルナツ！>

突然、周囲の生きた照明が激しく明滅したかと思うと、悪霊から激しい衝撃波が発生した。

これは彼女を十数メートル吹き飛ばした攻撃だが、神楽坂はそれをモップ一つで完全に防ぎ切った。

「無駄だ。もう、これ以上はやめろ」

流石の悪霊も動揺を隠せない。

両手を頭に当てて激しく喚きだし、それは僅かに残った理性が崩れていくかのような光景。

その光景を見ながら、神楽坂は悪霊に近づく。

距離は三メートルも満たない。

悪霊は戦意を喪失したのか目の前に接近しても攻撃してくることもなく、またブツブツと独り言を呟き始めた。

無抵抗の相手に攻撃を加える行為に負い目を感じつつも、神楽坂は光を放つモップを振り上げる。

そして数秒の間の後、振り下ろした。

悪霊は断末魔を上げる。

その身を二つに切り裂かれた悪霊は、霊体を維持することができずに足元からゆっくりと崩壊していく。崩壊した霊体は光の粒となって消えていった。

「……………」

神楽坂は無言のまま、悪霊が消滅するのを見届けるのだった。

悪霊が消滅し、明滅していた照明は全て元に戻った。

先程まで館内を飛びまわっていた無数のボールも、床に転がり二度と動き出すことはない。

「……………終わったな」

「ああ」

神楽坂は周囲の安全を確認した後、彼女を床にそつと寝かせた。

「ん？」

その時、彼女の首から提げられた小さな十字架に気が付いた。

十字架は掌に収まるくらい大きさ、繊細かつ必要以上の派手さがない素朴な造り。だが、その慎ましい見た目とは別に全体から神秘的な光が薄っすらと放たれている。

これを悪霊に向けていたのか、と神楽坂は思いつつも、その十字架に何処か懐かしさのようなものを感じていた。

「……床に寝かせておく訳にもいかないだろう。光志、保健室に運ぶしかないぞ」

「お、俺がか？」

「……他に誰がいる？」

「やれやれ……」

神楽坂は頭を掻きながら苦笑いを浮かべた。

体育館に突如現れた悪霊は、神楽坂と長緒の活躍により被害は最小限に抑えられた。幸い負傷者は無し、鋼線入り強化ガラスが数枚割れ、得点板が三基粉々になった程度で済んだ。体育館の広さに対しボールの数が少なかった事が幸運だったと言えるだろう。

保健室に運んだ青髪の女子生徒も気を失っているだけで無事だったが、彼女を助ける際に打撲を負った神楽坂は、逆に手当てを受けることになるのだった。

003：強制入部

昼休み。

神楽坂、長緒、吉原の三人は昼食を取るためにC校舎屋上にきていた。

六学の屋上は、金網のフェンスで囲まれているが学園の周囲を一望する事ができる。また、他校のよりも高い位置（C校舎は七階建て）にあるため風通りも良く、木製のベンチ（五人掛け）が数個設置されているので昼食を取る場所として人気が高いスポットの一つとなっている。（屋上でのボール遊びは禁止）

三人はベンチに座り学食で購入した調理パンを食べる。

「お前らが霊能力者だったとはなあ」

調理パンを片手に、吉原が意外そうに呟いた。

「大したことじゃねえさ、他の奴等よりほんの少し靈感があるだけだ」

神楽坂が軽く付け加える。

「そうなのか健一？」

「……ああ」

『霊能力』

魂を持つ全ての生物が使用することができる特殊な力だ。しかし、この力は誰もが使えるのではない。

人は霊能力を潜在した能力として生まれながらに持っているが、それを引き出しコントロールする為には『魂の覚醒』と強い精神力が必要となる。そのため本物の霊能力者の数は少なく、その数は年々減少している。

「霊能力ってあれだろ？ TVでたまにある心霊番組で、封筒にいられた物を言い当てる透視とかってやつだよな？」

「TVに出てくる霊能力者は大半が偽者だけだな。ってか直明、透視で女子の服を透かして見たいとか考えてるんじゃないやねえだろうな？」

「は、ははは……バレた？」

「やれやれ。霊能力ってのは、あつたらあつたで結構面倒なんだぜ？」

「そうなのか？」

「考えてみるよ、靈感があるって事は毎日グロイモンを嫌でも見させられるんだぞ？」

「た、例えば？」

吉原は生唾を飲んだ。

「駅なんかに行くと電車に轢かれた人間の――」

「ぶっ！！？ こ、光志もう十分だ、それ以上喋るなっ！」

吉原は飲んでいたコーヒー牛乳を思わず噴出した。

「……汚いぞ。ここには俺達以外にも昼食を取りにきている生徒がいることを忘れるな」

「わ、わぁってるよ！ 光志が変なこと言うからだろっ！」

実際のところは霊能力者も力のコントロールができるので、必要外

の情報（霊など）を遮断して意識的に見ないようにすることが可能だ。それ以前に、吉原が想像したような姿で霊となって現れることは殆どない。

「き、汚ねえなあ」

神楽坂もコンクリートの床にぶちまけたコーヒ―牛乳を見て苦笑う。

「だ、誰のせいだと思ってんだよっ！」

「わ、分かった分かった俺が悪かった」

神楽坂は吉原を宥めながら、少し前から気になっていたことを思い返した。

それは体育館に現れた悪霊についてだ。

悪霊が現世に現れただけでも稀な事だが、地縛霊に近い状態であったことと、死ぬ間際に身に着けていたと思われる『白衣』。

地縛霊は名の通り、死んだ場所から一步も動く事ができなくなった霊のことだ。それはつまり、あの悪霊はあの場所で死んだということになる。

（確か学園は今年で百周年だったな。第一体育館は一度建て直されたが、その間事故があったとは噂すら聞いたことがねえ。学園が建つ前に命を落としたと考えるのが妥当だが、とても百年前の人間には見えなかった。……本当に地縛霊に成り掛けたのか？）

考えてみるが、現時点では答えは出ない。

「光志っ！ 聞いてんのか!？」

「あ、ああ。わりい、少し考え事してたぜ。それで何か言ったか？」
「だからよ、俺が雑巾取りに行ってる時に藍苑先生から、光志と健一に伝言を頼まれたんだよ」

地面に零したコーヒー牛乳は、神楽坂が考え事をしている間に雑巾で拭き取ったようだ。

「伝言？」

神楽坂は聞き返す。

「昼飯食ったら第一体育館の教官室に来いってさ」

「よりによって教官室かよ」

「くっそ〜！俺も教官室じゃなかったら、無理矢理代わってでも藍苑先生の呼び出しを受けるんだが……あそこは赤鬼（山城）が住む魔窟だからなあ光志頑張れよ〜？」

「できれば俺も代わって欲しいんだが……」

「……光志、昼休みが終わるまで後二十分ほどしかないぞ」

携帯の待ち受けを見ながら長緒が立ち上がる。

「そうだな。それじゃ行くとするか」

神楽坂と長緒は、第一体育館教官室へ向かうのだった。

教官室は第一体育館の最後部に位置している。
ここは体育教師の詰め所として設けられたが、この部屋を利用し

ている教師は殆どいない。

学園が広すぎることに災いし、仕事があるたびに教官室と職員室の長い距離を往復しなければならなかったため教師陣の不評をかい、現在は山城と一部の教師のみが使用しているだけになっている。（他の体育教師は職員室で仕事している）

> i 3 0 2 7 4 — 1 3 2 2 <

教官室の扉を開けてミーティングコーナーの仕切りを少し進むと、一人の女性教師が机に向かって座っていた。赤い長髪に白衣を着た彼女は、神楽坂と長緒の到着に気付くと回転椅子をクルリと反転させて脚を組む。

「遅かったわね二人とも、待ってたわよ？」

この女性教師は三学年主任『藍苑涼子』あいそのりようこ二十五歳。体育教師ではなく、科学担当の教師だ。胸元が大きく開いた露出の高い服にミニスカート、艶のある紅い口紅に同色のハイヒールを履く姿は大人の妖艶さを漂わせる、男子生徒に人気が高い教師だ。

「それで、何で俺達を呼んだんだ？」

「ま、とりあえず座って。話はそれからするから」

藍苑に勧められ、神楽坂と長緒はミーティングコーナーに移動する。

ここは主に来客の応対や業者との打ち合わせをするための場所ので、大きなテーブルを三人掛けの長椅子が挟む形に設置されたミーティングセットが二セット設けられている。

近くの長椅子に座ろうと仕切りの中に入ると、そこには思いがけない人物が座っていた。

その人物は体育館で神楽坂が助けた女子生徒だった。

彼女は神楽坂に気付くと、軽く会釈する。

神楽坂も釣られるように会釈を返し、同じ席に座るのは気恥ずかしかったのか長緒と共に反対の席に座った。

三人が揃ったことを確認した藍苑は机から黒いファイルを二つ取り出すと、テーブルの前に自分の椅子を移動させ脚を組んで座る。

「それじゃ、本題に入るわね。第一体育館に悪霊が現れたってのは本当のこと？」

「ああ、本当だぜ。ってか目撃者が沢山いるはずじゃねえか？」

藍苑の質問に神楽坂が答える。

「館内のボールが勝手に動きだしたって話？ それは勿論聞いてるわよ、でも悪霊を直接見た生徒がいないのよ」

悪霊が現世に姿を見せた時、生徒たちは既に避難を完了していた。その姿を確認したのは神楽坂、長緒、そして目の前に座る女子生徒の三人のみ。

「で、間違いないのね？」

「ああ」

「そう、参ったわねえウチの学園に悪霊が出るなんて、上にどう報告しようかしら」

藍苑は思わず顔を手で覆った。

「ありのまま報告すりゃいいんじゃないのか？」

「そうしたいんだけどね、学園に悪霊が出たのは四十年振りなのよ」
「四十年!？」

神楽坂は驚きの声を上げた。

藍苑は持っていた黒いファイルを開き、内容を読み上げる。

「現れたのは男性、グラウンドの中央付近で独り言をブツブツと呟いていたらしいわね」

「その悪霊はどうなったんだ？」

「独り言を呟いたあとすぐ消えたみたい、それ以来現れてないわね。それよりも、天河さんが倒せなかった悪霊を貴方たち二人が倒したそうね？」

「天河？」

「目の前に座ってる彼女よ」

初めて紹介された彼女は、少し恥ずかしそうな表情を浮かべていた。

「初めまして。三年一組の天河^{てんかわまこと}摩琴です。あの時は助けてくれてありがとうございます」

天河は二人に向かって微笑んだ。

「べ、別に礼を言われるようなことはしてねえさ。俺は神楽坂光志、こっちは長緒健一、二人とも五組だ」

感謝されることに慣れていない神楽坂は思わず視線を逸らした。

「貴方たちも知ってるでしょうけど、天河さんは学園が唯一把握している霊能力者なの」

「た、大した力は持っていないですけどね」

天河が控えめに付け加える。

「それで、聞いたことないかもしれないけど『除霊組織』って知ってる？」

「除霊組織？　そっぴや何年か前に聞いたことあるな」

人が多く集まる学校という場所は、霊的存在を惹きつける傾向がある。それらは稀に危害を加えてくることがある為、霊能力を持つ教師、生徒で構成された組織を編成し対処することが昔からの決まりだ。

しかし、四十年ほど前から悪霊と妖怪の出現が著しく低下したのと同時に、除霊組織の必要性も薄れ始め、今では完全に風化してしまっていた。

「……つまり、今回の件を考えて『除霊組織』を立ち上げると言いたいのか先生？」

「流石、察しがいいわね長緒君。あ、これ強制だから」

藍苑は神楽坂と長緒に向けてニツコリと笑う。

心なしが天河も苦笑っているようだ。

「ち、ちよつと待ってくれ、俺と健ちゃんに新しく作る組織に入れたのか？」

「そうよ、まあ組織っていつでも大げさなものじゃなくて、部活動や委員会活動みたいなものかしらね。なに？　神楽坂君『除霊部』に入るのは嫌なの？」

「嫌もなにも強制ってなんだよ」

神楽坂は苦笑う。

初めから神楽坂が嫌がることを予想していたかのように、藍苑はもう一つのファイルを開いた。

「神楽坂君、科学の単位がヤバいわねえ」

「何を急に……」

激しく嫌な予感がする神楽坂。

「三年に進級したばかりだけど、去年も確か追試を数教科受けてたわよねえ？」

「今年も追試って言いたいのかよ」

「……違うの？」

「う……」

有り得なくないことに神楽坂は言葉が詰まった。

藍苑は更に追い討ちを掛ける。

「除霊部に入れば科学以外の単位も、ある程度優遇してあげられるけど。」

それとも、留年したい？ 長緒君と一緒に四年生に進級できないわよ？」

国立である六学の最大の特徴は四年生制度であることだ。

勿論、四年で卒業するメリットは高く、また、希望者は通常と同じく三年で卒業することも可能だ。

二学年時の成績を振り返ると最早、神楽坂に選択肢は無かった。

「無言のまま承諾って事でいいわね？ 長緒君は勿論入ってくれるわよね？」

「……どちらにせよ強制だろう？　光志が入るなら俺も入らせて貰うさ」

「わ、わりい健ちゃん」

「はい、決まり。詳しいことは委員長の……まあどっちでもいいわ。天河さんがリーダーだから彼女から聞いてね」

テーブルにうな垂れる神楽坂を尻目に、藍苑は開いていたファイルを両手で閉じる。

「せ、先生、単位を餌にして釣るっていうのは流石に……」

「いいのよ天河さん。これ位はしてあげないとやる気でないでしょ？　それじゃ私はそろそろ職員会議に出ないといけないから、貴方たちも昼休みが終わる前に教室に戻りなさいね。あ、そうそう、他にも霊能力者がいたら勧誘しといてねえ」

そう言った後、藍苑は手をヒラヒラを振って教官室を後にしていた。
った。

室内には神楽坂、天河、長緒の三人だけが残る。

「と、とにかく今日からよろしくね、神楽坂君、長緒君」

「……ああ。こちらこそよろしく頼む」

「マジかよ……」

かくして、神楽坂は単位を餌に除霊部に入部させられたのだった。

翌日の昼休み、神楽坂と長緒はC校舎三階にある二年七組へ向かっていた。

C校舎の三階から四階は普通科二年生の教室にあてられている。構造はA、B、C、共に共通しており、校舎の高さや形は違えど廊下を挟んで左右に教室を配置している基本的な造りは同じとなっている。

今回ここに来た理由はただ一つ、ある二人を除霊部員に勧誘する為だ。

「やれやれ、毎度の事ながら健ちゃんも大変だな」

廊下を歩く神楽坂の隣に長緒の姿はない。

同情するような口調で呟く神楽坂は、降りてきた階段を振り返る。その付近には大勢の女子生徒が集まっていた。

彼女達の黄色い声からは長緒の名前が聞こえる。

長緒はその容姿から女性に絶大な人気がある。それは他校に非公式のファンクラブが存在するほどだ。しかも、自分達のクラスがある階以外には滅多に行かない（神楽坂たち普通科三学年は五階から六階）こともあってか、ちょっとした騒ぎになってしまっていた。

因みに神楽坂は女子に余り人気がない。

中学生時代は荒れていた（長緒もだが）こともあり、今では近寄りがたい不良として認識されているようだ。

「ん？」

目的地に向かう途中、神楽坂は壁に設置されたグリーンの掲示板に除霊部員を募る張り紙に気付いた。

「もう募集かけてるのか……」

内容を見てみる。

『きたれ！霊能力者！君の隠れた力が学園を救う！』

六学除霊部

希望者は第六委員会塔か藍園先生まで』

「……」

神楽坂は言葉もなく苦笑う。

しかも、このポスターは二種類あるようで内容は殆ど同じだが、入部希望者は神楽坂や長緒、部長でもある天河に直接伝えても良い、と名指しされているものもあった。

「これを見ると余計やる気が失せるな」

気だるさを感じながら七組へ向かう。

廊下を行き来する生徒の間を通り抜けながら、目的地まで後十メートルほど近づいた時、教室内から女子生徒が廊下へ出てきた。

女子生徒はまるで変質者にでも遭ったかのような悲鳴を上げながら、神楽坂の横を走り抜けていく。

「な、なんだ？」

七組で何か問題でも起こったのか、と思っていると今度は男子生

徒が飛び出してきた。

「電話番号おおおお!!」

神楽坂の方へ走ってくる男子生徒の目は大きく見開かれ血走っている。

手足を対角に大きくスイングさせ、視認できそうなくらいの息を鼻から吐き出すその姿は正に変質者。

「……」

頭痛を覚えた神楽坂は思わず手で額を押さえる。

そして、男子生徒との距離が近くなったところ見計らい、左腕を水平に肩の少し上付近に上げた。

「ぐはあああつ!?!」

神楽坂の左腕が男子生徒の首元にめり込んだ。

走る勢いのままリアットを受けた男子生徒は、言葉にならない声を上げながら下半身は慣性により前へ、上半身はその場に残る形で仰向けに倒れた。

「だ、誰だよ……こんな所でリアットする奴はあ……」

床に背中を打ちつけ、のた打ち回る男子生徒。

「何やってんだ上村」

「か、神楽坂先輩……い、いや、ちょっとお近づきの印に携帯番号またはメアドでも可と……」

床で転げまわる彼は『上村裕也』かみむらゆうや

長緒に次ぐ長身で茶髪にタレ目、性格は見ての通り軟派で軽い。学ランの第一ボタンを外し、カッターシャツをズボンから出している格好だ。

神楽坂と長緒とは中学が同じで顔見知りであり、これでも数少ない霊能力者の一人だったりする。

「相変わらず馬鹿やってるな、お前」

神楽坂は壁に背中をつけて腕を組んだ。

「まあね」

床に仰向けで倒れたまま、真顔で返事をする上村。

「真顔でこっち見るんじゃない。……で、篠崎は教室にいるのか？」
「んにゃ、シノケは職員室に鍵取りにいつてるよ、次の授業は生物室だからさ」

シノケ、とは篠崎のあだ名。

「職員室か仕方ねえな。取り合えず上村、お前に話がある」

「気持ち嬉しいけど、そういった趣味は流石に……」

「……このまま頭を踏み潰してやるのか？」

「冗談です」

「馬鹿やってないで、さっさと教室に入れ」

「へいへい」

上村は軽口を言いながら立ち上がり、学生服に付いた埃を払う。

「そついや、長緒先輩はどうしたんだい？」

「健ちゃんならあそこだ」

親指で後方を指す。

階段付近は未だに女子生徒の人ばかりで埋め尽くされていた。

「う、羨ましい……なぜ長緒先輩だけが……」

「少なくとも、変顔で女子生徒を追いかけるような事はしないから
だろ」

「し、失礼なっ」

「いいからさっさと行け！」

付き合い切れない神楽坂は、上村の尻に軽く蹴りを入れて教室に
押し込んだ。

それと同時に神楽坂の携帯が振動した。

收拾が付かなくなつて助けでも求めてきたのかと思ひながら、学
生ズポンのポケットから携帯電話を取り出して待受け画面を見る。

電話は長緒からではなく篠崎からのメールで、神楽坂が除霊部に
入っていることを掲示板の張り紙で知ったのか、ご丁寧に皮肉を交
えながらも直ぐにA校舎二階にある第一生物室へ来いとの事だった。

「生物室？」

「どうかしたのかい先輩？」

「いや、篠崎が今すぐ生物室に来てよ」

文面には具体的な事は書かれていない。

同じクラスの上村にメールを送るならまだしも、学年が違つ神楽
坂を生物室に呼ぶ理由が分からない。

「仕方ねえ、どのみち篠崎も拉致るつもりだったんだ。行つてみる

か」

神楽坂は長緒がいる階段付近をもう一度見てみる。
女子生徒の数は更に増え、どうやら暫くは解放して貰えそうにな
さそうだ。

「今、無理に割り込んだら女子の皆さんから袋叩きにされそうだね
え」

「分かってんじゃねえか、行くぞ」

「え？ 俺も？」

「当たり前だっ！」

神楽坂は嫌がる上村の後襟を引っ張った。

「相変わらず、A校舎はボロいねえ」

A校舎二階廊下を歩く上村が呟いた。

学園創立から建つA校舎は、建造物保存から取り壊しはせず
当時の外観をほぼ完璧に保っている。安全上、施設として使用できる
ように補強や補修はしているが、一部の教室は当時のまま使われて
おり第一生物室もその一つだ。もちろん設備や備品などは新品だが。

「ボロじゃねえ、風情があるといえ」

「神楽坂先輩は古いものが好きなのかい？ 意外だねえ」

「そんなんじゃねえよ、嫌いじゃないだけだ」

「い、いや、それもう好きだって言ってるようなものだよね？」

神楽坂と上村の目の前に、第一生物室と表示された教室プレートが見えてくる。

生物室の扉は木製の引戸式、廊下側の木枠窓は全て曇りガラスだ。この教室だけを見ると最早取り壊し寸前の旧校舎と表現してもおかしくはない。

「お、シノケ発見」

上村は手でひさしを作る。

生物室の黒板側扉の前には、男子生徒が一人立っていた。

「篠崎、あのメールは一体なんだ？」

「やっときたか先輩」

神楽坂の呼びかけに気付いた男子生徒は此方を向いた。

彼の名は『篠崎慶斗^{しのさけいと}』上村と同じく二年七組。希少な力、霊能力を持つ。

深緑の髪に鋭い目、神楽坂と同じように学ランのボタンを全部外し、大きな英字が入られたグレーのＴシャツ（神楽坂は無地のブラック）を学生ズボンから出す格好はお世辞にも優等生とは言えない。そして、何より目に付くのは右手に持っている銃刀法違反と言われても仕方がない日本刀だ。

「ってか、カミさんも来たのかよ」

カミさん、とは上村のあだ名。

篠崎は左手に持っていた教科書を廊下の隅に投げた。

「ま、どうせ次の授業は此处（生物室）じゃん？」

「そりゃそうだな」

「篠崎、ソレ（日本刀）は常に持ってんのか？」

「まあな、一応帯刀許可されてるしな俺の家は」

そう言うと、篠崎は刀を腰に差して腕を組んだ。

「何時の時代の人間だお前は……。まあいい、それでメールの事だが？」

「生物室の中を覗いてみな先輩、ただしこっそりな」

「こっそり？」

疑問に思いつつも、神楽坂は今いる黒板側の扉を少し開けて室内を覗いてみた。

日光から薬品などを守るためか窓は分厚い遮光カーテンで遮られ、蛍光灯が消された室内は薄暗くなっている。正面には顕微鏡や備品が置かれた教師用の実験台があり、その奥には薬品棚と準備室へのドア、左には流しが付いた学生用実験台が確認できた。

「特に異常はないみたいだが……」

その時だった。

室内から不気味な呻き声と、何者かが徘徊しているかのような音が聞こえてきた。

僅かな扉の隙間からでは音しか聞こえず、何が動いているのかまでは確認する事ができない。

神楽坂は扉に手を掛ける。

木製の扉（引き戸）を慎重に開くと室内の一部が見えた。

室内の後尾には実験に使われる備品が置かれた棚と、人体・骨格模型が一体ずつ並べて置かれているが、人体模型だけが消えている。

（他の授業で持っていたのか……？）

しかし、部分模型なら何とか持ち運ぶことはできるかもしれないが、消えた人体模型は高さ175cmの全身模型だ。多数のパーツで構成され内臓も入った模型の重さはゆうに二十kgを超える。

「……!？」

神楽坂の視界に、全身裸の男性が映りこんだ。

背中を見せる男性の頭は綺麗なスキンヘッド、両腕をダラリとさせ上半身の力が抜けた状態で室内を徘徊している。

全裸であること自体が問題だが、学園にスキンヘッドをした生徒や教師は存在しない。

「ぶっ!？」

神楽坂の下から、しゃがんで覗いていた上村は思わず噴出した。

その音が聞こえたのか、全裸の男性は立ち止まりゆっくり此方を振り返った。

その男性は人間ではなかった。

瞳は混濁し、顔の縦半分の皮膚がなく赤々とした筋肉が露出している。その範囲は顔だけではなく、胸部、腹部と続いて足先まで亘っておりその全てが脈動しまるで本物のような質感を持っていた。

「上村! でかい声を出すんじゃない!」

上村の頭を平手で叩くが既に遅かった。

<アゝアアアアアッ——!!!>

神楽坂と上村に気付いた左半身の皮膚がない男性は、口腔が半分露出し歯が見える口で不気味に笑うと両腕を上げて突進してきた。

「……し、閉める上村っ!!」

「うげっ!？」

慌てて扉を閉める。

数秒後、扉が変形するかのような衝撃が襲う。

「お、押さえる! 篠崎お前も手伝えっ!」

「だから、こっそり見ろって言っただろっ!」

「このアホ(上村)に言え! いいか、絶対外に出すんじゃないぞっ!」

「ひいっ!」

三人は必死に扉を押さえる。

五センチにも満たない木製扉の向こうから呻き声が聞こえ、何度も何度も扉を叩いてくる。

幸い、扉を壊す力はないようだが、問題は構造だ。

溝に嵌められた引戸式の扉は正面からの強い衝撃に弱い特徴がある。ましてや溝が浅い生物室の扉ならば尚更だ。

「せ、先輩よ! 鍵は!」

「駄目だ! どのみち破られるっ!」

鍵を掛けても浅い溝から外れてしまえば、なし崩してきに突破されてしまう。

「じゃあ、どーすんのさ先輩っ!」

「俺に言うな! とにかく押さえ続けろっ!」

三人は力の限り扉を押し留める。
暫くすると、諦めたのか扉を叩く音が消え静かになった。

「流石に焦ったな……」

神楽坂は冷や汗を拭う。

「あんなものが校内を走り回ったら大騒ぎどころじゃ済まねーな」
「ってかなに？あの露出魔は……」

三人はその場に座った。

「学校の怪談で良くあるだろ、『動く人体模型』ってのが」

「マジかい……怪談話じゃなかったんだ」

「今の世の中、幽霊が出ること自体珍しいからな」

「先輩、ありや低級霊が人体模型に入り込んでるぜ？」

低級霊。比較的力の弱い霊のことで怪談話に出てくる超常的現象は、大半がこの低級霊が引き起こしている。体育館に現れた悪霊とは違い、現世に現れる力はないが人体模型のような物体に取り憑いて自らの霊体^{エクトプラズム}で包み、あたかも本物のように見せることができる。

「て事は、あの変態露出魔は、元は人体模型だったのかい……」

「まあ、普通に考えて、体の左半分が解剖された状態で平気な人間なんていないだろ」

「雑魚には違いねーんだからよ、突入してぶった斬れば良いんじゃないか？」

篠崎が物騒なことを言いながら、持っていた刀の鐔を親指で押し上げる。

「低級霊ごと模型を真つ二つにする気か」

「じゃあ、どーすんだよ。低級霊が自然に消えるなんて事はないぜ？」

「あと十五分くらいで昼休みが終わっちゃうよ」

神楽坂は考える。

この場に長緒がいれば直ぐに解決策が見つかるかもしれないが、女子生徒に囲まれた状態では電話に出ることはできないだろう。

除霊部の部員として、部長である天河に連絡しようとも考えたが、まだ携帯番号を教えて貰っていない。

「篠崎、人体模型の様子はどうなってる？」

「室内を徘徊してるぜ、やっぱ知能はそれ程高くないようだな」

神楽坂が考えている間に、上村に肩車をさせて内部の様子を伺っていた篠崎。

廊下側の窓は曇りガラスだが、上部は通常ガラスだ。それでも三人の中で一番背が高い上村に肩車をして貰わなければならない高さだ。

「お、重い……」

「カミさん、もういいぜ」

降りる篠崎。

「で、どーするよ先輩」

「……」

神楽坂は無言のまま、生物準備室を書かれた教室プレートを見上げた。

「篠崎、そっちの両端を持て」
「分かったぜ」

神楽坂と篠崎の手にはベージュ色のカーテンが握られていた。
この生地が分厚いカーテンは光をほぼ100%通さない一級遮光カーテンで、生物準備室から拝借してきたものだ。

「これなら捕まえた後、透けて見えることはない」
「先生に見つかる前に早いところやった方がいいんじゃない？ もし山城先生にでも見つかったら……」

上村の顔が青くなる。

「それなら心配ねえ、二人とも作戦は分かってるな？」
「分かってるよ。俺が扉を開けて、あの変態模型が出てきたところを先輩とシノケがカーテンで捕まえる。そして第一体育館に運ぶんだっただね」

上村が復唱する。

「そうだ。狭い生物室で暴れられるより断然マシだからな」

神楽坂たち三人は配置につく。

まず、上村が扉の戸袋（扉を開いた時の収納スペース）に待機。
これは素早く扉を開くためと捕獲の邪魔にならないようにするため

だ。続いて、神楽坂と篠崎が広げたカーテンの両端を持って待ち構える。人体模型が廊下に飛び出してきたところを捕まえる作戦だ。

傍から見れば、三人がふざけているようにしか見えない。神楽坂も自分達が変わった事していると分かっているだけに、誰にも見られない事を心の中で祈った。

しかし、見られたくない時に限って、誰かに見られてしまうものだ。

神楽坂たちの方へ女子生徒が一人歩いてくる。三人の異様な格好に気付いた彼女は一旦立ち止まり、此処で何をしているのか解せない表情を見せながら、カーテンを広げて持つ神楽坂と篠崎の背後を避けるようにして通過していった。

「……今の女子、俺らのこと馬鹿だつて絶対思ってるぜ」

「言うな、俺だつてそう思ってたからよ……」

顔を俯ける神楽坂は恥ずかしさよりも情けない気持ちに襲われた。

「うん？ 誰か通ったのかい？ 女の子だったら携帯番号聞いておくべきだったかな……」

上村には遮光カーテンが死角となり女子生徒が通ったことは知らない。

「お約束やってんじゃねえ！」

「へいへい」

上村は軽口を言いながら床に右膝を付き、左手を扉の取っ手に掛ける。

「それじゃ、いくよ。三、二、一つ……！」

三秒カウントした後、上村が勢い良く扉を開けた。

扉を開けた直後に人体模型が飛び出してくると予想していた神楽坂と篠崎は、何時でも動けるようにためを作り構える。

「……？」

が、何時まで経っても人体模型は姿を見せない。

「先輩、やっぱ扉を開くだけじゃ反応しねーんじゃないか？」

「かも知れねえな。上村、ちょっと罠になれ」

「あの変態を釣れつてのかいつ！？」

「お前以外に誰がいるんだ！」

「うっ……」

上村は神楽坂の理不尽な命令に涙目になりながらも、覚悟を決めて室内に一歩足を踏み入れる。

と、同時に背中を見せて立ち竦んでいた上村は、血相を変えて廊下へ逃げ出してきた。

「で、出た……っ！」

<ア アアアー……っ！！！！>

上村の叫びから数秒後、大きな口を開けた人体模型が飛び出した。

「篠崎！ 今だっ！」

「お、おっっ！」

人体模型が廊下に出た瞬間、神楽坂と篠崎は遮光カーテンを広げ

て行く手を遮った。

速度があつたので上手く捕まえられるか心配はあつたが、人体模型を包み込む事に成功。神楽坂は人体模型に大外刈（柔道の足技）を仕掛け真後ろに転倒させる。

「簀巻きにしろっ！」

「ひく、布越しでも触りたくないよ」

「大人しくしやがれっ！」

カーテンの中で暴れる人体模型を押さえ付け、手際よく包む。

まるで巻き寿司のようにコロコロと巻き上げていく光景は、少し間抜けな気もする。

「な、生暖かい……柔らかい上に気持ち悪い……ホントに元は人体模型なのかいこれ」

「霊体が模型を覆っているからな。というか上村、お前一応霊能者だろ」

「だからって変態に慣れてる訳ないよっ」

「カミさん、この程度で気持ち悪がってたら霊とは戦えないぜ？」

人体模型は呻き声を上げながら抵抗を続ける。

「ぎゃああああー!!？」

突然、人体模型の左手に顔を掴まれた上村は悲鳴を上げた。

カーテンの隙間から出た左手に皮膚はない。

「いちいちビビってんじゃねえ！」

神楽坂は上村の顔を掴んで離さない人体模型の左手を引き剥がし

てカーテンの中に突っ込んだ。

「人目に付く前に体育館に行くぞ！」

「後ろは俺が持つぜ、先輩」

カーテンで簀巻きにされた状態になっても暴れ続ける人体模型を、神楽坂、篠崎の二人で押さえながら神輿のように担ぎ上げる。模型自体の重さは二十？程度なので一人でも十分だが、抵抗されることを考えると二人でしつかりと担いだ方が都合が良い。

狼狽する上村に先導させながら、神楽坂たちは第一体育館へ向かう。

第一体育館とA校舎の二階は渡り廊下で結ばれている。

この通路は普段余り使われないので、人目に付かずに運び込む事ができる。人体模型を担ぐ神楽坂と篠崎、そして先導する上村の三人は渡り廊下を通り、第一体育館二階から階段を降りて一階フロアへと移動した。

「先輩、昼休み終了のチャイムが鳴っちまったぜ？」

「人目は避けれそうにないな……」

館内には体操着姿の生徒達がちらほらと入ってきていた。

第一体育館以外に広くて立ち回れる場所はグラウンドしか残されていない。しかし、此処からではかなりの距離を移動しなければならぬ。当然、外で授業を行うクラスもあるはず。どの道、人目に付いてしまうことに変わりはないが、できるだけ大きな混乱は避けたい。

神楽坂は少し考えた後、担いでいた人体模型をおもむろに床へ投げ捨てた。

「な、何してんだ先輩！」

「いいから見てる」

床に転がった人体模型は、自由になるべくカーテンを掻き分けて脱出しようとする。

その光景を館内に入ってきた生徒達も注目する。
モゾモゾと動いた後、人体模型はカーテンの包みから頭を出した。スキンヘッドの頭に、左縦半分の皮膚がない。低級霊に取り憑かれ本物と遜色ない質感を持つ生々しい顔を見た生徒達は悲鳴を上げながら一人残らず逃げ出した。

「ま、これで騒ぎは最小限になった。後はさっさと除霊するだけだな」

「あいつらには、トラウマを植え付けただけのような気がするけどな」

篠崎がつっこみを入れる。

「霊視を使える奴がいれば、こんなまどろっこしい事をしなくて済んだんだが……」

人体模型の動きに注意しつつ、神楽坂は近くの壁に立て掛けてあったフロア用モップを手を取った。これは以前、体育館に現れた悪霊と対峙した時に使ったものと同じタイプだ。

「先輩、模型が壊れるんじゃないのか？」

「お前の刀じゃそうなるだろうな。」

右手に持ったモツプの先を人体模型に向ける。

人体模型は立ち上がった後、その場に立ち尽くしたまま周囲を見回している。生物室から広い体育館に連れてこられ環境が変わった事に戸惑っているようだ。

そんななか、人体模型は三人の中の一人に狙いを定めた。

狙われたのは上村。人体模型は口腔を半分晒した口でニヤリと笑うと上村に向かって突進する。

「な、何で俺えゝ!？」

上村は必死の形相で逃げる。

人体模型は両手両足を大げさに振りながら追跡。

その光景を見ながら神楽坂は、昼休み二年七組の前で女子生徒を追いかけていた上村の姿を思い出した。

「……健ちゃん風に言つと、因果応報つて奴だな」

逃げる上村と、追う人体模型は、神楽坂と篠崎の周りをグルグルと周回する。

何周かした後、人体模型は標的を変えたのか神楽坂と篠崎に向かって突進してきた。

二人は反射的に身構える。神楽坂はモツプを構え、篠崎は右半身になり左手で鯉口を切る（刀の鰐を親指で押し上げる動作）。

「篠崎、離れてろ」

普通に攻撃しては低級霊を倒すことはできても、憑依された模型を破壊してしまう。

だが、神楽坂には問題を打開する策があった。

模型に損傷を与えずに内部にいる低級霊だけを滅する方法はただ一つ。自身の霊気を直接模型に流し込むこと。だが、これは霊力のコントロールが難しい。力を入れ過ぎれば模型を破壊してしまい、逆に弱ければ低級霊を倒すことはできない。絶妙な力加減が求められる。

人体模型との距離、五メートル。

神楽坂は持っていたモップは反転させ、柄を前に構え直して精神を集中させる。

体から発生する霊気はモップへと流れ光り輝く『帯霊』した状態になるが、前回ほどの輝きはない。

「仕方ねー——」

邪魔にならないように篠崎がその場を離れようとしていた時だった。

目前に迫っていた人体模型は床に躓いたのか、足を縛らせ両手を前に出して俯けに倒れる。その際、上半身の各パーツが外れ丁度目の前にいた篠崎に降りかかった。

篠崎はそれを頭からもろに被る。

何が起ったのか理解できず、茫然自失の状態に陥った篠崎は右手に何かを持っている。

それは鼓動を続ける模型の心臓だった。

「シ、シノケ大丈夫かい！？ た、立ったまま気絶してるよ……」

上村が篠崎の面前で手を振るが反応はない。

「……まあ無理もねえな」

神楽坂は、足元を内臓に囲まれ心臓を持ったまま立ち往生を遂げた篠崎に同情した後、俯けに転倒した人体模型を見据える。

人体模型は呻き声を上げながら立ち上がるうとしているが、その動きは亀のように鈍く、左腕、右足、右腕、そして左足と四つん這いになりながら緩やかに体を起こす。

そして、垂れ下がっていた頭が上を向いた瞬間。

神楽坂は帯霊していたモップの柄先を、人体模型の眉間に押し当てた。

モップから霊気が流れ込み、まるで電流のように人体模型の体内を駆け巡る。

人体模型は苦しそうな声を上げるが、体が硬直し動けない。

そして、無数にある体の繋ぎ目から蒸気のように白い煙を噴出させた後、力を失った人体模型は重力に負け、その場に崩れ落ちた。

「……よし、何とかなったな」

手応えを感じた神楽坂は、僅かな白煙が残る人体模型を確認する。生々しい質感と、脈動していた臓器類、篠崎が持っていた心臓は全て元の無機質な模型に戻っていた。

「やったね、先輩」

上村は元に戻った際に床に転がった人体模型の頭部を拾い上げ、今までのお返しと言わんばかりに頭を数回軽く叩く。

「気持ち悪いんじゃないのか？」

「プラスチックになったが最後、コヤツの命運もここまでよ」

調子の良い返事を返す上村。

「やれやれ。それで……篠崎はまだ立ったまま気絶してるのか」

「そーみたいだねえ」

「弁慶かよ。上村、模型を拾って引き上げるから篠崎を起こしておけ」

「へーい。おーいシノケー」

拾い上げた人体模型の頭部パーツを、篠崎の面前に持っていく。

「上村、ふざけてないでさっさとしろ」

「早く起きないと、人体模型とディープなキスをする事になる——
!？」

「ん？ どうした？」

疑問を感じた神楽坂は、床に散らばった模型を拾い集めながら上村を見た。

上村は模型の頭を両手で持ったまま硬直している。

そして、抜刀した刀を逆袈裟に切り上げた姿勢を取っている篠崎。斬られた上村の前髪がハラリと落ちる。

両手に持っていた模型の頭は、スイカを割ったかのように縦に真っ二つとなっていた。

「な、なにやってんだ篠崎！」

神楽坂の苦勞が一瞬にして泡となった瞬間だった。

「し、知るかよっ！ カミさんが悪ふざけするからだろっ！」

「シノケ、この程度でビビってたら霊と戦えないんじゃないかなかったわけ？」

「何もつともらしい事を言って責任逃れしようとしてんだよっ！」

お互いに責任の擦り付け合いが始まる。
しかも、それは一向に終わらない。

どうみても悪ふざけをした上村が悪いが、篠崎にも若干の過失がある。

神楽坂は軽く溜息を吐いた後、篠崎に言った。

「まったく仕方ねえな。おい、篠崎、上村」

「なんだよ」

「ん？」

「元もと勧誘するつもりだったんだが、お前ら『除霊部』に入れ」

「は？ 何をいきなり言ってるんだよ」

「『入れ』ってもう強制じゃん……」

「除霊部に入れば、除霊中の事故として報告できるだろ」

「だからって、何でそんな面倒そうな部に入らないといけねーんだよ」

唐突に言ったところで二人が簡単に聞き入れるとは神楽坂も思っていない。

神楽坂はまず、上村に言った。

「除霊部の部長は、三年一組の天河摩琴だ」

「入りますっ！！」

神楽坂が言い終わると同時に、上村は両踵を揃え右手を上げて敬礼をした。

上村入部決定。

「即答すぎるだろ……」

苦笑う篠崎。

「篠崎、お前はどっするんだ？」

「入部すれば本当に事故にしてくれるんだろうな？」

「まあな」

「……仕方ねーな俺もその除霊部に入ってやるよ」

「随分と素直じゃないか」

「ま、俺にも事情があるんだよ。いろいろとな」

篠崎は頭を掻きながら模型を拾い始める。

その様子を見ていた神楽坂に上村が耳元で呟いた。

「シノケさ、実家から余り問題を起こすなって釘差されてるんだよ、親父さん仁王像みたいな人だからさ」

「なんだその例えは……」

神楽坂は苦笑った。

低級霊に人体模型が乗っ取られるという予想外の事件が起ったが、当初の目的である篠崎と上村の除霊部への勧誘は成功した。

そして、頭を真つ二つにされた人体模型は、セロハンテープでとめて今も生物室に飾られている。

006：切り裂き事件

その日は普段の五組とは雰囲気違っていた。

何時もなら朝のHRが始まるまで、笑いながら雑談している五組の活気は見られない。生徒達は自分の椅子を持ち寄り、何個かのグループに分かれて会話しているようだが、聞こえてくる声を聞く限り明るい話題ではなさそうだ。

「みんな、どうしたんだ？」

登校してきた神楽坂と長緒は五組の異変に気付きながらも、自分の席に付いて鞆を机に置いた。

そこへ珍しく早くきていた吉原が近づいてきた。

「よう。光志、健一」

「直明、珍しく早いじゃないか」

神楽坂と吉原は軽く挨拶をし、長緒は手で応えた。

「まあな。それより昨日のニュースは見たか？」

「ニュース？」

「ああ。昨日よ、遂に捕まったんだよっ！」

「捕まったって、お前が？」

「ち、違いーよっ！ 善良な学生である俺が捕まる訳ねーだろっ！」
「結果を先に言っても分かるわけねえだろ」

吉原の相変わらぬテンションに、神楽坂は苦笑う。

「『切り裂き魔』が昨日、やっと捕まったんだよっ！」
「切り裂き魔……」

普段から情報番組は余り見ない神楽坂だが、その事件のことは知っていた。

隣町で起きた、女性ばかりを狙った連続切り裂き事件。
被害者の女性が一人にいるところを、後ろから声を掛け、振り向かせてから凶器のナイフで切り付けるといふ卑劣な犯行。その被害者数は二十人を越える。

広範囲に亘った事件は当初、複数犯かとも考えられたが、『女性を振り向かせて正面から切り付ける』『致命傷に成らないようにわざと急所を外している』といった行動が全ての事件と共通しており、単独犯又は組織的犯行であるとして捜査が行われていた。

「やっと捕まったのか」

同時に、クラスの様子が何時もと違う理由も理解できた。

「だよな、女の子の柔肌に切り傷をつけるとは許せねーよなっ！」
「そ、そうだな……」

正論を言っていると思うのだが、吉原が言うところの下心みたいなモノが見え隠れしてしまう。

「けどよ、確かに捕まった事は良いんだけど後味が悪かったよな」
「後味が悪い？ 捕まっても暴言を吐いた、とかじゃねえのか？」
「光志、お前本当に昨日のニュース見てねーのか？ 他の番組でも速報でテロップ流れたんだぜ？」

「昨日はテレビをつけてなかったからな。それより何が悪いんだ？」
「その犯人、正確には捕まったんじゃないかって自首してきたんだよ」

「自首？」

神楽坂がテレビやネットなどを通じて知っている情報だけでも、犯人は未だ自分を捕まえる事ができない警察に対して挑発のメッセージや電話を掛けてくるような人間だと認知している。とても良心の呵責に耐え切れず自首してきたとは思えなかった。後味が悪いとすれば、捜査による逮捕ができなかった警察であろう。

しかし、吉原の話はそこで終わらなかった。

「警察の目の前で自殺したんだよ」

「自殺……」

「……狂っているな」

自首する情報をマスコミにリークし、自分の自殺をテレビで見せ付ける」

二人の会話を隣で聞きながら本を読んでいた長緒が言う。

「健ちゃんはTV見てたのか？」

「……ああ。すっかりとな。単身、警察署前に乗り込んだ犯人は逮捕しに接近した警官の目の前で、自らの喉を持っていたナイフで掻き切って見せた」

「いかれてるよな。マスコミを集めてそれを全国中継させたんだぜ？」

吉原が付け加えた。

「……隣街を恐怖に叩き落した事件だからな。長期間警察が血眼になっても逮捕する事ができなかった連続犯が自首をする。犯人にとつては自殺すらもパフォーマンスに過ぎなかったのだろう」

「快楽殺人者って奴だよな、テレビも途中で画面が変わっちゃった

し……」

「……幸い死者は出ていないから殺人未遂だ。犯人曰く、『殺してしまつては長く愉しめない』だそうだ。典型的な性格異常サイコパスだな。……それと一つ、気になった事がある」

「気になる事？」

昨日の報道を知らない神楽坂は長緒に聞き返した。

「……ああ。犯人が自殺を図つた直後に映像が切り替わつたが、その前に叫んでいた内容がな」

犯人はナイフで喉を掻き切る前に、不気味な言葉を残している。その言葉の後にTVは画面を切り替えたのだが音声はシツカリと拾われていた。

——俺は死ぬ為に死ぬんじゃない……明日も明後日も、この楽しみを永遠に味わう為に死ぬんだ——

「俺、その言葉が頭から離れねーよ……そのせいで昨日は良く眠れなかったしさ」

思い出したのか吉原は身を震わせた。

「……最後に、見ていた者全てに恐怖心を刻み込む為だったのかも
しれないな」

「それだけならいいんだがな」

「……どちらにせよ、もう終わった事件だ。それはそうと今日の放課後、篠崎と上村を連れて第六委員会棟に集まるのだろう？」

「あ、ああ。そうだったな……」

話題が変わっても、切り裂き魔が最後に言い放ったという言葉が気になって頭から離れない。理由は分からないが神楽坂は一抹の不安を感じていた。

三つの校舎の中央には『中央広場』と呼ばれる場所があり、その周囲を二階建ての棟が六つ、円を描くように等間隔に建てられている。この棟は委員会棟と呼ばれ生徒会を含む各委員会の拠点として使用されており、生徒の自主性を重視する六学の伝統の一つが現れているといっても過言ではない。

放課後、神楽坂と長緒は新しく入部させた篠崎と上村と共に、第六委員会棟の二階にある除霊部室に赴いていた。今日から正式に除霊部として発動し、今後は第六委員会棟が本部となる。

「篠崎君、上村君、二名の入部届けは確かに受理しました。……で、何で始末書が一番上にあつたのかしら？」

長テーブルに一人座っている天河は、神楽坂から渡された書類に目を通したあと苦笑った。

彼女の正面には神楽坂、篠崎、上村の三人が立ち、頭真つ二つ人体模型事件と直接の関係がない長緒は近くのパイプ椅子に座って本を読んでいる。

「さっきも話したが、こいつ等を勧誘しに行つたところに偶然霊障が起つて、その除霊中に……な」

「神楽坂君が言ってる事は本当なの？」

天河は篠崎と上村に視線を向ける。

「本当であります天河センパイ！ もし疑われるのであれば僕のと（主に体）を好きに調べて頂いても——ぐへえ！？」

神楽坂の左ストレートが上村の右頬にめり込んだ。

「こつちも気を付けてたんだが、予想外のことに対応できなくてよ……」

篠崎は嘘を付くことが苦手なのか、僅かに顔を引きつらせながら視線を逸らしていた。

「はあ、分かりました。今後は気を付けて下さいね」

天河は篠崎が見せた表情の変化を見逃さなかったが、追求しても仕方が無いと感じたのか溜息を付きながら注意するに留まった。

「りよ、了解であります……！」

俯けに倒れたまま、手だけを上げて返事をする上村。

「そ、それじゃ、全員揃ったことだし自己紹介でもしましょうか？」

「あー部長。さっきの俺達のやり取りで薄々気付いてるかも知れないが、俺と健ちゃんと篠崎、上村の四人は顔見知りなんだ」

「え、そうなの？ もしかしたらそうかなって思ってたけど」

「……この二人は中学の頃からの付き合いだな」

「腐れ縁ってやつだよな」

「シノケの言う通りだねえ」

篠崎と上村はパイプ椅子を出して腰を降ろした。

「しかも、みんな霊能者だなんて凄い偶然ね」

「能力者同士は引寄せられるの性質があるのかも知れねえな。そういえば、部長」

神楽坂も近くのパイプ椅子に座る。

「あ、もし言い辛かったら名前でもいいよ？ と、いうか私も部長って呼ばれるのは少し恥ずかしいから普通に呼んで貰いたいかも」
「分かった、そうさせて貰うよ天河。そっちは誰か勧誘できたのか？ 前に霊能者の知り合いがいるようなことを言ってたが」

「うん、私も一応誘ってみたんだけど、遠慮させて貰うって断られちゃった」

天河は残念そうに首をゆっくり振った。

「そうか、まあ無理強いはできないし放課後の活動が主になりそうだしな」

「なんで放課後の活動が多くなるんだい？」

「は？」

霊能者として有り得ない質問をした上村に、神楽坂は呆れた。

「上村、お前本気で言ってるのか？」

「俺は何時でも本気さ……」

上村は親指で自分を指す。

「得意げな顔をされても……。幽霊や妖怪が夜に現れるのは何故か、分かるか？」

「ん〜分かった！ 人に見られるのが苦手なんだよ、シャイだから！」

「それじゃ人を襲ったりする理由にならねえだろうがっ！」

「ま、まあまあ落ち着いて神楽坂君。あのね、霊や妖怪は夜になると自身の霊力が高まるのよ」

「ふむふむ」

「霊力が高まれば今まで現世に出ることができなかった霊達も、より出易くなるってわけ」

霊や妖怪は、光と闇で分類すると限りなく闇に近い存在だ。

闇の眷属とも呼ばれる彼らは、光のある場所では霊力が著しく低下してしまうが、逆に闇が支配する夜になると、その力は倍増する。この特性により普段力が弱い霊も相手に自分の声を聞かせたり、周囲の物体を動かす（ポルターガイスト）といった現象を起こすことができるようになる。そして、稀に現れる強い力を持っている悪霊は更に力を得て、人間に直接危害を加えるようになるのだ。

「要するに、幽霊や妖怪は闇属性だから夜になるとパワーアップするんだね。よく分かりました天河先輩！」

「そ、そう？ それなら良かったわ」

「上村、お前絶対分かってて質問しただろ……」

「そんなことないよ？ 普段から霊のことは見ないようにしてたからねえ、どうせ現世に出てくる力を持った悪霊なんて滅多に、というか十七年生きてて御目に掛かったことすらないし。今時霊能力なんて持つても余り意味ないしなあ、霊視が使えればムフフなんだけど」

吉原と同じことを言う上村。

「つい最近出たがな」

「あー、なんか三年の授業中に、体育館に出たとか騒ぎがあったねえ」

「その騒ぎがあったから、私たち除霊部が組織されたのよ？」

天河が付け加える。

「ふ、分かってますよ、僕が除霊部に呼ばれた本当の理由っ！」

お約束をしながら上村は立ち上がり、長テーブルを挟んで座る天河の手を取った。

「え、え!？」

「僕と先輩は運命の赤い糸で結ばれていたんです……！」

顔をキラキラとさせながら、大げさなポーズを取る上村。

上村自身は格好良いと思っっているようだが、神楽坂たちから見れば冗談にしか見えない。しかも、上村が動く度に埃が舞い上がる始末。

神楽坂たちは軽く咳き込んだ。

「カミさん！　只でさえゴチャゴチャしてて埃っばいのに暴れんなよっ！」

> i 3 1 5 5 3 — 1 3 2 2 <

除霊部本部を含む第六委員会棟は長い間使われていなかったのか、室内後方には沢山の机や椅子が押しやられるように積み上げられ、床や壁、窓枠には大量の埃が蓄積し、それは上村が少し動いただけで舞い上がるほど。天河が座る長テーブルも薄っすらと埃が溜り指で軽くなぞるだけで鮮明に跡が付きそうだ。

「活動を始める前に、室内の掃除をしたほうがいいんじゃないか？」
「そ、そうだね。それじゃ今日は少し掃除をしようか」

上村の手を優しく振り解き、天河も神楽坂と一緒にあって室内を見回す。

「まさか、除霊部の初仕事が掃除とはよ」

「ぼやくな篠崎。掃除道具を取りにいくやつはジャンケンで決めるぞ」

「面倒くせーな」

神楽坂、天河、篠崎、そして少し離れた場所で本を読んでいた長緒の四人は、舞い上がる埃から逃げるように廊下へ移動する。

「……あ、あれ？」

その場にはポーズを付けたままの上村だけが残されていた。

007：切り裂かれた制服

言いだしつpegが負ける法則。

面倒ごとを提案した者が最終的に引き受ける羽目になってしまう、誰もが一度は経験した事があるだろう。

神楽坂は五人でのジャンケンで、五分の一の確立を一発で引き当ててしまった。

「……これも運命ってやつか？」

A校舎靴箱から掃除道具を取ってきた神楽坂は、自分に対する皮肉を挟みながら苦笑った。

左手に雑巾が入ったバケツ、右手には長箒を三本をそれぞれ持って中央広場の通りを歩く。

日は沈み始め闇がその勢力を広げていくなか、通りに設置されたレトロなガス灯（外観のみの電灯）に明かりが灯され、それにより学園が持つ西洋の雰囲気は一層引き立たされる。

実際この光景を見たいと思う生徒は少なくないようで、ベンチがある放課後の広場はちよつとしたスポットになっているようだ。もっとも、グラウンドからは部活動生の掛け声、校舎からはブラスバンドの演奏が聞こえてくるので静かに愉しむといったことは難しいかもしれないが。

「……？」

第六委員会棟が見えてきたところで神楽坂は急に立ち止まった。

(……なんだ、この気配は)

赤レンガの地面に掃除道具を置いて精神を集中させ、何の気配なのか、何処から発生しているのかを探る。

普段ならば気にしない程度だが、日が沈み始め夜になろうとしている状況で自分の靈感(センサー的な)に引っ掛かったことが気になった。

神楽坂は周囲を見回してみるが、学園には特に変わったところは見受けられない。

グラウンドからは運動部の掛け声、校舎からはブラスバンド部の演奏、と何時も通りの放課後だが……。

「!？」

突然、背後のA校舎から女子生徒の叫び声が学園内を駆け抜けた。同時に周囲にいた生徒たちも何事かと立ち止まる。

聞こえた悲鳴は、ちよつとしたトラブルが起こったかのような生半可な声ではなかった。

まるで怪物、この世に在らざるモノと遭遇してしまったかのような。

恐怖に吞まれながらも搾り出したような必死な声。

それは神楽坂をA校舎へ向かわせるには十分過ぎる声だった。

悲鳴を耳にし立ち止まっていた生徒たちの間を通り抜けながら、神楽坂は来た道を走って戻る。

女子生徒の悲鳴がA校舎の何処から聞こえてきたのか、正確な場

所は分からない。だが、それと同時期に感じられた気配と関係があるとするれば、彼女は間違いなく其処にいる。霊能者としての勘がそう告げていた。

A校舎の下駄箱、簀子すのこの前で靴を脱ぎ捨て校内へ。
ここで初めて、その気配が何であるのか判明した。

「邪気!？」

邪気とは悪霊が持つ霊気の名称だ。(妖怪は妖気)

神楽坂たちのような霊能力者と同様、霊気(邪気)を生み出す『霊力』は共通するが、その力から発生したものは正反対の『闇』性質を持つている。

「一階じゃないな、上か!」

近くの階段を上り、二階に辿り付く。

二階にある職員室からは、女子生徒の悲鳴を聞いた数人の教師が廊下に出て周囲を見回している。

神楽坂はもう一度精神を集中させて、邪気が何処から発生しているのか探る。

「……この階でもない、となれば三階しかねえっ!」

三階は特進科がある階だ。

文字通り、国公立大学や有名私立大学など難関大学進学に力を入れている学科で、除霊部部長の天河もこの科(三年一組)に所属している。

既に部活動も終わる時間帯だが、残って勉強でもしていたのだろうか。

「消えた……？」

三階に上がると僅かに感じられていた邪気は、全く感じられなくなっていた。

まるで、神楽坂から姿を隠すかのよう。

「消えた邪気も気になるが、先に女子を探さないとな
大したことないいいんだが……」

廊下を挟んで左右にある教室を一つ、一つ覗いて回る。

殆どの教室は施錠されていたが、その中の一つ、二年四組の教室だけが鍵を掛けられておらず更に誰かが扉を開けた形跡があった。

この教室だ、神楽坂の直感がそう告げる。

神楽坂は半開きになった扉を開け室内へ入る。

無人の教室は机も綺麗に並べられ、教卓の隅に危なげに置かれた小さな花瓶も倒れてはいない。

此処ではないのか、と思っていた時、神楽坂はある物を見つけた。

「鞆か？ あれは……」

誰もいない室内、窓側後方の机の上に学生鞆が置かれたままになっている。

その鞆は体操着などを入れる補助鞆ではなく、教科書やノートを入れるものだ。補助鞆ならまだしも学生鞆を忘れたまま下校するとは考えられない。

では、なぜ不自然に鞆が置かれたままになっているのか。

神楽坂は視線を少し落とした。

並べられた机の脚の隙間から荷物のような物が床に置かれているの見える。

それは横に長い。一メートルは軽く越えているだろうか。

「まさかっ!？」

胸騒ぎを覚えた神楽坂は、鞆が置かれた机の列に走った。
嫌な予感は的中してしまう。

床に置かれていたのは荷物ではなかった。

神楽坂の目に飛び込んできたものは、制服を切られ仰向けに倒れた女子生徒の姿だった。

「大丈夫か!？」

神楽坂は倒れる女子生徒の下に駆け寄った。

意識を失っているのか、彼女はグったりとしている。

制服は刃物のようなもので切り裂かれ、左肩から右脇腹、赤いネクタイすら綺麗に切断されていた。

「しっかりしろっ!」

大きな声で呼びかけるが反応はない。

切られた制服からは白い肌が露になっている。

どうやら、制服はおろか下着すらも切られてしまっているようだが、神楽坂は状況の不自然さに気が付いた。

「……傷一つ付いていない?」

下着までザックリ切られているという事はかなりの圧力が掛かったはず、だが、体には一切の傷が見当たらない。彼女は何者かに襲われたと考えるのが妥当だろうが、これはどんな達人でも不可能な芸当だ。

「やはり、さっきの邪——！」

余り得意ではない分析に集中するが余り、神楽坂は重要なことを一つ見落としていた。

切られた制服の裂け目は左肩から斜めに走っている。つまり、彼女の左上半身が露になっているのだ。

ようやく気付いた神楽坂は、慌てて着ていた学ランを脱いで彼女に被せてやった。

その後。神楽坂を含む除霊部のメンバーはA校舎一階にある保健室に集まっていた。

室内には病院用ベッドが十床並び、一つ一つが白いカーテンで仕切れるようになっていた。その中の一床に二年四組で意識を失っていた女子生徒が布団をかけて寝かされていた。

現在は保険医の姿はなく篠崎と上村が探しに、長緒が職員室に事故の報告をしに行っており、パイプ椅子に座った神楽坂と天河の二人が彼女を看ている状況だ。

「……大した怪我はないみたい」

彼女の胸に右手を置いた天河がホッとした表情で言う。

「手を置くだけで分かるのか？」

「うん。私一応ヒーリングも使えるから」
「凄いな」

神楽坂は素直に感心した。

ヒーリング（心霊治療）は負傷者に自らの霊気を流し込み、その傷を治療する術だ。これは霊能者全てが使える術ではなく、特別な才能を持つ者だけが行使することができる。また、先程天河がやって見せたように患者に手を置くだけで状態を調べることも可能だ。

「そんなに凄いわけでもないけど、自分の怪我は治せないし。それよりも一体何があったの？」

「分からねえ。掃除道具を持って戻っていたらA校舎の方から悲鳴が聞こえてな、何かあったのかと其処に行ってみたら、その二年の女子が制服を切られた状態で倒れてたんだよ」

「制服が切られてるのは見たけど……校内に不審者が入り込んだのかしら……」

広大な敷地を持ち周囲を植林された林で囲まれている学園には、正門と裏門の二つの出入口がある。だが、他の場所から侵入しようと思えば簡単に中に入ることができる。実際、遅刻を免れようと林に紛れて門外から入り込むうとする生徒もいるくらいだ。不審者が入り込んだとしても不思議ではない。

「普通ならそう考えるよな、けど二つ引かかる事があるんだ」
「引かかる？」

「ああ、一つは切り口だ。下着までバツサリいつているのに体には傷一つ付いていなかった。カッターとか刃物で切りつけたとしても、かなり力を入れて押し付けるようにしないとそこまで深く切れないだろ？」

「女子のブレザーの生地は結構厚いもんね。……って下着？」

軽くジト目になる天河。

「お、俺はそんなつもりじゃ……傷の具合も見ないといけなかったし、それにちゃんと学ラン被せてやったさ！」

「それに彼女を抱えて保健室に運んだんだよね？」

天河のジト目は続く。

「怪我は無かったから、早いところ運んだ方が良いと思ったんだよ
っ」

「……まあ確かにそうだけど、例えば外傷が無くても迂闊に動かしちゃ駄目よ？」

ようやく元の表情に戻った。

「い、以後気をつけるよ」

「それで二つ目は？」

「悲鳴が聞こえてくる少し前に感じた邪気だ」

「邪気って……まさか悪霊の仕業！？」

「俺が三階に上がったのと同時に消えちまったけど、可能性は低くはないと思うぜ？」

「もし、そうだとしても何度も悪霊が現れるなんておかしくない？」

「確かに、昔と違って現代^{いま}じゃ悪霊が現れること自体珍しいな」

「今じゃフィクションだと思われるみたいだし」

「霊能力者の数が激減し、霊が認知され難くなったのも原因の一つだ。」

「霊能者の減少は自然淘汰によるものだと考えられているが、科学

が台頭した現代では霊能学も衰退してしまい原因を突き止めるまでには至っていない。

「どちらにせよ、女子が襲われたことだけは事実だぜ」
「そうね」

神楽坂と天河はベッドで眠る女子生徒を見守る。

その後、彼女は篠崎が呼んできた保険医に診て貰い、大事をとって病院へ連れて行くことになった。

008：広がる波紋

翌日、三年五組。

「なんだって？」

朝、自分の席について机の中に教科書やノートを放り込んでいた神楽坂は、話題を持ってきた吉原に対して聞き返した。

「だから、今日の早朝、部活の準備をしていた女子マネージャーが誰かに襲われて大怪我したんだよ！」

「大怪我！？」

神楽坂は思わず大声を出した。

その声に反応したクラスメイトが此方に注目し、隣の席に座る長緒の眉がピクリと動く。

「お、落ち着けよ光志、命に別状は無いらしいからよ。それで今、職員会議をしてるみたいだぜ？」

黒板の上に備え付けられた丸いアナログ時計を見ると、時刻は八時四十分を指している。何時もなら朝のHRが始まる三十分丁度には担任の山城がくるはずだが、まだ来ていない。どうやら吉原の言っている通り山城も会議に出席しているようだ。

「わ、悪い。それで襲われたって、襲った犯人は分らないのか？」

「聞いた話だと他の部員がマネージャーを見つけた時には、彼女以外いなかったらしいんだ……けど」

吉原は口籠った。

「何だ？」

「……似てるんだよ、切り裂き魔の犯行と」

「切り裂き魔……」

「倉庫の中で倒れていたマネージャーを他の部員が見つけて駆け寄った時、まだ意識はあったみたいなんだよ。『後から声を掛けられた』ってな」

「確か、切り裂き魔も犯行前に必ず声を掛けるんだったな。しかも背後から」

連続切り裂き事件には、犯人の拘りと言っても良い共通点が何点か確認されている。

その中の一つ、『犯行に及ぶ前には必ず被害者の背後から声を掛ける』これは被害者全員の証言が一致している。

「そして、振り向いたところをバツサリだよ

学園内じゃ誰かが事件を真似してるとか、切り裂き魔が甦ったんじゃないかって噂で持ちきりだぜ」

「そうか……」

神楽坂は話を聞きながら考える。

怪我の有無は別として、昨日の事件と、今朝の事件は『後ろから声を掛けられた』という共通点がある。

吉原が言うように、事件を真似て犯行を行った模擬犯である可能性が高いと言える。むしろそう考えるのが普通だろう。

神楽坂も同じことを考えてはいたが、僅かに感じた『邪気』の存在が気になっていた。

結局、HRが終わっても山城がくることはなく一時限目は自習に

なる。

職員会議を終えた山城が教室に入ってきたのは一時間後、二時限目に入って直ぐのことだった。

「お前ら席に付け、本来なら二時限目を行つところだが先に連絡しておく」

教室に入った山城は二時限目になっているにも関わらず、席を離れて私語をしている生徒に対して軽い注意するだけに留めて教壇に立った。何時もなら問答無用、烈火の如く怒る恐師山城にしては大人しい。

「お前達も既に噂などで話を聞いているかもしれんが、今朝うちの生徒が外部から侵入したと思われる者に襲われ大怪我を負った」

一限目を自習にしてまで会議をしていたのは、やはりその事だったのかとクラス内がざわめいた。

神楽坂と長緒は黙って続きに耳を傾ける。

「静かにしろ。職員会議で決定した事を伝える

今日から暫くの間、部活動は中止とする。部活に入っていようが無かるうが十八時までには全員下校すること。もし不審人物を見つけた場合は直ぐに先生に報告しろ。携帯で直接俺に連絡しても構わん」

山城の言葉を聞いたクラス内は、またざわめき始めた。

特に部活に入っている生徒は期間未定にしろ部活動が中止になったことを喜びたいが、怪我をした女子生徒のことを考えると素直には喜べず複雑な表情を浮かべていた。

校外を不審者がうろついているとなると、部活動と放課後の居残

りの中止、特に人目に付き難い早朝練習の休止は妥当な判断だろう。

「それから、神楽坂と長緒」

「……？」

名前を呼ばれた神楽坂は山城に注目する。

「お前達二人は、昼休み第六委員会棟に行くように。分かったな？」
「ああ……」

神楽坂は疑問に思いつつ返事をした。

部長である天河からは昼休みに集まるようにとの指示は受けていない。

考えながら隣の席に座る長緒を見ると、彼も分からないのか両腕を組んだまま首をゆつくりと振った。

そして昼休み。

神楽坂と長緒は第六委員会棟二階、除霊部本部に足を運んだ。

室内には何故か篠崎、上村、そして部長の天河の姿があり、三人は長テーブルを挟んでパイプ椅子に座っていた。

「天河！ それに篠崎に上村、お前らまで呼ばれたのか？」

「まあな。来ると思ってたぜ先輩」

「やっぱり全員呼ばれたんだねえ」

「ってか天河先輩、隣に座ってもいいですかっ!？」

テーブルに両足を乗せ、更に両手を頭の後ろに回した状態で椅子に座る篠崎と、座ったまま椅子を両手に持って天河の隣に移動しようとする相変わらずの上村。

「そ、それはちょっと……それに隣の椅子は神楽坂君と長緒君の席だしね？」

苦笑う天河。

「上村、馬鹿やってんじゃねえ！ 篠崎、お前はテーブルから足を下ろせ」

「う、うう……」

「しょうがねーな」

神楽坂の注意を受け、鉄拳制裁を受けたくない上村は元の位置へ椅子を持ったまま戻り、篠崎は面倒そうな顔を見せつつも大人しく従った。

神楽坂と長緒の二人は、天河の隣に置かれているパイプ椅子に座る。

これで除霊部メンバーが全員集まったことになるが、自分達が呼ばれた理由をまだ聞かされていない。天河の隣の席に座る神楽坂はその事について彼女に質問した。

「天河、俺達を集めて何か話でもあるのか？」

「うっん、皆を集めたのは私じゃなくて藍苑先生よ？」

「藍苑先生が？」

藍苑は除霊部の顧問だ。

まだ明確な活動方針が決まっていない事について会議でもするつもりなのだろうか。

除霊部が発足して数日しか経っていないこともあるが、部の明確な活動方針は未だ決まっていなのが現状だ。神楽坂たち部員は一般生徒と同じように登校し、授業を受け、そして放課後、除霊部本部に集まるといった毎日を送っている。しかも、集まるだけ集まって雑談（最近は室内の掃除を少しした）だけで活動時間が終了してしまう。

「先生からは何も聞いてないけど、多分、除霊部の今後の活動内容を話すんじゃないかな？」

「流石に不味いと思ったのかもな」

「かも……ね」

神楽坂と天河は今までの活動内容を思い浮かべながら、お互い見合って苦笑いを浮かべた。

召集をかけられた理由は分からないが、呼び出した本人がくれば分かるだろう。

そして数分後、露出が高い派手な服装の上から白衣を羽織った何時もの格好をした藍苑が室内に入ってきた。彼女は持っていた薄いファイルバイNDERをテーブルに置いて、ホワイトボードの前に用意されていたパイプ椅子に座って足を組んだ。その顔は険しく、何処となく機嫌が悪そうにも見える。どうやら今後の活動方針を話してきた訳ではなさそうだ。

藍苑は険しい表情のまま、軽く深呼吸をした。

全員が固唾を吞んで彼女に集中する。

そして……

「もういやあ」

藍苑は力なくテーブルに突っ伏した。

表情とは裏腹な、力が抜けそうになる語尾を下げた声を発した彼女に、気構えていた全員（長緒以外）が臀部でんぶを滑らせ椅子からズルリと落ちそうになった。

「あ、あの……先生？」

長緒を除く全員が座り直す中、一体何があったのか天河が声を掛けた。

「何で私の責任なのよ！」

突っ伏していた上半身を起こした藍苑はおもむろに声を上げ、拳を作った右手でドンツとテーブルを叩く。その衝撃はテーブルに置かれていたファイルバイNDERを僅かに浮かせ、挟んであった書類がはみ出した。

「い、いや、だから先生。一体何があったんですか？」

「今日の事件よ！ 除霊部が早朝警備をしてたら防げたかもしれないとか言いやがったのよ！ あの石頭の教頭は！」

「除霊部は関係あるのか？」

神楽坂のさり気ない突っ込み。

「そういう仕事は風紀の管轄でしょ！ いや、傷害事件なら最早生徒の活動（自主性）の範疇を超えてるわよっ！」

「もしかして俺達、先生の愚痴を聞いただけだけに集められたとかじゃないよな？」

「あ、ありうるから怖い」

一人息巻く藍苑を尻目に、神楽坂は天河に呟いた。

本当に会議での愚痴を言いに来たのかと思わせるくらい藍苑の一方的な話は続いた。その話の中で会議が長くなつたのは、生徒が不審者に襲われ怪我を負つたことを全く関係がない除霊部に責任転嫁しようとした教頭に藍苑が食らいつき、更に山城も論戦に加わったことが原因であつたことも分かつた。

会議が長引いたことにより一時限目の授業が自習になつたから儲けものだつたが、幾らなんでも愚痴を言う為だけに全員を召集する訳が無い。

神楽坂は良い加減本題に入るよう、藍苑に言った。

「そ、それで、何で俺達を集めたんだ？」

「神楽坂くんも、その他の皆も担任の先生から聞いてると思うけど、今日から暫くの間全ての生徒は放課後十八時までには下校する事になつたのよ。これは部活動だけではなく委員会活動も、その中間に位置する除霊部も例外ではないわ」

「除霊部も休止になるだろうな、とは思ってたが、まさかそれだけなのか先生？」

「そうよ？」

「部の今後の方針を話しにきたとかでは……？」

「あゝ、それも早く考えないといけないわね天河さん」

「……重要な話でもするかと思えば、やっぱり愚痴じゃねえか!？」

「だって、ムカツクでしょ!？ 全く関係ないウチに難癖付けられたのよ!？」

怪我をした生徒も、天河さんの力で傷跡が残らずに済んだっていうのに!」

「天河が？」

「うん、縫合が必要なくらいの傷の深さで、あのままじゃ間違いな

く傷跡が残ってたと思う」

事件を知らずに登校してきた天河は、藍苑に事の顛末知らされ、共に負傷した女子生徒が搬送された病院に向かった。病室に到着した時には既に処置を終えていたが、回復しても傷跡が大きく残ってしまったことが判明し彼女の患部の上から心霊治療ヒーリングを施した。

これにより、容態が安定してから抜糸をすることができ、傷跡も残らず早期退院が期待できる。

「私も久しぶりに天河さんの力を見たわ。立ち会った医者も目を丸くしてたわね

丁度良い機会だから言っておくけど、学園上層部からの風当たりつて結構強いだよ。だから前回みたいに一上村君が授業中に壊した（・・・）人体模型みたいなミスは今後控えるようにして欲しいわけ」

「え！？ ちょっと待ってよ、なんで俺が壊したことになってんのさ！？」

「まあ、私も除霊部の初の実績として報告したかったけど今回は様子見させてもらったわ

ヘタに提出して会議の場で突っ込まれないとも限らないしね」

方針すら固まっていない除霊部の活動報告は、部長の天河が報告書を作成し、顧問である藍苑に提出する（除霊部は委員会としての側面も持つため、本来なら生徒会に提出しなければならない）ことにしている。

前回、人体模型の頭部を破損させたのは篠崎だが、元を正せば上村が悪ふざけをしたことが原因だ。藍苑の報告もあながち間違っていない。

思わず立ち上がった上村は、狼狽しながら席に付いた。

「俺達は余り良くは思われてないんだな」

「そうねえ、超常現象を扱う部だってだけでも十分怪しいしね」

「あれじゃね？ 学園の偉い方って心靈現象を『学園に恐竜が現れた』と同じくらいにしか信じてねーんだろ？」

「んー、篠崎君の例えはアレだけど、当たらずともいえども遠からずってところかしらね。恐竜は化石として実際に証拠があるし」

霊や妖怪は実体が希薄で存在を長期間留めて置けず、現代には文献しか残されていない。

つまり、霊能力を持たない一般人、学園上層部にしてみれば怪しい活動をする除霊部の存在は認める訳にはいかない、といった見解なのだ。

「私は実際にこの目で見てるから貴方たち霊能力者の事は理解してるけどね。まあ確かに霊能者が天河さん以外にも複数いたことには驚いているけど」

藍苑はファイルバイNDERを取ると、テーブルの上でバラけた書類を調える。

そして、備え付けのアナログ時計を見ると立ち上がった。

「それじゃ、私はそろそろ教官室に戻るけど、さっき言った通り活動は暫く休止だから、学校が終わったら直ぐに下校するのよ？」

神楽坂たちは教官室へ戻る藍苑の背中を見送った。

「活動休止か……」

神楽坂は軽く呟いた。

まだ活動らしい活動はしていないが、いざ休止と言われると少し寂しい気もする。除霊部には半ば強制的に入らされた神楽坂だったが、そう思い始めた自身の心境の変化に少し驚いた。

昼休みが終わるまで後十分ほど。

今から戻っても五時限目の準備をするだけになってしまうので、神楽坂たち五人は時間まで談話をすることにした。

「休止っていうけど、一体何時までなのかね？」

「どのくらいになるかは分からねーけど、警察が犯人を捕まえるまでじゃねーか？」

「犯人が人間ならな」

「どういう意味だ先輩？」

「一番最初に襲われた女子のこと、覚えているよな？」

神楽坂が第一発見者となった、第一の事件だ。

襲われた生徒は制服こそ切られはしたが、外傷はなくショックによる意識消失に留まった。それは不幸中の幸いであつたが、駆けつける直前に神楽坂が感じた力。

『邪気』だ。

「直ぐに消えちまったが、俺は今回の事件と邪気が関係あるんじゃないかと思っている」

「まさか、悪霊の仕業だったのか？」

「あくまで可能性だがな」

「そういえば……ちよつと気になった事があるんだけど」

神楽坂の話を聞いた天河が何かを思い出したかのような声を挙げた。

「気になること？」

「うん、怪我をした彼女にヒーリングを掛けていた時なんだけど、体の傷の他に『魂』にまで傷が入ってたの」

「魂！？」

「僅かな、本当に小さな傷だったけど、体の傷に沿うような切創だったわ」

例え岩をも切り裂くような鋭利な刃物であっても、それが物質で構成されている以上肉体を越えて魂にまで損傷を与えることはできない。

もし、魂にまでダメージを与えたとしたら、それは只の凶器ではない。

「そいつは霊刀特有の切り傷だぜ」

心当たりがあるのか、篠崎が言った。

「……確か『斬魂』^{ざんこん}と言うそうだな」

「流石、長緒先輩詳しいな。だが、斬魂は奥義とされてる技術で、そこ等の人間が霊刀を持ってやれるような簡単な技じゃねーぜ。神楽坂先輩が人外の仕業だと言うのも、あながち間違ってるかもしれないかもしれねーな」

「犯人は……人間じゃない？」

天河の言葉に全員が静まり返る。

そして、同時に全員の頭に浮かぶ一つの可能性。

その可能性を口に出して確認する前に、昼休み終了のチャイムが鳴るのだった。

009：漆黒の刃

放課後。

神楽坂と長緒の二人は、三年五組前の廊下で壁に背を付けた状態で床に座っていた。

事件が解決する間、部活動を始め、生徒会（各委員会）は活動休止となり、帰宅部の生徒も含めて十八時までには全生徒が下校することになった。その為、部と生徒会の中間に位置する除霊部も活動を休止せざるを得なくなり、本部でもある第六委員会棟も他の委員会棟と同じく昇降口は鍵が掛けられてしまっている。

それにも関わらず、二人が居残っているのには理由がある。

それは犯人のことだ。

女子生徒を襲った犯人が人間ならば、それを捕まえるのは警察の仕事。こんな時間まで残ったりはしない。

二人が残る理由の一つ。

一連の事件を起こした犯人が、人間ではない可能性があるからだ。

「この時間になると、流石に誰もいないな」

神楽坂は薄暗く静まり返った廊下を見て呟いた。

ズポンのポケットから出した携帯の待ち受け画面は十七時三十分を表示している。

夏が近づくこの時期になると日が長くなってくるものだが、梅雨前のこの時間帯は、まだ照明が必要だ。にも関わらず二人がいる廊下の照明は点けられていない。

放課後になると教室は勿論のこと使われていない校舎は、補助灯以外、全て消すことになっている。そのため、いま照明を点けると

自分達が居残っていることが外部にバレてしまう。

「……また現れると思うか？」

薄暗い中、神楽坂の隣に座り本を読む長緒は、読書の体勢のまま言った。

まだ本の文字は読めるようだ。

「さあな。あの時感じた邪気が本当に事件と係わりがあるなら、また現れると思うぜ？」

両足を伸ばし、両手を頭の後ろに回しながら神楽坂は答えた。

神楽坂が第一発見者となった、第一の事件発生直前に感じた邪悪な靈気、そして被害者の魂に傷があったとの天河の証言が二人を居残らせたのだ。

「……相手が人間ならば良いんだが。……光志、武器はまた長箒を使うつもりか？」

「ああ、掃除用具容れは校内中にあるしな。使いたい時に使えるから、ある意味便利だぜ」

「……確かにそうだが、何時かアレを使わなければ、なくなるかもしれないぞ」

「これから先、靈障が続くつてのか？」

「……それは俺にも分からないが、体育館の悪霊、そして僅か数日で人体模型と連続して発生している」

「……健ちゃんの言う通りかもな」

六学では既に二件の靈障が発生している。

たった二件だけだと思われるかもしれないが、悪霊が現世から姿を消してから四十年。それは何かが起る前触れ、凶兆と思ってもお

かしくはない数字なのだ。

神楽坂は静まり返った校内を窓から眺める。

職員室があるA校舎二階を覗く全ての校舎の照明が消え、六学は静寂に包まれる。

時刻は十八時。

全校生徒は全て下校しなければならない時間だ。

日は更に沈み、町並みの地平線からは僅かな光だけが見え、何時もならグラウンドから聞こえてくる部活動生の掛け声も聞こえてくることはない。

「十八時か」

携帯のバックライトが眩しく感じる。

「……先生達も残業はしないように言われているようだな」

「そいつは都合がいいな。俺達が帰ったあと悪霊に襲われでもしたら意味がねえ」

「……早速見回りを始めるようだ」

A校舎、正面玄関を始め東西にある昇降口から懐中電灯を持った教師達が出てくる。二人がいるC校舎に見回りがくるのも時間の問題だ。

「今日は出そうにねえし、そろそろ引き上げ時か」

神楽坂はもう一度窓から校内を見渡す。

この状況は何時まで続くのか、一抹の不安を覚えながら、緑の光を放つ避難誘導灯だけが灯った漆黒の廊下を後にした。

「!？」

階段を降りようと足を踏み出した時だった。

校内から妙な気配を感じた神楽坂は、足を止め近くの窓から外を見渡した。

「……現れたようだな」

「らしいな」

神楽坂は長緒と共に、A校舎、B校舎が視界に収めるように見据えた。

何の前触れもなく現れた気配は徐々に強まり、その正体が露になっ
ていく。

「やっぱりな」

神楽坂は確信した。

それは悪霊が持つ特有の霊気。

『邪気』だ。

その邪気は不快さの中に刃物、まるで触れただけで切られてしま
いそうな鋭い刃が渦を巻いている感覚を二人に与える。前回、神楽
坂が感じた時は直ぐに消えてしまったため、邪気の詳しい特質まで
は感じ取れなかったが間違いなく同一のものだった。

「……しかし、妙だ」

「だな。前の邪気に違いねえが、不自然なまでに薄すぎる。捉える
だけで精一杯だぜ」

二人は腑に落ちない表情を見せる。

本来、人間は魂の力である霊力を持っている。その力の大きさや

質は個人によって違い、それから生まれる霊気も様々だ。

これらを使う霊能者は、普段から霊気を肉体の内側に抑え外部に漏れ出ないように、精神のコントロールをしている。だが、霊（悪霊）には肉体がないため、能力者のように自身の霊体から発せられる霊気を抑えることができないのだ。

しかし、今、校内に発生している邪気は、まるで敵から隠れるように力を抑え制御しているように見受けられる。肉体の無い霊は、霊気のコントロールはできない。自我が崩壊している筈の悪霊ならば尚更だ。

「くそっ！ 反応が弱すぎるぜ！」

窓枠に置いていた手に力が入る。

どうやって邪気を抑えているのかは分からないが、そのせいで発生源が特定できない。現在分かっていることはA校舎、B校舎に亘り広い範囲に広がっていることだけだ。

「……二手に分かれるかなさそうだな。光志、俺はB校舎を調べる」

「なら俺はA校舎だな」

「……見回りの教師には気をつけろよ？」

「ああ、分かってる」

長緒は時間短縮のため、ここではなくB校舎に近い階段へ走る。

そして、神楽坂はA校舎へ向かうべく目の前の階段を駆け下りるのだった。

校内見回りを行う教師の目を掻い潜りながら、神楽坂はA校舎へ急ぐ。

先程から感じられる邪気の反応も少しは強くなってはいるようだが、発生源を突き止めるまでには至らない。

しかし、この距離に近づいたことで邪気の変化に気付くことができた。

「動いている……？」

捉えようのない霧のような邪気が僅かながら移動している。

発生源である悪霊が移動すれば当然、邪気も追隨して動く。だが、何処へ移動しているのか其処までは分からなかった。

A校舎正面玄関から出てきた数人の教師をかわし、神楽坂は玄関から校内へ入る。

スニーカーを足で乱雑に脱ぎ捨て、通路に出た丁度そこへ長緒から携帯が入った。

「健ちゃんか、邪気の発生場所はまだ分からねえ」

「……そうか、此方は一つ分かったことがある」

「邪気の流れが変わってる、悪霊が移動してるってんだろ？」

「……そうだ。そして、B校舎から邪気の反応が消えた」

「何だって!？」

神楽坂がいるA校舎に漂う邪気の反応は消えてはいない、それどころか向かう途中に感じた時よりも更に反応が強くなっている。

「……光志、悪霊はA校舎へ向かっているぞ」
「分かった」

通話を切り、神楽坂は通路を見渡す。

来客を迎えるための通路には、各部活動で受賞した大小様々のトロフィーや表彰盾が並べられたガラス張りの大きなトロフィー棚が置かれ、その隣には大きな優勝旗が飾られている。人の気配もなく、照明こそは点いてはいるが神楽坂がいたC校舎廊下と差異はない。薄すぎる邪気の中、未だに敵の位置は分からないが悪霊が現れるであろう場所は容易に想像できた。

「狙いは職員室かつ!？」

悪霊は人間の魂を狙って襲い掛かってくる。

そして、現在校内に残っているのは教師のみ。

すなわち、職員室に残る大勢の教師たちを襲うつもりなのだ。

神楽坂はB校舎に近い階段へ走った。

玄関から入った正面にある中央階段からでも、二階職員室へ直接行くことができるが今、危険を知らせに行っただとしてもまともに取り合ってはくれないだろう。それよりも悪霊が此方に向かっているならば、待ち伏せた方が都合が良い。

二階に上がる前に掃除用具容れから、木製の長箒を取り出し肩に担ぎながら階段を駆け上がる。箒のヘッド部を外す余裕はない。

階段を上る間も邪気の反応に意識を傾ける。

(……ほとんど変化なしか)

長緒の連絡から悪霊はかなり接近しているはず。

二階に到着した神楽坂は壁に遮られた先にあるB校舎を見据えた。

「!？」

悪霊の位置を探っていた時だった。

後から物が落ちる音が聞こえた神楽坂は振り返る。

職員室の扉が見える十メートル程先に此方に背中を見せて尻餅を付いている女性教師の姿が視界に映った。床にはファイルバインダーから零れた書類が散乱しており、躓いて転倒したのかと一瞬思われたが。

同時に今まで僅かな反応だった邪気の勢力が急激に上昇。

発生源は探すまでもない。

身を切裂かれてしまいそんな狂気に満ちた邪気は、床に座り込んでいる女性教師の先から一気に広がる。

そして、ついに発生源が姿を現した。

空間を歪ませながら現れたそれは酷く痛んだボロボロの黒いローブを身に纏い、その顔はフードの中に隠されている。

左右に大きく広げた袖からは指先まで白骨化した腕が伸び、その右手には身の丈を軽く超える漆黒の巨大鎌が握られている。

それは正に悪霊が女性教師に襲い掛かろうとしていた瞬間だった。

黒いローブと巨大な鎌、まるで死神を想像させる姿をした悪霊は右手に持っていた大鎌を白骨化した両手で握ると、刃先を縦に構え教師の頭上で大きくゆっくりと振り上げた。

「やべえっ！」

肩に担いだ長箒を構え神楽坂は力の限り全力で走った。

床に座る教師にも悪霊の姿は見えている筈だが、恐怖から腰を抜かしてしまったのかその場から逃げ出すことができないでいる。

振り下ろされる大鎌。

それを阻止しようと走る神楽坂。

そして、金属音に似た高音の衝突音が響いた。

神楽坂の頬を一筋の汗が流れる。

もう少し距離が離れていたら間に合わなかったかもしれない。

神楽坂は悪霊と教師の間に割り込み、間一髪のところで大鎌の刃を長箒で受け止めていた。

「——っう！？」

霊気を込めた光り輝く長箒で大鎌を受けた鰐迫り合いの状態。神楽坂の霊気と悪霊の邪気とが互いに干渉し火花を散らせる中、右肩に熱さに似た痛みが走る。

悪霊の凶刃を受け止めることはできたが、湾曲した鎌の刃は長箒を滑りその刃先が神楽坂の右肩を傷付けていた。しかし、今はその痛みを確認するために面前の敵から視線を外すわけにはいかない。

（……ちっ！ この死神野郎、ただの悪霊じゃねえな！）

悪霊の霊力自体は脅威に感じる程ではない。

だが、問題は神楽坂が持っている獲物だ。

物質だけで作られた物では、霊気に対する耐久値が極端に低い。（限界を超えると破裂する）今までは霊気の出力を抑え限界を超えぬようにしていたが、目の前の悪霊は体育館に現れたものよりも霊力が数段上だ。

霊気Ⅱ攻撃力となる悪霊との戦いで限界の低い長箒では分が悪すぎる。

このままでは長箒ごと押し切られる恐れがあった。

<……ヤハリ霊能者力>

罅迫り合いが続き、神楽坂が劣勢になり始めていた時だった。
かすれたような低い声と共に、フードの中から悪霊の目と思われる赤い光が二つ浮かび上がる。

「お前喋れるのか……」

たった一言だったが悪霊の口調には知性が感じ取れた。

邪気を制御していたこともだが、通常の霊とは何かが違っていると神楽坂に再認識させる。

神楽坂の言葉を聞いた悪霊は、赤く光る丸い目を弧状に変形させ笑う表情を作って見せると一瞬にしてその場から姿を消し、禍々しい邪気も感じられなくなった。

「逃げやがったか……」

神楽坂は霊力を制御し出力を抑える。

霊気を失った長簾は限界だったのかガラスが割れるような音と共に二つに弾け、その一つが床に落ちた。

手に残った三十センチにも満たない柄を見た後、神楽坂は静寂が戻った通路を静かに見据えるのだった。

010：霊体の傷

悪霊が姿を消した後、神楽坂と長緒は学園の指示を無視し十八時を超えて居残った事のお咎めを受けることはなく、見回りで残業していた除霊部顧問、藍苑より第一体育館教官室に集まるよう指示を受けた。

二人は教官室にあるミーティングコーナーの椅子に対面に座る。暫く待っているとステンレス製の医療用トレイ（膿盆）を持った藍苑が室内に入ってきた。

「それじゃ、私が診てあげるから、その椅子に座って学生服を脱いで」

「あ、ああ」

山城の椅子を目の前に持つてくる藍苑の指示に従い、神楽坂は右肩部が切られた学生服を脱いでミーティングテーブルの上に置いて用意された椅子に座った。

悪霊の大鎌によって切られた学生服は、A校舎で襲われた生徒と同じく鋭利な切り口で肩パットはおろか下に着ていたTシャツにまで達している。

神楽坂はシャツの襟口から右腕を出して患部である肩を藍苑に見せた。

「学生服がズタズタだったから病院に連れていかなきゃ駄目かと思っただけど、大した怪我じゃなくて安心したわ」

保健室から拝借した消毒液、ガーゼ、包帯を使い手際良く処置を行う。

傷は五センチ程の綺麗な切創。幸い傷が浅かったこともあり、傷

口を消毒、ガーゼを当て、上から包帯を巻く簡単な処置で済んだ。

「はい、お終いつ！」

「いてえ！？」

右肩に巻かれた包帯の上から平手打ちを受けた神楽坂は声を上げた。

「こんなの掠り傷じゃない」

藍苑は大袈裟だと言わんばかりの表情を見せながら、余った包帯を机の上に置いた膿盆に戻す。

「つたくよ……」

沁みる右肩を押さえながら、神楽坂はミーティングコーナーの椅子に座って穴が開いた学生服を羽織った。

「……大丈夫か、光志？」

「ああ、体の方はな」

「手当ても終わったことだし、話を聞かせて貰おうかしら？ 学園の指示を無視したあげく怪我をした理由をね？」

「それより、いいのか？ 学園に報告しないで」

「神楽坂さんの怪我の事？ ……ウチの小笠原を襲ったのは人間じゃないんでしょう？」

小笠原は今年六学に赴任してきた新任教師で、悪霊に襲われ危ないところを神楽坂に助けられた女性教師だ。幸い、彼女は怪我もなく無事だったが悪霊に襲われた事による恐怖から、精神的ショックを受けていたため山城が自宅まで送り届けたらしい。

「いきなり体が動かなくなっただけに死神が出た出た、死神に声を掛けられた、って軽い錯乱状態だったんだから」

「あんな目に遭えば分からなくもねえな」

神楽坂は悪霊と対峙した時を思い返す。

痛みの激しいフード付きの黒のローブ。

白骨化した両腕。

下半身は無く、宙を漂う。

そして、何よりも真つ先に入っただけは、相手に威圧と恐怖を与える二メートルは超えているだろう巨大な大鎌。その姿は一般的に『死を呼ぶ者』『死の象徴』として知られる死神のイメージそのままだった。

「それと、気になったことが一つあるんだけど」

「なんだ先生？」

「神楽坂くんの手当てをしてる時に気付いたんだけど、今朝、襲われた生徒と傷の出来方がそっくりなのよ」

「ズレのない綺麗過ぎる傷のことか？」

「そうそう、不自然過ぎるの。着ている服ってのはシワや弛みがある素材によつては当然強度も違うでしょ？ その部分だけ生地も厚くなるのよ」

「つまり、厚くなっている箇所はそれだけ切り難くなる」

「と、いつても僅かな差だけど、一回切り付けただけで綺麗に切るつてのは難しいと思うの」

「霊刀特有の傷だろうな。小笠原先生を襲ったコスプレ野郎（悪霊）はデカイ鎌を持ってたぜ？」

「コスプレ……なんだかホラー映画を思わせるわね」

「映画なら良いが、一連の事件を起こしていたのは人間じゃねえ悪霊の仕業だ。しかも本物のな」

「全くもつ、何で立て続けに問題が起こるのよ。……取り合えず警察には連絡しておくわ、警察にも一応心靈現象を扱った部署があるって聞いたこともあるし」

「……無駄だ。霊が何十年も前に姿を消してから、警察の心靈対策班はまともに機能していない。今では名前だけが残っているに過ぎない状態だ」

「そ、そうなの？ 随分詳しいわね長緒君。じゃあ……一体どうすれば、その悪霊はまた現れるんでしょ？」

「間違いなく」

神楽坂の言葉に、藍苑は考え込んだ。

人間の力では太刀打ちできないどころか、見る事も、感じる事も、そして触れる事すらも出来ない相手。

これから先も悪霊の姿に怯えながら、生徒達を危険に晒し続けなければならぬのか。

だが、藍苑は一つ忘れていた。

そう、神楽坂たち霊能力者の存在を。

「それは違っただろ先生？」

藍苑の苦悩する表情から考えが読めたのか、神楽坂は不敵な笑みを浮かべながら立ち上がった。

その両足には怯えや恐怖といったものは一切感じられない。

「え？」

「何の為に俺たち除霊部がいると思ってるんだ？」

一語一語はつきりとした、力強く、不安を感じさせない口調。

神楽坂は羽織っていた学生服に袖を通す。

対面に座っていた長緒も静かに立ち上がった。

「ちょ、ちよつと待ちなさいっ！」

勝手に行動を起こそうとしている、と感じた藍苑は無言で教官室を出ようとした二人を呼び止める。

「神楽坂くん、あなた本気で言ってるの？ 怪我をした生徒は本当に酷い状態だったのよ！？ 確かに貴方たちが悪霊と戦える力を持っているとしても、生徒の活動の範疇を完全に超えてるの！」

この数日で三人が襲われ幸い二人は大事にならなかったが、一人は普通なら傷が残ってしまう程の重傷を負わされている。

生徒の事、神楽坂と長緒の心配をする教師の、藍苑の言葉は分からないでもない。

神楽坂は教官室の扉の前で立ち止まり、ゆっくりと振り返り藍苑に向かって言い放った。

「先生の言いたい事は分かるよ
だがな、俺達は、俺達の学園で好き勝手されるのをただ指を咥え黙って見てるつもりはねえ
それだけさ」

藍苑の制止を振り切るように教官室を後にした二人は、A校舎前大通りに出た。

この通りは幅五メートルのレンガ造りで、三つの校舎と中央広場、諸施設に結んでいる。通りの両端にはレトロな街路灯が等間隔に配

置されている。

不必要な照明が落とされ街路灯の明かりだけとなった通りを、二人は特に行く先もなく静かに歩く。

静寂に包まれた学園には風が吹き抜ける音だけが聞こえ、一見静かな時間が流れているように見える。

しかし、悪霊はこの静かの闇に潜み、今も虎視眈々と獲物を狙っているのだ。

「あの悪霊、普通じゃねえよ」

神楽坂は思い返すように隣を歩く長緒に言った。

「……邪気を制御していた事か」

「それもだが……あの野郎（悪霊）喋りやがった」

「……唸りや呻き声などではなく、言葉を正確に発したとなると確かに普通では考えられないな」

「ヤツは俺たち霊能者がいることを、始めから知ってたような口調だったぜ」

それともう一つ、神楽坂は気になっている事があった。

それは悪霊が発していた邪気だ。

神楽坂たち霊能力者が持つ『霊気』、そして悪霊が持つ『邪気』は総称として呼ばれているが実は違う。

同じ指紋や目の虹彩を持つ人間がいないように、霊気や邪気にも個人、個体を識別することが出来る霊能の指紋と呼べるものがある。それが霊力の『性質』だ。

霊能力の源である霊力は個人によってその性質が異なり、霊能者はそれを感じ相手が誰なのか、味方なのか、それとも敵なのか判断する事ができるのだ。

「あの悪霊が発していた邪気、健ちゃんも感じただろ？」

「……ああ、余り心地良いものでは無かったな」

「相変わらずの気持ち悪さは変わらないが、その中に感じたイメージ。俺が一番最初に連想したのは、ナイフみたいな切先の鋭い刃物だ。実際、ヤツが持っていたのは馬鹿でかい鎌だったしな」

個人の能力や性癖（心理、癖や偏り、嗜好、性格）などが霊力の性質となる。

この事から生徒に怪我を負わせ、神楽坂と対峙した悪霊は刃物に強い執着心を持ち、相手を切り刻みたいという衝動に駆られていると考える事ができる。

「今更、霊が物体（刃物）をどうこうつてのは考えられねえ。恐らく生前の嗜癖^{しへき}つてところか」

「……成る程。つまり悪霊は生前から刃物に対する強い執着心があった、と」

それにしても嗜癖とは、光志にしては難しい言葉を知っているな」

「お、俺だつて一応は勉強してるんだぜ？ ま、どうやって邪気を制御していたかまでは分からねえけどな」

「……ほう、それは関心だ。……話がずれたな。」

それは、何故悪霊が知性のある発話ができたのか、その理由が分かれば邪気の制御も含め全て説明が付くかもしれないな」

「今のところ、これ以上の事は分からないな」

神楽坂は立ち止まり夜空を見上げる。

星が輝く空には三日月が悠然と浮かぶ。

雲に隠れた月が再び現れ、差し込んでくる月光が神楽坂たちの前方を照らす。

その時。

前方から足音が聞こえてきた。

街灯が照らす範囲の外にいるのか此処からでは姿を見る事ができない。

だが、足音はゆっくりと確実に近づいてきている。

「誰だ？ 学園には俺達しか残ってないはずだが……」

足音から少なくとも藍苑ではないことだけは分かる。

彼女は常に踵の高いパンプスを履いているためレンガ等の固い通路を歩けば、ヒールが地面に当たる独特の歩行音が聞こえてくるからだ。

（邪気は感じられねえ、悪霊じゃなさそうだな……）

知性がある悪霊を相手にしていることもあり、神楽坂は何時でも戦えるよう備える

そして、足音が一番大きくなった時、その主が分かった。

「天河！」

「神楽坂くん？ それに長緒君まで」

五メートル程先の街路灯の光の中に現れたのは制服姿の天河だった。

思い掛けない出会いに神楽坂と天河はお互いに驚きつつ近寄った。

「どうしてこんな時間に？」

「それはこっちの台詞。まさか二人とも放課後ずっと残ってた訳じゃないでしょうね？」

両手の甲を腰に当てて、主に神楽坂をジト目で睨んでくる天河。

「ま、まあな」

「まあなつて……。学園に居残つてるところを先生に見られたら怒られるだけじゃ済まなくなるのよ!？」

「言つてゐる事は最もだけど……。今の天河にそんなこと言えるのか？」

神楽坂は苦笑いながら天河の矛盾を突っ込む。

突っ込まれた彼女は、ばつが悪そうな表情を見せた。

「そ、それはそうだけど……」

「天河も気になる事があるから来たんだろ？」

「うん。それで藍苑先生に話をしようと思つて。神楽坂くんたちも？」

「そんなところだよ」

隣にいる長緒も頷いて答えた。

「けど、ま、天河の勘は合つてゐるぜ」

「え？ まさか、やっぱり犯人は人間じゃなくて悪霊……？」

「ああ、さつき接触した。死神の格好をしたヤツにな」

「死神つて……なんでまたそんな格好を」

「さあな？ 相手がどんな姿だろうと俺達が倒さなければならぬ敵に違いはねえさ」

「そうだね。ところで……その肩の解れどうかしたの？」

「ん？」

右肩の傷（天河からは解れ程度にしか見えていない）に気付いたのか指を差してきた。

「これが、心配ねえよ。ただの掠り傷さ」

肩を回して見せる。

「本当に？」

天河には肩を庇っているように見えたのか、疑いの目を神楽坂に向ける。

その不自然な動きは長緒の目にも映っていた。

「……光志」

「うおっ！？」

突然、神楽坂の顔右側面に長緒の鋭い正拳が襲い掛かり、その拳を顔を逸らしてかわした。

「長緒君！ いきなり何を！？」

「……ふ、やはりな。その右腕が証拠だ」

長緒はゆつくりと拳を収めたあと、神楽坂の右腕を指差した。

「なんだ気付いてたのか健ちゃん」

神楽坂は顔を逸らして拳を避けようとしたわけではなかった。

本当ならば右手を上げて長緒の拳を受け止めるつもりだったが、思うように動かず、止むを得ず違う避け方をせざるを得なかったのだ。

それは、不自然に上げた神楽坂の右腕が証明していた。

「神楽坂くん、もしかして怪我してる？」

「大丈夫だ。言っただろ？ 掠り傷だって」

「……体は問題無くとも切られた霊体は無事ではないだろう。現に

右腕の反応が鈍くなっている上に、霊力の出力も低下してしまっている筈だ」

「本当なの？」

心配そうな表情を見せる天河。

隠していても意味は無いと感じた神楽坂は事実を言う事にした。

「ああ、本当だ。悪霊の鎌に切られてから右肩が思うように上がらねえ」

悪霊の鎌で負傷したことにより、肩を含めた右腕が自分のものではないかのように重く、感覚も薄れてきてしまっていた。特に負傷した右肩は腕を水平以上に上げることすら出来ない状態だ。しかも、神楽坂の利腕は右。これでは満足に武器を振るうことも難しいだろう。

「か、神楽坂くん、ちょっと——いいかな」

「何だ？ 天河？」

改まって天河が言う。

彼女は何故か落ち着きの無い様子で声も小さく、肝心な部分が聞き取れなかった。

「だ、だから、ちょっとでいいから触ってもいいかなって……」

気のせいかな、天河の顔が赤らんでいるように見える。

しかも先程から視線を合わせては外す、を何度も繰り返しており彼女が何をしたいのか分からないので神楽坂も答えようがない。取り合えず何処を触りたいのか聞き返すことにした。

「何処を触りたいんだ？」

「そ、その……胸を」

「胸！？」

「へ、変な誤解はしないでねっ！ 私の能力で神楽坂くんの状態を診たいってこと！ ほ、ほら、A校舎で制服を切られた彼女の容態を診た時みたいになっ！」

思い切って言い放った天河の顔は火を噴いたように赤くなっていた。

そして、赤くなった顔を隠すかのように俯けさせる。

「そ、そういうことか、別に構わねえぜ？」

特に断る理由もない神楽坂は承諾した。

その言葉に天河は顔を上げ、少し嬉しそうな表情を見せた。

「軽く手を置かせて貰うただだからっ、体を楽にしてねっ」

「わ、分かった」

お互いの距離は一メートルも無い。

軽く手を伸ばせば相手に届く距離になると流石に神楽坂も緊張してしまう。

そんな中、天河の右手が胸部、丁度心臓の位置に優しく乗せられる。

異性である天河に触れた神楽坂は、自分でも鼓動が早くなっていくのを感じた。なんとか落ち着かせようと試みるが出来るはずもない。それどころか自分の鼓動が天河の手に伝わっているのではと逆に不安になり更に速めてしまう。

手を当てられる時間は一分と掛からないとは思うが、十五分、三十分、一時間にも感じられた。

「あ、ありがとう。もういいよ」
「そ、そうか」

接近した状態のままでは恥ずかしい。

神楽坂は単に離れるだけでなく通路の縁石に座って結果を聞いた。

「どうだった？」

「長緒君の言う通り、体と一緒に霊体まで切られてるみたい」

霊体は魂から発せられるエネルギーが具現化した総称で、肉体を失った幽霊などがこれに当たる。魂と混同されることも多いが実際はエネルギー体で、肉体の維持など生命活動に必要な要素の一つだ。神楽坂の霊体は悪霊の鎌に切られたことにより傷つき、負傷した右肩から指先までの流れが悪くなっている。これは例えば肉体の傷が治っても、霊体の傷が癒えない限り完治することはない。

「霊体の傷は、普通の人より早く治ると思うけど無茶はしない方がいいと思う」

「そうらしいな。さつきから右腕に霊気を送ろうとしてるけど、その度に傷口を無理矢理広げられるような痛みが走りやがる」

「だ、だから無茶しちゃ駄目だってばっ」

「……天河。ヒーリングは魂を癒す才能を持つ者だけの力だと聞く。その力で光志の傷付いた霊体を治すことはできないのか？」

「確かに霊体を含む魂が負ったダメージを治療することは出来るけど、その術は高等術で今の私の力じゃ肉体の傷を癒すことしかできないの。……ごめんなさい」

天河は申し訳なさそうに神楽坂に向かって謝った。

「気にする事はないさ。霊体の傷も明日には治るだろ」

「う、うん。神楽坂くんの霊力ならそんなに掛からないと思う」

天河を勇めながら神楽坂は立ち上がる。

そして、これからの事だが……

「ん？」

校内に潜伏する悪霊に対してどうするか、対抗策を話し合おうとした時、この場にいる三人の中から電子メモディが聞こえてきた。どうやら携帯の着メロのようだ。

「あ、ごめん。私の携帯みたい」

天河は二人に断りながら背中を向けて電話に出た。

聞こえてくる話の内容から藍苑と会話しているようだ。

その間、神楽坂は右腕の感覚を確認するために手を軽く握って拳を作ってみる。激しい運動をした訳でもないのに右手が痺れ、握力も低下が著しい。軽い物なら握めそうだが戦闘にはとても耐えれなさそうだ。

（あの時、体に覆った霊気で十分防げた筈だが……甘かったか）

霊気は攻撃だけでなく、防御にも使われる。その力は自由にコントロールする事が出来るが、防御に回した霊気よりも相手の攻撃力が勝っていれば破られてしまう。

十分な霊気の壁で防いだにもかかわらず、それを貫き、神楽坂にダメージを追わせた。

あの大鎌には特殊な力が備わっていると見た方がいいだろう。

（単なる見掛け倒しじゃないってことか……）

「先生！ 先生っ！？」

天河の叫び声に神楽坂は我に返った。

「どうしたんだ？」

「分からない、突然先生の様子がおかしくなって、携帯を落とした音が聞こえて……！」

再び悪霊が現れた、と神楽坂は直感した。

「先生はまだ教官室にいるのか！？」

「大事な書類を忘れたって、取りに移動してたみたいだけど……」

まずは藍苑の安全を確認することが先決だ。

広大な敷地を持つ学園を闇雲に探しても仕方がない『大事な書類』ということは、生徒が簡単に出入できる場所には置かない筈だ。となれば彼女の仕事場か溜まり場、職員室か先程までいた教官室のどちらかに移動している可能性が高いことになる。

神楽坂はその場からA校舎二階を見上げる。

藍苑がもし職員室に辿り着いているなら明かりが点く筈だ。

しかし、その様子は一向に見られない。

「何度も呼びかけてみたけど、反応ないみたい！もしかして悪霊に襲われたんじゃない？……！？」

「ここでグズグズしてる暇はないか……！」

藍苑を見つける為には二手に分かれるしかない。

後は三人をどう分けるか。

ここで、負傷している神楽坂を気遣ったのか長緒が提言した。

「……光志、教官室へは俺一人で向かう」

「健ちゃん、一人で大丈夫なのか？ 相手はただの悪霊じゃねえぜ？」

「……ふ、天河は後衛だぞ？ 誰が守るんだ？」

「そ、それは……」

三人を二チームに分けるということは、片方が単独で行動しなければならなくなる。武器を持たない天河は後衛で戦闘には不向き、そして神楽坂は片腕が使えない。

そうなると長緒が単独になるのは必然のことで神楽坂も言い返すことが出来なかった。

「神楽坂くん！ 私たちも早く！」

「あ、ああ！」

教官室へ走る長緒の背中を見送りつつ、神楽坂は天河と共にA校舎二階職員室へ急いだ。

011：切裂き魔の亡霊

「神楽坂くん！ あれを見て！」

昇降口へ向かう途中、天河が何かを見つけたのかA校舎二階を指差した。

「明かり……？」

彼女が指差した先は職員室に通じる廊下。

小笠原が襲われた職員室を挟んだB校舎の廊下だけが激しく不規則に明滅している。まるで使用限界に達した蛍光灯のような光のちらつき方だが、百メートル近くある通路の照明全てがそうなるわけがない。

この現象は見覚えがあつた。そう、体育館に悪霊が現れる直前に起こった現象と同じだ。

そして、不穏な空気と共に邪気が発生。

A校舎を包み込んだ。

「出やがったなっ！」

「な、なに……この感じは……」

悪霊の邪気を初めて感じた天河は悪寒を感じたのか両手で自分を抱きしめた。

顔色が悪くなり表情も険しくなる。

「この胸糞悪くなる邪気がヤツさ」

「夥しい数のカッターやナイフが具現化して、感じてる私にその刃先が向けられているみたい……。でも邪気の反応自体は小さい……？」

「俺も良く分からねえんだが、ヤツは俺たち霊能者と同じく霊力をコントロールできるみたいなんだ」

「そ、そんな、既に肉体を失った霊体の状態なの！？」

「とにかく急ごう、明かりが点滅してる廊下は職員室を通った先だ」

神楽坂と天河の二人は第一体育館側の昇降口に入る。
時間がないため靴は履いたまま、土足で階段を駆け上がり二階に到達。

蛍光灯が消え等間隔に配置された補助灯と、避難誘導灯の僅かな光を頼りに職員室へ走る。

「藍苑先生以外、みんな帰ってるみたいだけど職員室の鍵開いてるかな……」

「先生が最後の戸締りするだろうから、まだ開いてると思うぜ？」

「開いてなかったら……？」

「その時は……始末書、覚悟しといてくれ」

「……手伝ってもらうからね！」

暗くてお互いの顔はハッキリとは分からないが笑い合っている口調だった。

神楽坂の予想通り職員室は明かりが消されているだけで、不透明のガラス窓付き扉の鍵は掛けられていなかった。天河も鍵を壊す心配がなくなり心の中でホッと胸を撫で下ろしていたことだろう。

神楽坂が左手で扉を開け、二人は室内に入る。

幅二つ、奥行き三つ、教室六つ分の広さがある職員室。補助灯も避難誘導灯もない暗闇の空間、所々に固定電話の電源ランプ等、電子機器が放つ光が僅かに灯るのみ。

「神楽坂くん！」

天河が正面を指差した。

暗闇の中に小さくポツンと存在するB校舎側の扉のガラス窓から、不規則に明滅する光が差し込んでいる。ただそれだけのことだが、扉の向こうに在るかも知れない何かに不安を感じられずにはいられない。

しかし、職員室に辿り付くまで藍苑の姿はなかった。

「明かりが付かない……」

「邪気が干渉しているのかもしれないな」

廊下とは違い教師の机や備品等が乱雑に並べられた職員室を明かり無しで進む事は難しい。窓側なら差し込んでくる月の光で多少は見えるかもしれないが職員室の中央部にはその光も届かない。天河が近くの壁にある照明スイッチを入れるが反応が無く、スイッチを切り替える音だけが空しく響く。前方の扉の向こうで不可解な明滅を繰り返す現象を考えると、電気が点かないのも十分にあり得る現象だ。

「携帯のライトを使うしかねえな」

「それしか無さそうだね」

入り組んだ室内を携帯のライトを頼りに進む。

その途中、神楽坂は、放課後掃除をしていた生徒が直し忘れたのか書類棚に立て掛けられていた長篇を走りながら左手で取った。

「何を取ったの？」

「悪霊専用の掃除道具さ」

携帯の小さなライトのお陰で二人は支障無く扉の前に辿り付く。
そして、左手が塞がっている神楽坂に代わって天河が扉を開けた。

「……」

前に出た神楽坂は、右肩を引き、左手に持った簾の先を前に向けた半身の体勢を取って前方を見据えた。

百メートル近くある直線の廊下は、天井に設置されている全ての蛍光灯が明滅している。それは、単にスイッチを交互に入り切りするような感じではない。消えてしまいそうな僅かな光を放ったと思えば、元の光量に戻るを不規則に繰り返している。

「これも悪霊の仕業か」

「め、目がチカチカする……」

「暗闇よりかはマシだな……」

光の強さよりも明滅を繰り返すことによって目が疲れストレスを感じてしまう。

二人は目を細めながら藍苑を探す。

「神楽坂くん！ あそこ！」

「いたのか……！？」

左手で庇ひかを作った天河が前方を指差した。

光に耐えながら彼女が指し示した方向を見ると、十メートル程先に人が立ち尽くしている。

服装から生徒ではない。

神楽坂の狭まった視界に映ったものは。

紅い長髪の髪に、赤いパンプス、そして何時もの露出が高いアダ

ルトな服の上から白い研究服を羽織った藍苑涼子の姿だった。

二人は彼女の三メートル近くまで駆け寄った。

「せ、先生——！」

「あら、貴方達どうしたの？ 血相変えて」

藍苑は二人に対して偶然会ったかのような表情と口調で返してきた。

「せ、先生？ 大丈夫なんですか？ 何かあったんじゃないんですか？」

「何のこと？」

「え……？」

困惑する天河。

天河の話では携帯で通話中、急に藍苑の様子がおかしくなったとの事だったが、神楽坂の目にも特に違和感などは感じられない。

「で、でもさつき凄く苦しそうな声を……」

「……私は調子いいわよ？ おかしなことを言う娘^{むすめ}ね」

藍苑はクスクスと笑った。

「神楽坂くん、なんだか変だよ……先生じゃないみたい……」

「……」

神楽坂は無言で藍苑を見据える。

彼女は右肩を引いた軽い半身の状態で右手首の先が体の後ろに隠れている程度。天河は違和感を覚えているようだが神楽坂には感じられない。派手な服装で目のやり場に困る何時もの藍苑に見える。

次に彼女の足元を見た。
そこには。

(……アレは)

床に散らばった書類と一緒に赤い携帯電話が落ちていた。
天河との通話から二階職員室に辿り付くまで五分以上は掛かっているはず、十分な時間があつたにもかかわらず書類はおるか携帯までも放置しているのは不自然だ。

それとも一つ。

廊下に設置されている全ての蛍光灯が、勝手に明滅するという物理的に有り得ない状況下にいるのに気にも留めていないこと。心霊現象に対して肯定的だとしても反応が鈍すぎる。

「先生？ それは先生の携帯じゃないですか？」

床の携帯電話に天河も気付いたようだ。

「え？ わ、私ったら何時の間に落としたのかしら！」

天河に言われた藍苑は、慌てて携帯を拾い上げ研究服の外ポケットに入れた。

散らばっている書類は踏みしめて。

「と、とにかくこっちに来なさいな。職員室で珈琲でも淹れてあげるわ」

職員室は神楽坂、天河の後だ。方向が違う。

「せ、先生——」

「待て天河」

神楽坂は方向が逆だと言おうとした天河を止め、藍苑に聞かれなように小声で言った。

（な、なに？ 神楽坂くん）

（いいから、俺に任せて調子を合わせてくれ）

（う、うん分かった）

神楽坂が先に足を進め、不安そうな表情を見せる天河はその後が続く。

そして、お互いの距離が二メートルを切ったところで神楽坂は足を止めた。

「なあ、先生」

「なに？ ほら止まってないで先に職員室に行きなさい」

そう促す藍苑の顔から神楽坂は視線を外さない。

彼女の表情は平静を保っているようだが僅かながら違和感を感じる。更に一瞬視線を外し明後日の方向を見るなど、まるで嘘を取繕っているかのようにも見える。それに加えて神楽坂が立ち止まったことが予想外だったのか、後に隠した右腕を出し損ねたようにも見えた。

心の中で確信した神楽坂は鋭い視線を藍苑に向けて言い放った。

「てめえ、取り憑きやがったな……！」

その瞬間、偽者（中身が）だと看破された藍苑は、右腕を床と水平に振り右手に隠し持っていたナイフのような刃物で神楽坂の左脇下を狙った。

神楽坂は床を軽く後に蹴り、バックステップで回避する。

「神楽坂くん！」

「天河、下がっていてくれ！」

心配する天河を後に下がらせ、自らも距離を取って箒の先を藍苑？に向け牽制する。

彼女の目には光は無く虚ろ、焦点が合っているのかも怪しい。顔を俯かせ照明が明滅する度に表情に影が掛かる。

両腕は力が抜けたかのようにダラリとさせ全身が左右にゆつくりと揺れていた。

そして、何よりも右手に持つ刃物と思われる物。

刃の短いナイフのようだが果物ナイフといった小振りではなく、刃渡りが三十センチはある山刀と同じ長さ。形状は物を切断するための実用的かつ効果的な形はしていない。柄も含めて直線であるべき箇所が曲がり、他の箇所も大きく歪んで捻じれていたりと奇抜な見る者に生理的な嫌悪感を抱かせるデザインをしている。

「な、なにあのナイフ……もしかして先生……の？」

「いや、先生に取り憑いてる悪霊の物だろうぜ」

「悪霊が刃物を……？」

「……ただのナイフじゃないかもしれねえ」

「あゝあ、もうちょいで邪魔者を始末できたんだがなあ>

「!？」

突然の声に神楽坂は藍苑を注視し、天河は身構える。

今の声は藍苑が発したものだ、それは女性のもではなく明らかな男性の肉声だった。これは、彼女の声帯から発声されたものではなく霊気を含んだ言霊によって聞こえている。

神楽坂はこの声の主に検討は付いていた。新任教師である小笠原を

襲った悪霊の声だ。

「残念だったな」

神楽坂は箒の先を藍苑に向ける。

<……よく分かったな>

「簡単な事だ。職員室は俺たちの後ろだぜ？」

<チツ、もう少し調べとくべきだったか……>

悪霊の言葉と同調して、憑依された藍苑の口も動き表情も変化する。

「床に携帯を落としたまま、取りに来たはずの書類は踏みつける。

霊として彷徨っていた長い時間の中で人間味も無くしてしまったよ
うだな！」

<長い間？……クッククク——ハアーツハツハツ！！>

「何がおかしい？」

<これが笑わずにおけるかよっ！ 貴様は俺が現世に現れるまで何
十年も狭間を彷徨ってたとも思っているのか？>

「……なんだと？」

<貴様の言う通りそこら辺の雑魚霊ならまだしも、俺は違うんだよ>
「人間死んでも寝言は言うんだな。初めて知ったぜ。霊が昨日今日
で悪霊化する訳が——」

<それがするんだよ！>

取り憑かれた藍苑は、不気味なナイフの刃を舌で舐める仕草をして
見せた。それも、神楽坂に分かるようにわざと刀身を見えるように
して。

「お前がそうだと？」

「神楽坂くん、私も有り得ないとは思うけど……あのナイフ、まさか切裂き魔の霊なんじゃ……」

「そんな訳が……」

神楽坂も、あの悪霊が二日前に自殺した連続傷害事件の犯人ではないか、と考えなかった訳ではない。制服だけを切られた第一の事件、傷害事件にまで発展してしまった第二の事件、未遂に終わった第三の事件。そして、藍苑から聞いた『声を掛けられた』という小笠原の証言。それらを合わせると悪霊の正体が切裂き魔であると簡単に推察できる。だが、命を失ってたつた二日で悪霊化することは神楽坂も聞いたことが無く、切裂き魔が悪霊であると結論付けることができなかったのだ。

霊になることは簡単だ。寧ろ死んで直ぐに成仏できる方が珍しい。人間は必ずと言っていいほど生に未練を持つからだ。強い恨みや憎しみ、怒りなど負のエネルギーを溜め込んだ霊が悪霊と化す為には長い年月が必要となる。

しかし、神楽坂や天河が持つ霊能学の常識を悪霊は高らかに笑い飛ばした。

「流石、お嬢さん察しがいいねえ。早くその柔らかそうな体を刻んでやりたいよ」

「や、やっぱり切裂き魔の霊なのねっ！」

「くそうさ。俺の自殺は見てくれたかなあ？ 最高のショーだったろう？」

もう一度笑い出しそうな口調で話す悪霊は、視線は此方に向けたまま顔を天井に向け喉元にナイフを突き立て自殺した模擬をしている。

「ああ。見苦しい最後だったと聞いてるぜ」

<見苦しい？……クククツ。肉体に縛られ続けているお前等にはそう見えたのかもな！>

「——っ！？」

悪霊は一瞬で間合いを詰め神楽坂の左胸を狙って水平に持ったナイフを突き出した。

肋骨を隙間から心臓を狙った一撃だ。

神楽坂は間一髪のところまで体を逸らし避ける。

とても藍苑の身体能力とは思えない、不意を付いてきた時とはまるで違う鋭い動きに冷や汗をかいた。

だが、悪霊の攻撃は終わらない。

ナイフを左手に素早く持ち替え、踏み出した右足を踏み込んで左足を出し、避けた神楽坂に対して直角に追撃する。これも心臓を狙った必殺の一撃だ。

「くっ——！」

最初の攻撃を避け終えたばかりで体勢が整い切れていない神楽坂は、悪霊のナイフを筈で叩き落そうとしたが相手が藍苑であることを思い出し、やむを得ず後に退いて間合いを取った。

<……なんだ、避けるだけか。その二本の腕は飾りか何かか？>
「……」

神楽坂の着ている学生服の胸部付近が切裂かれている。

ナイフを叩き落すことを躊躇ったことで完全にかわせなかったのだ。

相手が悪霊だとはいえ藍苑の体だ。物理的な打撃を与えることは彼女を傷付けることになる。

< ああ、そういえば片腕は使えなかったんだっただなあ。具合はどうだ？ >

「確かめてみるか？」

< その必要はない、お前は俺の新たな力で切られたんだからなあ >
(まだ完全に治ってない……か)

神楽坂は右腕を動かそうとするが力が入らず肩を上げることができない。

< ほー多少は動くのか、こいつは驚きだ >

(……どうする?)

神楽坂は戦闘中の僅かな時間に考える。

分かっていることは自分の能力では、藍苑の体から悪霊を引き摺り出すことは出来ないことだ。前回、人体模型に取り憑いた低級霊の時のように霊気を流し込む訳にはいかない。そんなことをすれば藍苑自身の霊的構造を破壊してしまい最悪命を落してしまう。悪霊を倒すためには他の方法で彼女の中から追い出す以外に勝機はない。

< ……何を考えているのか、大体察しはつくぜえ？ 俺を、この女の体から追い出したいんだろ？ >

「肉体に縛られてるとか大それた事を言ってたわりには、人間の体に隠れるんだな。本当に縛られてるのはお前の方じゃないのか？」

この挑発に乗ってくればいいが……。

< ……安い、安過ぎる挑発だな。俺は利用してるんだよ、分からないか？ >

「これは……」

今まで明滅を続けていた照明全てが正常に点灯する。
そして、悪霊から発せられていた邪気も完全に消えた。

<霊体は便利な反面、邪気は完全にカットできないからなあ。貴様ら霊能者から姿を隠すにはこの方法が一番なんだよ。さあ、貴様もこいつ（ナイフ）の餌食になりなっ！>

「ちっ！」

悪霊の連続攻撃を神楽坂は避け続ける。

相手の動きは速く、首の総頸動脈、肺、心臓等、一撃で戦闘不能に陥ってしまう急所ばかりを的確に狙ってくる。このまま回避に徹し続けていても何れ捉まってしまうだろう。しかし、だからといって藍苑を攻撃することもできない。彼女を気絶させる手段も考えられるが実質、悪霊が操っているので意識の有無は関係ない。

（健ちゃんは——！？）

B校舎にいる長緒ならば何とかこの状況を打開できるかもしれない、と考えるが彼はまだ此方に来ていない。だが、邪気が消えたことは彼も気付いているはずだ。状況を聞くために携帯に連絡がきている可能性もある。

「天河！ こいつで健ちゃんに——」

神楽坂は学生ズボンのポケットから携帯を取り出して天河に投げる。

だが、宙を舞い天河へ向かう携帯を、悪霊はナイフで串刺しにし床に振り落とした。

<……なあんのつもりだ？ 助けでも呼ばうつてのか？>
「……くそつ駄目か」

悪霊を天河と挟んだ状態で投げたのも失敗だったが、一瞬に反応してみせた反射神経と一突きで宙に浮いた携帯を貫いた技術はやはり侮れない。

<まだ無駄な足掻きをしようとしているみたいだが……それも此処までだ>

ニヤリと笑う悪霊は片手でジャグリングするナイフの刀身を神楽坂に見せた。

「……その趣味の悪いナイフがなんだってんだ？」

神楽坂は悪霊との間合いを保ちながらゆっくりと移動し天河の前へ戻る。

<貴様の血は頂いたって言ったんだよ。まあ男なんその血は欲しくもないがな>

ナイフの切先に赤い鮮血が付着している。

あの血は自分の物だと気付くと同時に、左の首筋に痛みを感じた。どうやら悪霊の連続攻撃を完璧に避け切れていなかったようだ。

「薄皮一枚切った程度で勝ち誇られてもな」
<まあ、見てろ>

神楽坂の血が切先から細い溝を通り、刀身の根元にある模様へと流れていく。

そして、その血が模様に流れ込み染み渡ると、赤い光と共に血の円陣となつて浮かび上がった。

「ぐあ——！？」

突然、強烈な虚脱感と眩暈に襲われた神楽坂は、立っている事すらも困難になり堪らず片膝を床に付いた。

「神楽坂くん！？」

すかさず天河が駆け寄る。

<フヒハハハッ！ どうだあ？ 『呪魂のナイフ』の味はっ！>

「じ、呪魂のナイフ……だと！？」

<こいつはなあ俺が長年愛用している、啜った血の持ち主を呪い、相手の霊気を死ぬまで吸い続ける呪いのナイフなのさ>

「ぐ……」

凄まじい勢いで霊気が吸われていくのが分かる。

このままでは数分と持たずに全ての霊気を失ってしまうだろう。

霊気を失う事は即ち死を意味する。

呪いを解くためには呪魂のナイフを破壊するしか方法はないが、今は霊力の出力を上げ吸われる量よりも高い霊気を発生させて、霊気がゼロになるのを阻止しなければならない。

<だろうなあ、死にたくなかったら出力を上げて常に霊気を放出し続けなさいけないよなあ？ 魂が空になるまで>

神楽坂から奪われた霊気が呪魂のナイフの血陣に吸収されていく。

「な、成る程な…… たった二日で悪霊化できたカラクリはそのナイ
フか……」

神楽坂の頬に一筋の汗が流れた。

012：反撃

「大丈夫っ!？」

「な、なんとかな……!」

神楽坂は天河に付き添われながら立ち上がった。

自分の体重に足が僅かに振るえ始め力が抜けていく感覚、悪霊の呪いのナイフによる傷から大量の霊気が吸われていく。

霊気が空にならないように霊力の出力を上げてはいるが無限にあるわけではない、何時か尽きる時がきてしまう。

<その霊気……。霊力だけはそこらの霊能者よりも高いようだが、それも時間の問題のようだなあ?>

悪霊は血陣が浮かぶ呪魂のナイフの切先を人差し指と親指で挟んで持ち、左右に軽く振りながら神楽坂に見せ付けた。口元を大きく歪ませた笑みを浮かべて。

「天河、ここは俺に任せて健ちゃんを――!？」

天河に長緒を呼びに行かせようとしたが、唯一の退路でもある職員室の扉は悪霊の力によって閉められてしまった。

<おーっと、逃がしはしないし仲間を呼ばせもしないぜえ? 霊能者を一度に三人も相手にするほど俺も馬鹿じゃないんでねえ>

「くそっ、打つ手無しか……」

前方には藍苑に憑依した悪霊。

後方の扉は断たれ逃げることもできなくなった。

藍苑を救うことはできないのか、半ば諦めかけていた時だった。

「……私に任せて」

「天河？」

前に出た天河に神楽坂は驚いた。

彼女の能力はヒーリングくらいしか分かっていないが、この状況を引っくり返す程の力が有るとも言うのだろうか。

「今の私の力じゃ倒すことまでは出来ないけど、先生から悪霊を引き剥がすことくらいならできると思う！」

天河は真剣な表情で神楽坂を見る。

その目には明確な意思と闘志を感じさせ、それが嘘や虚勢ではない事を感じさせた。

「分かった」

神楽坂は天河を信じて隣に並ぶ。

天河は悪霊を真つ直ぐに見据え、両手を胸の前で広げ三角形のような形を作り精神を集中させる。

霊力から霊気が発生しそれは体から放射状に広がり始める。

霊気の光と流れが、彼女の蒼い髪を舞わせ光り輝かせた。

「……これが天河の霊気か」

『温かい』

これが神楽坂が一番に彼女から感じたものだった。

全ての闇を照らし出す光と、魂の安らぎを感じさせる温かさ。これが彼女の霊力の性質なのだろう。

聖書と思われる一文を詠む彼女の霊気が、胸に提げた小さな十字架に集束し増幅されていく。

天河が何をしようが自分を倒す事は出来ないと高を括り笑っていた悪霊も、彼女の力の性質に気付いたのか表情に余裕さが無くなった。

<……この吐き気がする神々しさは、俺の一番嫌いな感覚だ……ま、まさかつ！？>

「エクソシズムツ！！」

その言葉と共に天河は、重ねた両手を悪霊に向け胸の十字架に集束、増幅させた霊気を一気に解放させた。

<ふ、被魔師だとおおお！！？>

まるで真昼にでもなったのかと勘違いさせるような眩い光は、一瞬にして廊下を駆け抜ける。

天河の両手から放射される指向性を持つ光は、藍苑の体ごと悪霊を包み込みこんだ。

光に包まれる中、藍苑の背中から黒い霧のようなものが現れる。

彼女に取り憑いていた悪霊だ。

悪霊は引き剥がされまいと必死にしがみ付いていたが、天河の術に抵抗することができず遂に藍苑の体を解放してしまった。

天河が放った術は悪魔祓い（エクソシスト）の称号を持つ者だけが使うことができる神聖術。この術は生物や物体に取り憑いた悪霊などに絶大な威力と効力を発揮し、熟達した被魔師^{ふつまし}は悪霊を引き剥がすだけではなく同時に滅することも可能だ。

「す、凄いな……」

ただ、ただ驚くことしか神楽坂はできない。

廊下を駆け抜けた光が治まると、藍苑は体をゆらりと傾かせ膝から崩れるように倒れ込み、持っていた呪魂のナイフも一緒に床に転がった。

「はぁ……はぁ……やった……！」

両膝に手を置いて息を荒げ、汗を流す天河。

憑依した悪霊を強制的に追い出す効果的な術だが体にかかる負担も大きいようだ。

「大丈夫か、天河？」

「ええ、効果あったみたいね」

「ああ、大したもんだぜ。立てるか？」

「ありがとう」

神楽坂は天河に手を差し伸べる。

彼女も微笑みを見せながらその手を取った。

しかし、まだ悪霊を倒した訳ではない。

藍苑という肉体を失ったことにより、完全に消えていた邪気が再び発生し廊下の蛍光灯も明滅し始めた。

<……退魔術か、良い能力を持っているなあお嬢さん>

悪霊の声が周囲から聞こえてきたかと思うと、神楽坂と天河の正面、床に倒れている藍苑の上に霧のような黒いモヤが発生する。

そのモヤは一つに纏まると、二つの赤黒い光を宿した人間の頭蓋骨が現れ、頸椎、鎖骨、胸骨、肋骨、肩、腕と人の骨格が創られて

いく。そして、上半身までの骨格が出来たところで黒いモヤがロープとなり体を覆った。

「あ、あれが悪霊の正体……」
「……あの時の姿だな」

小笠原を襲った時の悪霊の姿が思い返される。
黒いロープに巨大な大鎌、正に死神を思わせる格好だった。
しかし、目の前に現れた悪霊の白骨化した手には何も握られていない。

<まだ安心するのは早いぜえ？　ここからが本番なんだからなあ！>

悪霊は両手を水平に広げる。

気を失っている藍苑のそばに落ちている呪魂のナイフが浮き上がり悪霊の正面へ移動する。すると宙に浮くナイフがゆっくりと回転し始め、徐々にその速度を上げ始めた。

回転する度にナイフはその姿を変えていく。

三十センチ程だった刃は大きく伸び曲がり、握った手から少しはみ出る程度だった柄は長く細くなっていく。

色は黒一色となり、人骨の不気味な装飾が湧き出てくる。

先ほどまでの面影は全くない。

悪霊の前で回転をビタリと止めた物は漆黒の大鎌だった。

「なるほど、その鎌は趣味の悪いナイフが変化したものだったのか……」

<まあな。ただデカくなっただけじゃないぜえ？　こいつの能力は貴様が身を持って知ってるだろう？>

「……趣味が悪い事に変わりはないがな」

神楽坂は右腕に軽く力を入れて状態を確認する。

<ククククッ……どうせ貴様はこのまま放つとけば勝手に死ぬ運命だが、それでは面白くない>

「お前、女性ばかり狙ってた切り裂き魔だろ？ 男には興味ないんじゃないのか？」

<ああ……勿論そうだ。勿論そうだとも。……だが、このまま放置するのは可哀想だ。そこで、これから俺は男女平等でいこうと思うんだが、どうだ？ 考えを改め成長していくのが人間だろう？>

「死人が何を……。ま、そいつは助かるぜ。てめえを倒せば全て解決するからな」

<その減らず口、何時まで続くかなあ？>

漆黒の大鎌を手についた悪霊は、風に流されるかのようにゆつくりと水平に移動しコンクリートの壁に入り込んだ。

「逃げたの……？」

「いや、俺達の攻撃が届かないところから襲うつもりだ」

神楽坂は箒に霊力を込めて天河と共に周囲を警戒する。

悪霊にとって天井や壁などの構築物は意味を成さない。思いも寄らないところからいきなり強襲を仕掛けてくるだろう。

何処から攻撃してくるのか、それは周囲に漂う邪氣の流れを読むしかない。

だが、悪霊も自身の邪気を抑え、自分の位置を悟られないように工夫している。

「伏せる！ 天河っ！」

「きゃっ!？」

邪気の僅かな反応差を感じ取った神楽坂は、隣にいた天河を伏せさせた。

予想通り悪霊は神楽坂たちの死角である、頭上の天井から襲い掛かってきた。

「鎌だけ……？」

「奴も俺達の力、特に天河の力を警戒してるんだろうぜ」

姿は見えないが悪霊の不気味な笑い声だけが、蛍光灯が明滅する廊下に響き渡る。

「これじゃ、何処から攻撃してくるのか……」

「奴は邪気を完全に制御できねえ、本体は僅かに周囲の邪気よりも反応が高い。まずはそれを捉えるんだ」

神楽坂は天河と共に精神を集中させて悪霊の位置を探る。

周囲には相変わらず不快さを与える邪気が漂っているが、特に際立って反応が強いところは見られない。

何処から攻撃してくるのか分からない不安と恐怖の中、落ち着いて精神を集中させることは容易なことではない。だが、悪霊が攻撃に転じる前に捉えなければ回避はおろか反撃すらも出来なくなる。

「神楽坂くん、今のうちに先生のところに！」

「そうだな！」

二人は藍苑の下へ駆け寄った。

「先生！ 藍苑先生っ！」

天河が藍苑の体を軽く揺すり必死に呼び掛けるが反応がない。

「駄目か」

「悪霊に憑依されてたせいで先生の魂が弱ってるみたい。回復するにはまだ時間が掛かりそう……」

藍苑が動ければ此処から脱出することも出来たが、そう上手く事は運ばないようだ。

「天河は先生の傍に付いててくれ」

「無理しないでね！」

（多少無理でもしないと奴は倒せそうにねえな……）

神楽坂は靈気を込めた簪を構え、天河、藍苑の前に出て距離を取る。

四方八方、自由自在の悪霊にとっては位置の概念は関係無いのかもしれないが、今までの言動や切り裂き魔の性格を考えると女性である天河や藍苑ではなく、まず自分を狙うだろうと確信していた。その確信を裏付けるかのように悪霊は神楽坂に攻撃を仕掛けてきた。

「下……！？」

僅かに高い邪気の反応を足元から感じた神楽坂は、床を蹴って横に跳んだ。

それとほぼ同時に、床から大鎌の刃が飛び出してくる。

（悪霊が発する邪気の強さは覚えたぜ。後は……）

神楽坂はその場にしゃがみ込む。

今度は側面の壁から水平に大鎌が振り切られた。

悪霊は自分の姿は見せずに神楽坂の死角を狙っているようだ。

天井、床下、そして壁、と此方からでは手が出せない場所からの攻撃が続く。

その全ての攻撃を回避するのみに徹し、箒で受けるようなことはしない。

（箒の耐久力を考えると、奴に止めの一撃を与えるまで無理はさせられねえ。かといって靈気を吸われ続けている俺にとって長期戦は不利にしかない……！）

今、箒に込めている靈気だけでは不十分だ。

だが、高出力の靈気を送れば、箒はそれに耐え切れず弾き飛んでしまっただろう。

悪霊を倒すためには、悪霊を確実に倒せる靈気をもつて箒が壊れる一瞬にも満たない時間に攻撃を叩き込まなければならぬ。

それにはまず相手の動きを止めなければならなかった。

<まあた何か企んでいるのかあ？>

月が見える窓の外に現れた悪霊は、校舎の壁を透りぬけ神楽坂の五メートル程先で静止した。

「そんなところだ」

<何を考えようが無駄だぜえ？ 俺は自由に壁を透り抜けられる。

だが、貴様にそれが出来るか？ 出来ないだろう？ まさに霊体様さまだぜ、生きてる頃はこんな芸当でできなかったからなあ！>

「あれだけの犯罪を犯しておきながら良く言えるな」

<ただの布石さ、全ては霊となり誰にも邪魔されずに愉しむ為のな！>

「多くの人を襲った理由が、悪霊になる為だと!？」
<そおさ。そして俺があえて殺人を犯さなかった訳を教えてやろう
かあ?>

悪霊は漆黒の大鎌を神楽坂と天河に見えるように向ける。
すると大鎌は再び呪魂のナイフへと姿を変化させた。

<霊になることは簡単だ。俺のように首を掻っ切ったり、ビルから
飛び降りればいいんだからな。だが、悪霊化するには莫大な霊力が
必要となり、そこら辺の人間共から頂いた霊気を靈力に変換するの
に時間が掛かっちゃう。そこでコイツの登場ってわけだ>

呪魂のナイフを面前に持ってきた悪霊は、骨となりスカスカにな
った口腔から三十センチはあるつかという、紫色をした細長い舌を
ズルリと出して切先を舐めて見せた。

「まさか霊気を溜める為だけに人を襲っていたのかっ!？」

<フヒハハハッ! 最っ高おだったぜえ? 恐怖に吞まれた獲物
の表情は! 考えてみるよ、俺に対する恐怖心にさい悩まされなが
ら一生を生きていかなきゃならないんだぜ? ゾクゾクするだろう
?>

「く……狂ってる」

<ありがとう、お嬢さん。その言葉は俺にとって至高の褒め言葉で
す>

戦慄する天河に対し、悪霊は上体を前に倒し右手を曲げてお辞儀
をした。

<まあ、流石の俺も数年は狭間で彷徨うだろうと覚悟はしてたが、
此処にきてたったの二日で悪霊化できるとは思っていなかったがな>

「数年……？」

悪霊の口ぶりから呪魂のナイフが悪霊化の直接的原因ではないようだ。生前、多くの人を襲いその凶刃に掛けたとしても、霊力の低い一般人ばかりで吸える霊気の量も少なかったのだろうか。

<おっと、少しばかりお喋りが過ぎたかなあ？ それにしても貴様の霊力はまだ尽きないようだな。ま、その分、俺の力が高まるだけだから構わないがな>

「……」

神楽坂は無言のまま箒を右手に持ち替える。

<貴様には死と同等の恐怖と、決して癒える事のないトラウマを与えてやろう>

呪魂のナイフは大鎌に変化し、悪霊は壁を透り抜けながら二人の周囲をゆつくりと回り姿を消した。

再び死角から攻撃してくるつもりだ。

次は何処から襲い掛かって来るのか、周囲を警戒すると同時に悪霊の邪気を探す。

悪霊は神楽坂の死角を探して動き回っているようだ。

ここで神楽坂はわざと悪霊の反応とは全く逆の方向を向く。

その隙を悪霊は逃さなかった。

今回は大鎌だけではなく、悪霊自身が姿を見せて襲い掛かってきた。

<その左腕貫つた……！？>

大鎌を振り被り、今にも斬りかかろうとしていた悪霊は一瞬動き

を止めた。

神楽坂の唯一の武器である箒を左手に持っていない。

<な、何だと!??>

「引つかかったなっ!」

振り向き様に神楽坂は、右手に持っていた箒で動きを止めていた悪霊に斬りかかった。

<ぐあああっ!??>

悪霊は声を上げながら後退し、壁の中へと逃げ込んだ。

「上手く避けやがったか……」

神楽坂の右手には箒が力強く握られている。

そう、箒を持ち替えた時、既に神楽坂の右肩は完治していたのだ。

<こ、この短期間で霊体の傷を治したのか!??>

焦燥感に駆られた悪霊の声だけが廊下に響く。

神楽坂は悪霊の反応がする天井に箒を向けて言い放った。

「相手を甘く見過ぎなんだよ。お前」

013：不穩の決着

<き、貴様あゝ……>

神楽坂の正面に、天井から悪霊がゆつくりと降下してくる。攻撃を受けた悪霊は左肩から吹き飛び腕自体を消失していた。フードに隠れ表情、頭蓋骨を見てもそれは分からないが、悪霊の声からかなりの深手を与えることができたようだ。

（大ダメージには違いねえが、あと一歩だったな……）

霊気が込められた筈の状態を見ると柄には大小様々の亀裂が走っていた。

劣勢であると悟られぬように余裕を見せて自分の優勢を示したが此方も後がない。

悪霊に対して効果が出る値まで霊気を込めた一撃は、あと一回が限度だろう。

<こ、この俺にここまでの傷を与えとはな。やはり貴様は――>
「大人しく俺たちに滅せられる。今なら苦しまずに地獄へ送ってやるぜ？」
<クッククク……ハア―ッハッハッハ―！ 確かに貴様を甘く見ていたようだあ！>

悪霊は痛みを隠すかのような苦痛の叫びを上げると、左肩口から指先まで、白骨の腕を一気に再生させ黒いローブに包ませた。

「まだやるつもりか」

<……俺の中にはまだ力が残っている。そして貴様の靈気もな。>

悪霊は再び校舎の中に姿を隠す。

(コイツ(篤)はもう限界だ。奴を倒す為には少しでも長く動きを止めねえと……)

次は簡単には自身を晒すようなことはしないだろう。それだけに先程の一撃で仕留めることができなかったのは失敗だった。

神楽坂は元より考えるよりも先に体が動いてしまうタイプだ。

何時もならその役目は長緒に任せていたが、彼は今はいない。

考えながら戦う難しさを痛感しながらも、相手の罠を見破り、裏をかくてダメージを負わせる等、靈気を吸われ本来なら焦って通常
の判断が出来なくなるであろう状況の中で良くやった方だ。

だが、今度ばかりは良い考えが思いつかない。

悪霊は姿を見せずに自分達の手が届かないところから攻撃を仕掛けてくるのは間違いない。長期戦になれば何れ靈力が底をつき戦闘
不能に陥ってしまい、それは天河と藍苑の死を意味している。

何とかして考えなければならなかった。

悪霊に確実な一撃を叩き込むことが出来る方法を。

「神楽坂くん、自分だけで何とかしようと思わないで?」

「天河……」

神楽坂は背後から掛けられた彼女の言葉にハッと我に返った。

「だが、俺達的能力では……」

「もう一度、あの術を使っわ」

「あの術? 浄化光^{エラシズム}か? けどあれは憑依した靈にしか効果が無い

筈じゃ……」

「うん、でも目晦ましくらいは出来ると思う」

昼間と勘違いさせるような強烈な光ならば、上手くいけば秒単位で動きを止められるかもしれない。

他に手はない以上、神楽坂は天河の提案に賭けた。

「最後のチャンスに賭けてみるか……！」

二人はお互いに頷き合うと蛍光灯が明滅する廊下の中構えた。

神楽坂は回復した右手で箒を握り、後ろに控える天河も自らの霊力を高めて浄化光の発動準備を行う。

<まあたあの忌々しい術を使うつもりか！　だが、憑依状態でない俺には意味はない！>

「それはどうかしら？　貴方は知らないかもしれないけど浄化光は何も憑依霊だけに効果があるわけじゃない！　物体に入り込んでいる貴方も対象なのよっ！」

<何！？　くそっ、冗談じゃねえぜ>

浄化光の光を受けなくなかった悪霊は慌てて二人の前に姿を現した。

しかし、それは天河のハツタリだった。少しわざとらしくあったが、このチャンスは逃せない。

「それを待ってたんだよっ！」

<馬鹿が！　この距離で——>

悪霊は壁の中に逃げるのではなく、神楽坂と対峙した状態のまま後ろへ逃げようとした。

しかし、悪霊は気づいていなかった。

神楽坂の背後から浄化光を放つ天河のことを。

<ぐう——れ、霊気の光が……！？>

天河の放った浄化光は悪霊を包み込んだ。

ただの光ならば悪霊に対して効果はない。だが、その光は彼女が持つ神聖な霊気により発生したもの、対極に位置する悪霊にとっては堪らない光だ。

しかし、その光も悪霊を怯ませるだけで動きを止める力はない。

「今度は外さねえぜっ！」

神楽坂は箒が耐えられる限界まで霊気を込め、悪霊に逃げられる前に接近する。

此方からは悪霊の姿がハッキリと見えるが、相手からは神楽坂の背後から差し込む後光により視界が狭まり動きも鈍くなっている。

悪霊との距離は十メートルもない。

十分に間に合う距離。この一撃を絶対に外す訳にはいかなかった。

<こ、この程度で……！>

逃げる余裕を無くしてしまったのか、悪霊は神楽坂の斬撃を受け止めようと大鎌を自分の前に割り込ませようとしたが……。

「おおおおっ！！」

気合と共に神楽坂は床を蹴って跳び、光輝く箒を一気に振り下ろす。

その一撃は悪霊が大鎌を構えるそれよりも速く、左肩から右脇腹

にかけてまるで切り裂き魔を皮肉るような形で斬り裂いた。

霊体を斬られた悪霊は断末魔とは思えない軽い声を上げて霧散していき消滅。

漆黒の大鎌が床に落ちた金属音だけが廊下に響いた。

明滅を繰り返していた蛍光灯も正常に戻り、周囲に漂っていた邪気も完全に消え失せている。

そして、限界を越えた筈は霊気の粒と共に砕け散った。

余りにもあつけない最後だったが、悪霊を倒したと手応えを感じた神楽坂は藍苑を介抱する天河の下へと戻った。

「倒したの……？」

「手応えはあった。邪気も消えたし、霊気の吸収も止まったみたいだ。」

「そっか、良かった……」

「それにしても天河の機転には助けられたよ」

「どういたしまして？」

お互い軽く笑い合った後、二人で悪霊がいた場所を見る。

そこには黒い煙を上げる大鎌が残っていた。

主を失った大鎌は黒煙と共に変化前の呪魂のナイフへ戻っていく。

「悪霊の邪気が消えたからな、変化が解けたんだろう。それにしても……」

その様子を見ながら神楽坂は近くに落ちていた自分の携帯を拾い上げた。

「見事に風穴開いちまったな……」

携帯のど真ん中に開いた穴を覗きながら神楽坂は苦笑う。電源ボタンを押してみるが反応はなく完全に壊れてしまったようだ。

「やっぱり壊れてる？」

「携帯の画面に、もろに穴が開いてるから流石にな……」

壊れた携帯を天河に見せた後、ズボンのポケットに直す。

「先生はまだ気が付かないのか？」

「もう少し時間がかかるみたい、保健室に運んだ方が良いかも」

「そうだな、俺が先生を抱えるよ」

「それじゃ私は職員室から鍵を取ってくるね」

「ああ、頼む」

呪魂のナイフの回収と長緒への連絡は後回しにし、神楽坂は意識を失ったままの藍苑を保健室に運ぶべく彼女を抱えて立ち上がる。

その時だった。

倒したはずの悪霊の邪気が突然発生し、神楽坂と天河の足を止めさせた。

あのナイフだ、と咄嗟に思った神楽坂は藍苑を抱えたまま後ろを振り向こうと体を動かす。

体よりも先に頭が回り背後の様子が視界に映る。

その視界に独りでに浮遊する呪魂のナイフが映った。

しかもそのナイフは神楽坂の背中から心臓を狙い、まるで弾丸のような速度で迫っていた。

気付いた天河が神楽坂に危険を知らせようと叫んでいる様子がスローモーションで流れる。

しかし両手は塞がれ完全に不意を付かれた形、避ける事もできない。

倒したと思われた悪霊は最後の力を使って呪魂のナイフに取り憑き、神楽坂の隙を狙っていたのだ。

刹那の瞬間、神楽坂は藍苑を守る為、自分を狙うナイフに対して背中を向けたまま止まる。

ナイフの先が体に食い込む瞬間が分からない恐怖が無かった訳ではないが、覚悟を決めて目を閉じた。

「……？」

死を覚悟していた神楽坂だったが、何時まで経っても痛みがこないことに疑問を持った。

実は既に死んでいて痛みを感じていないだけかとも思ってしまったが、両手から伝わる自分以外の温かさや重さがそうではないことを教えた。

「か、神楽坂くん……」

天河の声に神楽坂は目を開けて振り返った。

自分に襲い掛かっていたはずの呪魂のナイフは、床から立ち上がった光の柱に閉じ込められている。

円柱状の光の根元からは、細く光る筋が床を伝い奥へと伸びている。

神楽坂と天河はその筋を目で追っていくと、そこには長緒の姿があった。

「健ちゃん！」

「長緒君！」

「……迂闊だぞ。光志、天河」

壁に背を付けて両腕を組む長緒のつま先に光の筋が接続されている。

光の柱で悪霊ナイフの動きを止め、神楽坂の窮地を救ったのは今まで別行動を取っていた長緒だった。

<三人目の能力者が……。貴様、わざと静観していたな……。？>

黒いモヤが纏わり付いた呪魂のナイフから悪霊の声が聞こえてくる。

「……切札は最後まで取って置くものだ。未知なる存在が相手ならば尚更な」

長緒は光の柱に封じられた呪魂のナイフのわきを歩き、二人と合流する。

<……ち、動けやしねえ>

悪霊は必死にナイフを動かし、もがくが、その呪縛を解く事ができない。

「……無駄だ。その術は、お前程度の力では破る事はできない」

直径一メートル、高さは天井を突き抜ける光の円柱は悪霊を完全に封じている。

これが長緒の能力だ。

長緒は相手の動きを封じる能力に長けており、彼の霊力は神楽坂とほぼ同等で強力な呪縛術を行使する事ができる。その呪縛は余程の事がない限り破られることはない。

<まあいいさ。今回は俺の負けにしといてやるよ>

ナイフに纏わり付いている黒いモヤが頭蓋骨を形作り笑って見せた。

神楽坂は藍苑を抱えたまま悪霊に言う。

「お前に次は存在しない。お前が欲望のままに犯した罪を背負って逝け」

<ククククク……随分と奇麗事が好きなんだな？ 正義の味方気取りかあ？>

「何だと？」

<貴様は同じ匂いがするんだよ……。貴様は隠そうとしているようだが同類には分かるのさ、俺と同じ匂いになっ！>

「だ、黙れっ！」

<フヒハハッ！ 否定するなよお。お仲間同士仲良くしようぜえ！！>

「くっ！」

神楽坂は素手のまま止めを刺そうとしたが踏み止まった。

ここで感情のままに動くことは、悪霊と同類であると言っているようなものだからだ。

その様子に悪霊はニヤリと笑う。

<それじゃ俺はそろそろ逝かせて貰うとするか。

だが覚えとけよ、闇がある限り俺は死なない。何れまた遭おうぜ？>

そう言い放った後、取り憑いていたモヤはゆっくりと消えていき力を失った呪魂のナイフは床に落下する。

一方的に言われた神楽坂は歯を食いしばり険しい表情を見せるのだった。

切り裂き魔の亡霊を倒し呪魂のナイフを回収した神楽坂と天河、そして長緒の三人は意識を失ったままの藍苑を保健室に運びベッドに寝かせた。

「これでよし、と」

ベッドに寝かせた藍苑に天河が毛布を掛けた。

その後、彼女は神楽坂に上着を脱ぐように言う。

「霊体は治つても、まだ体の傷が残つてるでしょ？」

「お、俺は大丈夫だって。それより先生は大丈夫なのか？」

「先生は大丈夫だから、椅子に座って早く傷を見せて」

処置机の前に置いてある丸椅子に渋々座った神楽坂は、上着を脱ぎシャツの襟口から右腕を出して背中を見せた。

「シャツが破れそうだな……」

「嫌ならシャツも脱いで貰うしか……」

「恥ずかしいから我慢する」

「わ、私もそうしてくれると助かるっ。

やっぱり血が滲んでる、取り替えるからジっとしててね」

元から大した怪我ではなかったが、悪霊との戦いで傷口が広がってしまったようだ。

天河は血が滲んだ包帯とガーゼを外し、傷口を消毒する。

「いてて……」

「我慢してね。」

消毒後、再びガーゼを当て包帯を巻き直す。

「神楽坂くん、包帯を巻くから右腕を横に上げて」

「あ、ああ……」

「先生は暫くすれば気が付くと思うんだけど」

「けど？」

「目を覚ましたら多分、凄い筋肉痛に襲われると思う」

「体の限界を超えた動きをさせられりゃ、そうなるな……」

手際良く巻かれていく包帯に感心しつつも苦笑う神楽坂。

「はい、お終い。激しい動きはさせないでね、また傷口が開くから」
「分かったよ、あ、ありがとな」

傷の再処置も終わり神楽坂は服を着る。

後は藍苑が意識を回復するのをただ待つだけだ。既に山城には連絡を入れており、神楽坂たち三人は彼女を見守りながらそれぞれパイプ椅子に座る。

暫くの沈黙が続き、壁に設置されているアナログ時計の秒針の音だけが聞こえる。

その間、神楽坂は悪霊が消滅する間際に言われた言葉を思い出していた。

（俺が奴と同類だと……？）

真っ先に自分の中で否定する。

しかし、本当にそう言えるのか、と自問してしまふ。

「ごく普通の真摯な生活を送っていれば、悪霊の言葉はただの戯言と一蹴しそんな事を考える必要もない。だが、その言葉を跳ね除ける事が神楽坂には出来なかった。」

「……どうした？ 光志」

「あ、いや何でもねえよ……」

表情に出ていたのか、長緒が声を掛けてきた。
このやり取りがキツカケとなり会話が始まる。
最初に口を開いたのは天河だった。

「今更だけど、なんで悪霊が喋れたのかしら」

「喋るところか自分で考えて行動してたな」

「普通なら考えられないよね……」

「……一つ考えられることがある」

「何なんだ、健ちゃん？」

「……それはあの悪霊が『霊能力者』だったという事だ」

「『霊能力者！？』」

神楽坂と天河の声が同調する。

「……別に驚く事ではないだろう。俺たち霊能者も人間だ。確かに一般人より絶対数は少ないが有り得ない話ではない」

「霊能者の魂なら、それ以外の霊より遥かに力は強いな」

「自我も保つことができるってこと……？」

「……そういう事になるな」

「たった二日で悪霊化できた理由はこれか」

「でも、あの悪霊も数年は覚悟してるって言ってたかった？」

「……俺はその時いなかったから分からないが、悪霊がそう言ったのか？」

「え、ええ……」

「あのゲテモノナイフは、悪霊化する為の手段の一つに過ぎなかったみたいだしな」

神楽坂は書類や医学書が置かれている机に目をやった。

机の上には回収した呪魂のナイフが、刃を包帯で巻いた状態で置かれている。

「……いくら霊能者といえども、たった数日で悪霊化するのは無理だと断言できる」

「それじゃ……他の力が加わったってのか？」

「……恐らくな」

長緒の言葉を最後に、三人は静まり返る。

切り裂き魔の亡霊は消滅した。

二度とその姿を現世に現すことはないだろう。

しかし、何の要因が何の力が切り裂き魔の霊に力を与え、急激な悪霊化を引き起こしたのか、その答えは出る事はなかった。

その後、連絡を受けた山城が到着し、その数分後に藍苑も意識を取り戻した。

藍苑は取り憑かれていた時の記憶がないらしく、なぜ保健室に寝かされているのか、そして動くこともままならない筋肉痛になっているのか分からない様子だった。ただ、死神の格好をした悪霊は目撃したらしく除霊部として退治したと部長の天河が報告してはいたが。

時間も遅くなっていたため藍苑と天河は山城が車クルマで送る事になり、神楽坂と長緒（定員オーバー）の二人は通常通り徒歩で帰宅することになった。

正門を抜けた頃、神楽坂は立ち止まり後ろを振り返った。

「……どうかしたか？」

「いや……なんでもない……」

暗闇と静寂に包まれた学園。

しかし、この静けさの中に胸騒ぎのようなものを感じた。

それが何なのかは分らない。

ただの杞憂だと自分に言い聞かせ神楽坂は長緒と共に学園を後にするのだった。

014：風とセーラー服

まだ少し肌寒さが残る五月の早朝。

神楽坂は一人で通学路の歩道を歩いていた。

「眠い……」

まだ完全に目が覚めていない神楽坂は大きく背伸びをして欠伸をした。

今日の天気は晴れ。雲が殆どない明けがかった空にはまだ星を見ることが出来る。

雀もまだ寝静まっている時間帯は朝連の為に登校する部活動生が数人と、ジョギングをする人、新聞を配り終わったバイクが通るのみで何時もの登校時とは違う雰囲気があった。

神楽坂は目を指で擦りながら学生ズボンから携帯を取り出して待受け画面を表示した。（因みに前回、切裂き魔の霊に携帯を壊されたので新機種を買った）

「まだ六時じゃねえか……」

ぼやく神楽坂。

神楽坂が何故こんな早朝に、しかも一人で登校しているのには理由がある。

数日前の切裂き魔の事件で部活の早朝練習中に生徒が襲われるという事件が起こった。

当時はまだ悪霊の仕業であると分かっていたはいなかったが、前回の件を踏まえて除霊部による早朝警備を行う事になった。

学園上層部、主に教頭の難癖に応える形になってしまった除霊部顧問、藍苑は機嫌が悪くなっていたが自身が悪霊に襲われたこともあり、生徒の安全を第一に考え納得していた。彼女は元から除霊部の早朝警備を思案していたようだ。

現時点での除霊部のメンバーは神楽坂、天河、長緒、篠崎、上村の五名。この五名をクジ引きで二つに分けて一日交代のシフト制で警備を行う。

最後にクジを引いた（誰が天河と組むか主に上村だけが盛り上がっていた）神楽坂は天河と二人で組む事になり初日の今日、眠い中登校していたのである。

「えーと、集合は六時二十分だっけか？ ……ん？」

もう一度携帯を出して時刻を確認する。

「げっ！ 間に合わねえ……！？」

何時もの登校と寝ぼけていた神楽坂は家を出る時間を見誤っていた。

今から走っても間に合わない。

「仕方ねえ、余り気が乗らないが近道を通るか……」

神楽坂は何時もならこのまま直進するところを右に曲がって細い路地に入ってしまった。

民家に挟まれ薄暗い路地、この道を直進すれば通学路よりも早く学園に辿り着くことができるが普段からこの道を通る生徒は殆どい

ない。神楽坂も出来ればこの近道を通りたくはなかった。それは細道の途中で若干広くなっている場所があり、そこが不良の溜まり場になっているからだ。

「面倒な事にならなきゃいいんだがな……」

ここで不良に絡まられれば確実に遅刻してしまう。

神楽坂は遅刻を心配しながら路地へ入った。

だが、その心配は現実の物となってしまった。

路地を歩いていると数人の男の声が聞こえる。

その声は穏やかではない、この路地が何故、他の生徒達からも敬遠されているのかその理由を考えれば何が起きているのか予想は簡単だ。

「やれやれ、朝から元気だな」

神楽坂は遅刻を覚悟した。

予想通り目の前にある僅かに道が広くなった場所で制服をだらしなく着た（神楽坂もだが）数人の男子生徒が何やら揉めている。

着ている制服から全員六学の生徒であることが分かる。

男子生徒は四名、その中の三人が制服をきちんと着ている一人にっつかかっているようだ。

「近道をしようとしていたのは俺だけじゃなかったみたいだな……」

絡まれている坊主頭の男子生徒は『六愿学園野球部』と書かれたバッグを持っている。

恐らく部活の朝練に間に合わせるために止むを得ずこの道を通ったのだろう。

だが、このまま見過ごす訳にもいかない。

神楽坂は四人の前に出て言った。

「お前ら、今時ばかりか？　だせえな」

「んだとっ！？」

不良の三人が同時に睨み返してきた。

茶髪に金髪、耳には複数のピアス、改造した学ランに悪趣味な金属のアクセサリーをそれぞれ首から提げており、壁に穴をあけそうなりーゼントにしていなただけマシだが古典的な不良そのものだ。

「た、助けて下さい先輩！　俺、昨日この近道を友達から教えて貰って……知らなかったんです！」

野球バッグを持った男子生徒は神楽坂の背後に回ってきた。

彼の校章の色から今年入学した一年生であると分かる。どうやら教えた同級生もこの近道が不良の溜まり場になっている事は知らなかったようだ。

「んだ、てめえは！？」

早速、不良の一人が神楽坂にいちやもんを付けてくる。

此方を睨みつけてくる不良は校章を外しているため学年までは分からない。

神楽坂は動揺する事なく、目の前にいる不良を睨み返す。

その鋭い眼光は虚勢を張る不良の心を縮み上がらせた。

「き、聞いてんのかてめえ！」

「やめろ！」

リーダー格と思われる男が声を上げた。

「で、でも坂木さん……」

不良の言動から、この坂木という男がリーダーのようだ。

坂木は二人の手下を押し退けるように後ろに下がらせ、神楽坂の前に出た。

髪は金髪の逆毛、目は細く他の二人よりも派手な柄シャツを着ている。

「久しぶりだなあ神楽坂」

「誰だあんた」

「さ、坂木だ！ 四年の坂木幸平！ 忘れてんじゃねえ！」

「ああ、悪い完全に忘れてたぜ。二年振りか坂木先輩さんよ。まさかこの路地を溜まり場にしているグループがあんたとはな」

神楽坂と坂木は知り合いといった関係ではない。

初めて顔を会わせたのは神楽坂が入学して間もない頃、坂木は二年生だった。

中学時代、不良界でも有名だった神楽坂を倒して自分の名を上げようとしていた坂木は、一方的な決闘（しかも伏兵を数人忍ばせていた）を挑んだのだが逆に返り討ちにされた過去がある。

神楽坂は何とも思っていないが（今日顔を会わせるまで完全に忘れていた）坂木は因縁を持っているようだ。

「神楽坂、てめえもここを通りたけりや通行料を払って貰おうか？」

「通行料？ 一年、お前も払われたのか？」

「そんなに金持っていないって言ったんですけど、信じてもらえなくて……」

どうやら、金銭をたかられる前だったようだ。

「嘘付いてんじゃねえ！ お前ジャンプしてみろ！」
「先輩、あんた何時の時代の不良だよ」

流石に神楽坂も、手下の二人も苦笑った。

「う、うるせえ！ とにかくここを通りたかったら金を出せ！」
「嫌だと、言ったら？」
「その時は少々痛い目にあってもらうだけだ」
「闘るってのか？」

神楽坂の目が鋭くなる。

「てめえは気に入らなかつたんだ！ 二年前からなつ！！」

坂木と手下の二人が神楽坂に向かって走ってくる。

「サシの勝負じゃねえのか、二年前から変わってねえなあんだ。一年、離れてる！」
「は、はいっ！」

後ろにいる男子生徒を下がらせ、神楽坂は迫る三人に対して構える。

神楽坂は生身の状態、坂木たちと同じ条件で受けて立った。
霊能力を使えば勝負は一瞬で付いてしまいが、一般人に能力を使って危害を与えることは霊能者としての尊厳に反する。

一対三、明らかに神楽坂が不利だ。

しかし、神楽坂はその場から動こうとせず、手下の二人が先に此方の間合いに入っても動じない。

神楽坂が狙っているのはただ一つ、リーダー格の坂木、ただ一人

だ。

例え数で負けていても敵のリーダーさえ倒せば後は烏合の衆、坂木に人望があるとは思えないし手下も仇を討とう等とは思わないだろう。その事を考えれば効果的な作戦だといえる。

先に神楽坂の間合いに入ってきた二人の手下は、左右に分かれて同時に殴り掛かって来る。

正面には坂木の姿。

彼はまだこちらの間合いに入っていない。

（後少し……）

神楽坂は右足のつま先に力を入れる。

手下の拳を紙一重でかわし、今、正に地面を蹴って前に出ようとした時だった。

「な、なんだ!？」

その場にいる神楽坂を含めた五人は動きを止めて周囲を見回した。突然、強い風が発生したかと思うと、それは暴風となりまるで巨大な竜巻の中心に入り込んでしまったかのような凄まじい風が神楽坂たちを囲んだ。

日本でも竜巻（旋風）は発生するが神楽坂たちの住む地域では発生した例は一度もない。

初めて発生した自然現象かとも思われたが、風とは別の力を神楽坂は感じた。

（霊気……!?!）

この暴風は空気の流れによるものではない。
霊気が作用してこの風を創り出している。

その靈氣から感じられるものは、緩むことを知らず絶えまなく吹き荒れ全てを吹き飛ばす『烈風』、それ以外に表現のしようがない絶対的な力だ。

神楽坂たちを取り巻く風は塵や埃、民家に植えられた木々の葉を巻き上げるが人間の体を飛ばす程の力はないようだ。それに加え、こちらに危害を与えるような様子も見られない。更に坂木達よりも神楽坂の周囲の方が風が緩やかで、自分を助けてくれているようにすら感じた。反対に一般人である坂木達にとっては、天変地異に遭ったかのような相当の恐怖を感じているだろう。

「せ、先輩、なんなんですかこの風は!？」

「心配しなくても大丈夫だ。ジつとしてろ」

神楽坂は男子生徒を落ち着かせる。

吹き荒れていた風は暫く続いた後、巻き上がっていた物が地面に落ちる程度に緩やかになった。

「お、お前ら今のうちだ!」

「ま、待つてくださいいよ坂木さん!？」

坂木達はそのまま学園とは逆の方へ走って逃げていった。

「助けてくれたのか……?」

「え……?」

「いや、こつちの話だ。それよりお前も朝練があるんだろ? 急いだ方がいいぜ?」

「あ、ありがとうございます先輩っ!」

「おう、次は遅刻しそうになってもこの道は通るんじゃないぞ」

男子生徒は神楽坂に一礼した後、学園へ駆け足で走っていった。

その姿を見送り、不良の溜まり場には神楽坂だけが残される。

「靈氣は消えたか……」

嵐のような靈氣を持つ能力者を探そうとしたが、既に風と共に消え去っていた。

学園に続く道からは太陽が昇り始め、朝日が差し込んでくる。

「やべえ！ 時間！？」

思い出した神楽坂は慌てて携帯を見ると時刻は六時四十分。完全に遅刻だ。

今から走っても遅刻に変わりはないが、このままでは更に遅れてしまう。

神楽坂は携帯をポケットに直し走ろうとした。

その時、日の光が目差し込んでくる。

眩しさから目を細めると民家の塀の上に人が立っていることに気が付いた。

その人物は太陽の光を背にしているので、その後光で良く見えなかったが着ていた服装が紺色のセーラー服であったことから女性であることが分かった。

神楽坂は先程助けてくれたのかと声をかけようとしたが、その人物はすぐに姿を消し光に慣れた頃には誰もいなくなっていた。

結局、神楽坂が除霊部室に辿り着いたのは六時四十五分だった。

警備の初日早々から遅刻してしまった神楽坂は、部長の天河に怒られながらパイプ椅子に座らされ長テーブルに向かう。

「遅刻したのは悪かったけどさ、ちゃんとした理由が……」
「理由があっても遅刻した事実が変わりません！ はい、この時間を利用して書いてね」

対面に座る天河から、神楽坂の目の前に二枚の書類が置かれた。
その書類には『始末書』と書かれている。

「ち、遅刻しただけで始末書なのか……？」

苦笑う神楽坂。

「違うよ、壊したでしょ？」
「何を……？」

身に覚えのない神楽坂。

「お、覚えてないの？ …… 篤、しかも二本」

神楽坂に向かってピースサインをする天河

「マジかよ……」

「マジです」

「これ適当に書いてもいいのか？」

「…… 適当に書いて良いと思う？」

「そ、そうだよな……」

「私は前回の事件の報告書がまだ出来上がってないから、分からないことがあったら聞いてね」

「わ、分かった」

除霊の為とはいえ箒を二本も駄目にしてしまったのは失敗だったかもしれない、と今になって後悔する神楽坂だった。

暫くの間、除霊部室には備え付けられた時計の秒針音と、始末書を書くペンの音、そして外から部活動生たちの掛け声やボールを打った金属バットの甲高い音だけが聞こえてくる。

神楽坂は当然、始末書の書き方を知らないので取り敢えず自分の思った通りに直接ボールペンで書き込んでいた。その事に気付いたのか報告書を書いていた天河が声をかけてくる。

「神楽坂くん、下書きもせずいきなりボールペンで書いてるみたいだけど、本当に書き方分かってるの？」

「いや、全然」

「ちょ、やけに進んでると思ったら……」

苦笑う天河。

ここから三十分程の天河による説明が始まる。

始末書といっても書式は決まっている。

不始末の内容、原因（図を入れたり）。反省の弁。二度と繰り返さない為の弁（対策など）。寛大な処置を願う弁を盛り込まなければならぬ。

神楽坂はそれを全て悪霊のせいにしていた。しかも、擬音も多用したあげく死神の姿をした悪霊の絵まで描いて。

実際にはその通りなのだが、始末書という正式な書類では使えない。

「……と言う訳。図を入れるのはいいけど、絵を描くのは駄目。分かった？」

「た、多分……」

一通り説明は聞いたが、面倒くさい、が感想だった。

「まあ、生徒会への報告は今週までにすれば良いからいいんだけど」
「そ、それまでには書き上げるよ。ところで除霊部の活動の事なんだが」

「何か分からないこともあった？」

「警備の話は分かったよ。だが、もし授業中に霊障が発生したらどうなるんだ？」

霊は基本的に夜に現れるものだが、人体模型の例もある。

「その時は公欠扱いになるよ」

「サボりにならないのか……！」

「除霊に必要な時間だね。丸一日授業公欠にしようと思わないように」

「さ、流石にそこまでは」

「篠崎君と上村君は第一声がソレだったけど……」

「あいつ等と一緒にしないでくれ……」

苦笑う神楽坂だった。

朝のHRも終わり今日の授業が始まる。

一時限目の科目は新任教師である小笠原により国語だ。彼女は前回、切裂き魔の悪霊に襲われ軽い錯乱状態に陥り精神的ショックも大きく直ぐには復帰できないだろうと思われるがこの数日ですっかり元の調子に戻ったようだ。

神楽坂は黒板にチョークで内容を書いている小笠原を見た後、窓からの景色を眺める。

机の上には一応、筆記用具、教科書、そしてノートが広げられているが、シャーペンは持たず、開いている教科書も昨日やったページだったり、ノートにいたってはまっさらの状態だった。

「……………」

外を眺めていると机の上に小さく折り畳まれた紙が投げ込まれてきた。

神楽坂はそれを手にとって広げてみるとメッセージが書かれている。文面から前に座る吉原からのようだ。

書かれていた内容は、今日一杯で警察が引き上げるらしいのとことだった。

（そういえば、まだ警官がうろついてるな……………」

もう一度外を見ると学園の敷地内に私服警察官らしき人物が数人歩いている。

警察を含めた世間一般では、六学で発生した傷害事件は未だ解決していない。実際は悪霊が犯人だった訳だが、人間による模擬犯として捜査が続いていた。

今日で引き上げるとの事だが、恐らく犯人が移動したと判断したのだろう。どのみち二度と事件が起こることはないが。

続いてもう一枚、紙切れが投げ込まれてくる。

今度は吉原らしい女の子絡みの内容だった。

何でも、セーラー服姿の美しい女の子が朝、六学の敷地を歩いていたらしい。

（麗しいって何だよ……………。そういえば、朝チラッと見た女もセーラ

「服だったな」

朝日のせいもあって服装と性別しか分からなかったが。

それにしても吉原は何時もどこから情報を仕入れてくるのか、神楽坂はある意味感心しながら、転入生かもな、と紙に書いて折り畳み吉原の後頭部に向かって投げ返した。

その返事は直ぐに返ってくる。

何て書いてあるのか、手に取るように分かる。前に座る吉原の背中も心なしに嬉しそうだ。間違いなく顔はニヤけているな、と神楽坂は思いながら紙切れを開いた。

「……」

予想的中。

もはや予想するまでもない。紙には歡喜に満ちた文面でびっしりと埋め尽くされていた。

それもノートの一枠に二行は入るくらいの小さな文字で書かれている。内容を見てみると情報を仕入れた友人の話から、名前は分らないが髪型、雰囲気、スリーサイズを無駄に細かく想像して書いている。

吉原の想像によると大きさは天河に匹敵するらしい。なんの大きさかは分からないが。

（その仕入先つて上村じゃないだろうな……）

性格の似ている上村ならば十分にあり得る話だ。

付き合い切れない神楽坂は、紙キレを丸めて再び吉原の後頭部に投げつけてやった。

そして、早く授業が終わらないか、と思いながら外を眺める。

「……ん？」

神楽坂は下の階の窓から煙が上がっていることに気付いた。その煙は物が燃えて発生したものというより、大量の埃や塵が集まって煙となっている感じた。

「何だ？ 火事じゃなさそうだが……。そういや、あの階は篠崎達の教室だったな」

少し身を乗り出して下を覗く。
すると煙とは別に、騒がしい声と悲鳴のような声が聞こえてくる。

「今の気持ち悪い悲鳴は上村か……。何やってんだアイツら」

余り煙を吸いたくないので神楽坂は体を引っ込める。
何か起こったのかと考えていると、隣の席に座り真面目に授業を受けていた長緒が神楽坂に言った。

「……光志、靈気だ。それも真下から」
「何だつて？」

神楽坂は精神を集中させると確かに真下から強力な靈気を感じた。しかも、その靈気は朝、吹き荒れる風と共に感じたものと全く同じだった。

「あの女子は六学の生徒だったのか……？」

だが、セーラー服を着ていたという矛盾がある。
何が起こったのかは分からないが、靈気を感じた以上、靈能絡みであることは確かだ。

神楽坂は長緒と共に立ち上がる。

「ど、どうしたの？ 神楽坂君、長緒君」

「小笠原先生、ちよつと仕事が出来たみたいだ」

「仕事？ あ、ああ……。藍苑先生から話は聞いてますよ、なるべく早く戻ってきて下さいね」

除霊部のことは他の教師にもすっかりと伝わっているようだ。

「分かつてる」

クラス全員の視線を受けながら神楽坂と長緒は教室を出て、三階にある篠崎達のクラスへと向かった。

二人が二年七組に辿り着くと廊下は大勢の生徒で騒然となり、他のクラス生徒も何事かと窓を開けて覗いていた。

どうやら廊下に出ている生徒達は全員七組の生徒のようだ。

神楽坂はその人ごみの中から篠崎と上村を探す。

すると、此方を見つけたのか上村が涙目になりながら走ってきた。

「怖い！ 可愛いけど、凄く怖いっ！」

「何を訳の分からんことを……。気持ち悪い顔を近づけるんじゃないやねえ！ 篠崎はどうした？ この騒ぎは何だ！」

「俺も知らないよ！ 授業中にいきなり日本刀を持った凜々しくて、かつ可憐な、セーラー服の似合うポニーテールの女の子が乱入してきてさっ！」

「お前……随分余裕あるじゃねえか」

相変わらずの上村に苦笑う神楽坂。

上村が言うには、授業中に刀を持った女子が乱入してきて篠崎に襲い掛かったらしい。

「その女子は中にいるのか？」

「シノケと口喧嘩してるよ！」

「口喧嘩？　篠崎の知り合いか？」

篠崎も日本刀を所持していることを思い出した。

「……とにかく、中の様子を見た方がいいんじゃないか？」

「だな」

二人は教室の扉を開けて中の様子を伺う。

教室内は凄惨たるもので全ての机が倒れ、教科書やノート、生徒達の荷物がそこら中に散乱しまるで台風が通り過ぎた後のような状態になっていた。

「無茶苦茶だな……」

「……光志、見てみる」

「あの女子は……」

教室の中央には確かに上村が言う女子が背中を見せて立っていた。灰色の長髪を後ろで纏めたポニーテールに見た事がないデザインのスーラー服、身長は高く篠崎と同じかそれ以上、左手は腰に当て、鞘に納めたままの刀を右手に持って面前にいる篠崎にその先を向けている。

見た感じから殴り込みかと思われても仕方がないが、彼女が着ているスーラー服。それは神楽坂が朝、見たものと同じ制服だった。

015：果たし状

「どうしたの？ 凄い靈氣を感じただけだ」

神楽坂の後ろから天河が駆けつける。

彼女も日本刀を持つ女子の強力な靈氣を感じ取ったようだ。
神楽坂はその靈氣の発生源を教える。

「あの女子だ」

「教室の中、滅茶苦茶じゃない……！ あのセーラー服を着てる人？
ウチの生徒じゃなかったんだ」

「授業中に乱入してきたそうだぜ？」

「ら、乱入って……」

苦笑う天河。

「……これ以上、暴れられる前に何とかした方がいいな」

「長緒先輩の言う通りだよっ！」

「そうだな」

神楽坂を先頭に、天河、長緒、上村の順に教室へ入る。

室内は倒れた机や椅子、教科書などで足の踏み場が殆どない。

日本刀を持つ彼女は此方に気付いていないのか、背中を見せたまま篠崎と言い争っているようだ。

神楽坂は後ろから声をかけようとした。

「その『神楽坂』という者を倒せば戻ってくるのだな！」

「……！？」

神楽坂は声をかけるのを止めた。
その言葉は後ろに続く三人の耳にも届いていた。

「え？ 神楽……」
「しっ！」

神楽坂は思わず天河の口を振り向きざまに塞いだ。

「ん——っ！？」
「あ、わ、悪い……」

すぐに謝って手を離す。

「ぷはっ！？ な、なにっ！？」
「あの女子、かなり殺気立ってる。今、俺がそうだと知ったら絶対
暴れ出すぞ」

「うんうん！ 可愛いけど間違いなく暴れるよ、今度は本当に怪我
人が出るかも！」
「……可愛いかどうかは別として、俺の事は伏せて置いてくれ」

天河たち三人は頷く。

そして、改めて神楽坂が声を掛けようとすると、セーラー服の彼女
は篠崎に何か言い放った後、そのまま教室の奥の扉から出て行っ
てしまった。

「何だっただ……？」

神楽坂は呆然と走り去って行った彼女の背中を見送った。
変わり果てた二年七組には神楽坂と篠崎を含む五人が残された。

昼休み。

神楽坂を始めとする除霊部のメンバーは部室に集まって昼食を取る。

五人は各々パイプ椅子に座り、長テーブルに昼食を広げる。神楽坂と長緒は学食で購入した調理パン、天河は手作りの弁当、そして篠崎と上村は近くのコンビニで買って来たカップラーメンとおにぎりだ。（六学は昼休み、決められた範囲のみ校外外出可）

何時もなら食べながら楽しく談笑するところだが、今日の昼食の話題は二年七組に乱入してきた彼女についてだ。

神楽坂はパンを食べながら篠崎に言った。

「篠崎、あの刀を持ってた女子はお前の知り合いか？」

「まあ……そんなところだぜ」

「やっぱりか……。で、何で俺が出てくるんだ？」

それが一番篠崎に聞きたい事だ。

篠崎は言い辛そうな表情を見せた後、頭を数回掻きながら話し出した。

「あいつの名は、蒼芭佐由理。あおばさゆり俺の幼馴染なんだよ」

「お、幼馴染だって!？」

神楽坂ではなく、何故か上村が変な反応を見せた。

「上村、少し黙ってろ」

神楽坂は上村を戒め、篠崎は話しを続ける。

「俺の実家は京都なんだけど……、家からは中学卒業と同時に戻ってこいと言われてたんだよ。で、佐由理の奴もそう思ってたらしいんだが……」

言葉が詰まる篠崎。

篠崎と蒼芭の家は悪霊や魑魅魍魎退治を生業にしている一族で、二人はその末裔だ。その歴史は古く平安時代から約千二百年間続いており、広大な敷地に篠崎家、蒼芭家、両家が構え、心霊現象が激減した現代でも京都を拠点として西日本全域（東日本は別の一族）で活動している。一般的に両家の存在は知られてはいないが、一部の法律が適用できないなど、かなりの権力と影響力を持つ。（帯刀、除霊行為に如何なる場所にも進入出来る、など）

「何だ？　少なくともお前が家の意向を無視して六学に進学した。つてのは分かったぜ？」

「アイツは俺が京に戻らない理由が神楽坂先輩だと思い込んでんだよ」

「は？」

何故、自分と結び付くのか検討も付かない。

神楽坂だけでなく、話を聞いていた全員がそう思った。

「篠崎君、何でそこで神楽坂くんが出てくるの？」

「先輩よお、中学ん時、俺と喧嘩したの覚えてるか？　しかも霊能有りで」

「ああ、一応はな」

「中学で停学なった事は当然、家にも連絡がいつててよ。佐由理は、俺が先輩に拘ってるから戻らない、と勝手に解釈して思ってたんだよ。まあ、喧嘩というより『霊能者』として、だと思っけどな」

「つまりだ。その蒼芭は、お前が俺を倒すまで家に戻らないと思ってる訳か」

「あながち間違ってはねーけど、まさか六学に殴り込んでくるとは思ってもなかったぜ」

「お前が何時までも戻る気配を見せないからな」

突然の声と共に部室の扉が開き、ある人物が姿を現した。

「何時の間に……」

神楽坂も全く気配を感じなかった。

全員の視線がその人物に向けられる。

濃い灰色の髪と額には『虎』と書かれた額当て。薄灰色の目に少し垂れた目尻と力強さを感じさせる一文字に結んだ口。モデルを思わせる長身にスレンダーな体つき、その人物は気品と凛々しき、その両方を兼ね備えていた。

「大きい……やはり天河先輩に匹敵する」

何かを天河と見比べる上村。

「何処見てんだ！」

「ぶへらっ!？」

神楽坂の鉄拳が炸裂。

その様子を見ながら苦笑う篠崎がその人物に言う。

「佐由理、良くここが分かったな」

「なに、校内にいた生徒に慶（篠崎）の居場所を教えて貰っただけ

だ」

蒼芭は刺繍が入った黒い竹刀袋を左肩にからって室内に入ってきた。

「しかし、この学校は広い。私の学校の三倍はあるな、探し回るだけでも一苦労だ」

「どうしても神楽坂先輩と闘い合うつもりか？」

「当然だ。その男を倒し慶を京へ連れ戻す！」

二人の会話から蒼芭が一方的に突っ走っているように感じられる。神楽坂は自分を伏せたまま、何故『神楽坂』を執拗に追うのか彼女に問いかけた。

「蒼芭と言ったな。そこまでの理由は何なんだ？」

「お前は朝の……。お前には関係ない事だ黙っていてもらおう」

「佐由理、その眼鏡を掛けた人（神楽坂）は一応俺達の先輩だぜ？」

篠崎も何も言わずに神楽坂の名前を伏せてくれている。

彼の言葉を聞いた蒼芭は、神楽坂に向かって一礼してきた。

「失礼しました先輩」

「あ、ああ……。別に気にしてねえよ」

行動は荒いのに礼儀は弁えている。

何とも相手にし辛い。

「それよりも佐由理、学校はいいのかよ。今日は平日だぜ？ 休みじゃねーだろ？」

「今日は建立記念日で休みだ。どの道、慶を京へ連れ戻すまで帰る

気は毛頭無いがな」

蒼芭の目は真剣そのもの、例え何日かかるうとも神楽坂を倒すまで福岡にいる覚悟だ。

彼女はそう言い放った後、竹刀袋をからい直し除霊部室を後にして行った。

「な、何だか凄い人だったね……」

天河の素直な感想。

「……校内に他校の生徒が入り込んでいるとなると、風紀や先生達も黙ってはいないだろうな」

「やれやれ、面倒は勘弁だぜ篠崎？」

「俺だって勘弁してほしーぜ」

「……光志、ここにいるのは危ないんじゃないか？」

「神楽坂くんが除霊部員だって知ったら、彼女飛んで戻ってくるよ。それに、風紀委員や先生達から逃げ回りながら何時までも学園内を動けるとは思えないし、長緒君が言う通りそれまで姿を隠してた方がいいかも」

風紀委員会は学園の治安維持も担当している。

「その方が良さそうだが……少し遅かったみてえだな」

「ほう、この短時間で私の気配を気取るとは。やりますね『神楽坂』先輩」

除霊部の扉には、再び蒼芭が佇んでいた。

「よく俺が神楽坂だと分かったな」

「偶然です。この棟を出て直ぐにニヤけた顔をした男子が言い寄ってきて、制裁のついでに聞いてみたら洗い浚い喋ってくれましたよ」

ニヤけた顔の上村はここにいる。

それ以外に考えられる人物は吉原しかない。

「直明のやつ……」

神楽坂は思わず苦笑った。

「私を騙しましたね？」

蒼芭は鋭い目つきで神楽坂を睨み付ける。

同時に、彼女から靈気が発生。外は殆ど風がないのに室内の空気が渦を巻くように流れ始めた。

「ま、まずいよ！ この風がウチのクラスを吹き飛ばしたんだよっ！」

顔面蒼白になる上村。

「そうだな。巻き込まれないうちに部屋から出ることを進めるぞ」

蒼芭は神楽坂を威圧するかのように自身の靈力を高めていく。

それに比例して室内に吹く風も強くなる。

微風程度だった風は、今ではカーテンを激しく靡かせ、テーブルに置かれていた袋や書類が宙を舞う程になっていた。

室内が騒然となるこの状況下のなか、神楽坂はパイプ椅子に座ったまま靈力を高めて蒼芭に自分の力を示し拮抗状態を作る。しかし、ここで戦うつもりはない。

「神楽坂先輩も『霊質』持ちですか、面白い」

「ここで鬨り合うつもりはねえ」

「ならば、嫌でも戦ってもらうまで!」

蒼芭は竹刀袋から木刀を取り出して神楽坂に切先を向ける。

神楽坂の眉がピクリと動く。

お互いの霊気が拮抗した一触即発の中、ここで都合よく昼休み終了のチャイムが鳴った。

部室内で暴れさせる訳にはいかない天河は、それも理由の一つに竹刀を納めるよう蒼芭に言う。

「はい、そこまで! 蒼芭さんって言ったよね? どういうつもりかは知らないけど霊能者同士の私闘は私が許さな——」

「問答無用!」

蒼芭は天河の言葉に耳を貸さない。

あくまで今、ここで神楽坂と決着をつけるつもりだ。

「お前にどんな理由があるのか、俺には分からねえ。だが、お前は他人に自分の都合を押し付けて迷惑を掛けるのか?」

「ぐっ……。し、しかし私は——」

蒼芭も自分の行動が常軌を逸していると分かつてはいるようだ。一体何が彼女をそうさせるのか、それは未だに謎だが神楽坂は続ける。

「俺にはそこまで常識がない奴には見えないが」

「か、神楽坂先輩が常識……だと?」

「また殴りたいのか上村?」

「い、いえ……」

「どうしても闘るってんなら放課後、グラウンドに來い。そこで相手になってやるよ」

「……放課後、グラウンドですね。了解しました」

その言葉と同時に、室内に吹いていた風が緩やかになって収まる。蒼芭は木刀を竹刀袋に直すと踵を返して再び除霊部室から出て行った。

「か、神樂坂くん！ 相手をするだなんて何を考えてるの!？」

「天河の言いたい事は分かるよ。けど、言って引き下がるような目をしてたか？」

「そ、それはそうだけど……」

「すまねーな先輩。面倒事に巻き込みまっつて」

「全くだな。後で何か奢れよ？」

神樂坂は苦笑いを浮かべるのだった。

他校の生徒が校内に入り込んでいるという話は、瞬く間に学園中に広がった。

放課後になるまでの間、蒼芭を目撃したという情報は十数件に上ったが、彼女が風紀委員や教師達に捕まる事はなかった。どうやら上手く逃れているようだ。

彼女と決闘することになった神樂坂は、何時もの掃除用具入れから長箒を拝借してグラウンドへ続く赤レンガで造られた大通りを天河と共に歩く。

六学は中央広場から緩やかな斜面になり、コンクリートの階段がある土手の先がグラウンドになっている。このグラウンドも通常の

数倍の広さを誇っている。

「神楽坂くん、本当に闘うの?」

後ろを歩く天河が心配そうな表情を見せた。

「まあな。止めたって無駄だぜ? 俺はともかく、蒼芭は絶対応じないだろ」

「それはもう諦めてるけど……。無茶はしないでね」
「相手次第だな」

間違いなく蒼芭は全力でくるだろう。

彼女の靈氣から、強力な力を持つ靈能力者、そして篠崎の知合いであるなら相当な剣の使い手であると考えられる。

レンガの通路が途切れ、土手の手前に来たところで篠崎、長緒、上村の三人と合流する。

「篠崎、蒼芭は?」

「ずっと待ってたみてーだぜ」

篠崎は親指でグラウンドの中央を指差した。

「……」

神楽坂は無言でグラウンド中央を見据える。

中央部だけが直径二十メートル程の風に覆われ、大量の土煙を巻き上げ局地的な砂嵐が発生していた。ここからでも強い風を感じる。既に蒼芭は神楽坂の到着を待っているらしいが、彼女の姿は土煙で確認することができない。

「凄い靈気……。まるで靈気そのものが風になったみたい……」

天河も驚きを隠せない。

長緒は両腕を組んでグラウンドを見る。

「……あの砂嵐は此方にとっても都合が良かった」

「どういうことだ？ 健ちゃん？」

「……『靈障』が発生したという事によってグラウンド全体を封鎖できたからな」

「そっぴゃ……」

神楽坂は周囲を見渡した。

放課後になり、何時もなら部活が始まる時間にも関わらず誰一人としてグラウンドに出ていない。

続いて上村、篠崎が言った。

「グラウンドを使う部活の人達は、各部室で待機してもらってるよ」
「俺も無関係じゃねーし、これくらいのお膳立てはしてやらねーとな」

ポリポリと頭を掻く篠崎。

「ま、帰りにラーメンでもおごってもらおうか」

神楽坂たちは階段を下り、グラウンドに入って中央部へ向かう。
グラウンドの中央へ近づくにつれて蒼芭の靈気は強くなっていく。
吹き荒れる砂嵐の中に彼女がいる証拠だ。

土煙から目を守りながら一歩、また一歩と足を進め十メートル付近まで近づいた神楽坂は目の前の砂嵐に向かって言った。

「待たせたな」

すると、吹き荒れていた風が一瞬にして消え去り、グラウンドの中央に蒼芭が現れた。

彼女は竹刀袋を地面に付け、両手で押さえるようにして立っている。日本刀はその中に納めているようだ。

「約束通り、手合わせを願います」

「ああ、いいぜ？ そのつもりできてるからな」

蒼芭は神楽坂に軽く会釈した後、篠崎を見る。

「私が勝ったら、慶、お前は私と一緒に京に帰ってもらおう」

「だから何でそうなるんだよ」

複雑な表情を見せる篠崎。

「本人は納得してねえようだが、俺が勝ったら？」

「その時は——」

「私を好きにして良い、んだよね！」

相変わらず空気の読めない上村。

蒼芭の目に殺気がこもる。

「先にあのアホの息の根を止めてからでいいですか？」

「そうだな、俺達もアレには苦労してんだ。頼めるか？」

「え、えええ！？」

「……死にたくなかったら黙っている、上村」

長緒が上村を戒め、改めて神楽坂が言う。

「今のは発作みたいなもんだから気にするな。俺が勝ったらこのまま一人で帰ってもらう、それでいいか？」

「望むところです」

蒼芭は竹刀袋を地面に置くと、中から一本の木刀を取り出した。

その木刀は見た目こそ何処にでもある一般的な木剣だが、神楽坂はそれが赤檜あかがしで作られたものではないことに気付いた。

（ただの木刀じゃなさそうだな……）

蒼芭が握る木刀は、ほのかな光が発せられている。

「気付きましたか。察しの通り、この木刀は自然倒木した神木から作られたもの。強度、霊的伝導率、耐久ともに一般のものを遥かに凌駕しています。生半かなものではヘシ折れますよ」

蒼芭は神木刀の切先を神楽坂に向ける。

対する神楽坂は持っていた長箒を構えた。

016：神楽坂vs蒼芭

神楽坂と蒼芭。二人が構えてからどのくらいの時間が流れただろうか。

三十分、一時間にも思える。

だが、実際は一分も経過してはいなかった。

神楽坂は右手に長箒を持って、右半身の体勢で構える。

一方の蒼芭は両手で神木刀を握り、切先を神楽坂に向けた正眼（中段）の構えで迎え撃つ。

神楽坂は彼女の構えに見覚えがあった。

（篠崎と同じ構え……。油断は禁物だな）

蒼芭の目は神楽坂を真つ直ぐに捉えている。

その表情には、焦りや迷い等といった戦いに不要なものはなく、冷静かつ平静。覚悟という二文字のみが感じ取れる。それに加えて付入る隙の無い構え。神木刀の切先を向ける彼女からは威圧感すら感じられた。

「朝のこと、先に礼を言っておくぜ」

「その事ならば気にすることはない。少々目障りな連中でしたから」

お互い軽く笑い合った後、再び静まり返る。

二人はまだ動こうとしない。

お互いの位置は間合ギリギリ、一步踏み出せば相手に刃が届く距離だ。だが、その初太刀で相手に効果的な一撃を与える事ができれば、攻撃後の体勢が整う前を狙われる危険がある為、迂闊に動

く事ができない。

相手の隙を見つけ、反応しきれない攻撃を繰り出して確実な一撃を与える『先の先』。

相手の攻撃してくるタイミングを見極め、受けるまたは回避して反撃に転じる『後の先』。

戦いを有利にするか、しないか、は最初が肝心なのだ。

少し離れた場所で見守る天河達が固唾を飲むなか、動きがあった。先に動いたのは蒼芭だった。彼女は突然、神木刀をおろして構えを解いた。

「どうした？ 気が変わったのか？」

「い、いえ。あの……それでやるつもりですか？」

「それ？」

「そうです」

蒼芭が神楽坂の長箒を指差してきた。

「生憎これしかなくてな」

「もう少しマシなもの wasn't かったですか、せめて剣道部から木刀を借りてくるとか……」

「私闘で使えるわけないだろ」

「箒もそうだと思うけど……」

天河のさり気ない突っ込み。

木刀と打ち合って細身の箒が無事に済む訳が無い。

天河は始末書追加を覚悟していた。

「俺はこのままでも構わねえぜ？」

「い、いえ、私が良くないので……」

箒を構える神楽坂の姿が滑稽に見えたのか、蒼芭は苦笑いを浮かべながら地面に置いた竹刀袋から一本の木刀を取り出した。

「予備の木刀です。これも私が使っているものと同じですので、獲物に関しては対等です。どうぞ」

「律儀というか何というか……」

神楽坂は受け取った神木刀を握る。

両手でしっかりと余す事無く握れる木刀には、掃除道具に過ぎない柄の細い箒よりも頼もしさがある。外観は蒼芭が持っている物と同じく、何処にでもある一般的な木刀だが彫りや装飾などは一切ない。木から丸々削り出したばかりのような素朴さを持つ白樫の神木刀からは薄っすらと光が発せられていた。

二人は再び距離を取って先程と同じ構えを取る。

最初に仕掛けたのは蒼芭だった。

「はあああつ！！」

「な——！？」

瞬く間に間合に入られた神楽坂は、蒼芭の動きに僅かながら反応することが出来ず不安定な体勢を取らざるを得なかった。彼女の初太刀は何とか防ぐことができたが、その一撃で終わる訳はなく上段、中段、下段、と攻撃後の体勢を活かした鋭い連撃を次々に放ってくる。

一気に畳み込むつもりだ。

神楽坂は蒼芭の連撃を受けながら反撃のチャンスを伺っていたが、このままでは何れ防御を崩されてしまうと判断。多少強引でも彼女

の攻撃の間に割り込む。

怒涛の如く襲い掛かる攻撃の一つを紙一重でかわし、一瞬、蒼芭の顔を捉えた後、右上腕を狙って突きを繰り出した。

「くっ……！」

その突きはセーラー服を掠った程度だったが、蒼芭に傾きかけていた流れを断ち切ることができた。

二人は構えを崩さぬまま後退し間合を取る。

「……優しいんですね」

「何の話だ？」

「私の顔を狙おうと思えば狙えたはず、あの瞬間わざと先輩は攻撃をずらしたのは分かっています。ですが、その優しさが命取りになるかもしれませんよ？」

「そりゃ、どうも。俺も一つ聞きたいことがある。何故、そこまでしてこの戦いに拘る？」

「……またその話か。言ったはずですが、先輩を倒せば慶の拘りが無くなる！　そうなれば此処に残る理由も消える。それだけです！」

再び蒼芭が攻撃を仕掛けてくる。

しかし、先程の鋭さは無く、僅かに動きに無駄が出ている。

そのお陰で彼女の攻撃に備えることができた。

神楽坂は蒼芭の上段からの攻撃をそのまま受け流し、切り返して左斜めから神木刀を振り下ろす。だが、彼女もそう簡単に一本を取らせてはくれない。その場にしゃがみ、神楽坂の返しを空振りさせ、そこから右脇腹を狙って振り上げる。

「ちっ！」

神楽坂はその攻撃を、空振りに終わった神木刀を使って防ぎ、体勢を立て直すために後ろに下がる。

「中々やりますね。……慶が拘る理由も分かる気がします」

「そうでもないぜ、お前に『迷い』があつたからな」

今の打ち合いで蒼芭の実力は把握できた。

彼女の實力は自分と互角かそれ以上、剣の技術だけなら篠崎よりも上だ。

受け流しからの返しが出来たのも彼女に迷いが生じた為、それが無ければ簡単に読まれていただろう。

「私に迷い？」

「ああ、自分でも薄々気付いてるんじゃないのか？」

「馬鹿な。私の目的はただ一つ、迷いなど生じようもない！」

蒼芭の体から靈氣が発生する。

彼女は無理やり自分を納得させているようにも見えた。

発生した靈氣は、ある値にまで高まると風に変化し彼女の周囲を取り囲む。

「風の靈質、か」

靈質とは、靈能力者の靈力の性質が具現化したもので、靈力をある一定の値にまで高めると発生する能力だ。『靈質変化』と呼ばれる。

この能力は靈能者全てが使える訳ではなく、修行など後天的に会得できるものではない。先天的才能を持つ者だけが使える特殊能力だ。

「小手調べは十分でしょう。次からが本番です！」

風が一気に吹き荒れ土煙を巻き上げる。

蒼芭は足を肩幅に開いて軽く腰を落とし、両手で握った神木刀を後ろに向けて刃先を地面に付ける構えを取った。

（構えが変わった？ …… 何がとんでもない攻撃を仕掛けてくるつもりだな）

神楽坂は手で目を覆いながら風に耐える。

高まり続ける蒼芭の霊気から、大技を繰り出す準備をしていると予感させる。

それを警戒して更に後ろに下がり間合を広げた。
その行動に篠崎が叫ぶ。

「ば、馬鹿！ 先輩！ あの技は相手との距離があるほど強力になるんだよ！！」

「何！？」

「もう遅い！」

蒼芭は気合を入れ、神木刀の刃先で地面を切裂きながら神楽坂に向かって突進する。

更に、彼女の体と神木刀には風に変化した霊気を纏わせていた。

神楽坂も精神を集中、霊気を発生させ体の隅々に行き渡らせる。

そして、その一部を神木刀へ流し、蒼芭の攻撃を迎え撃つ。

（受けるのは難しいな……。反撃は蒼芭の体を覆ってる霊気が邪魔だ。何とか避けるしかねえ！）

蒼芭の神木刀に込められた霊気が、地面を割りながら迫る度に増

幅され二倍近くまで高まっている。

神楽坂の頬を一筋の汗が流れた。

初めて見る彼女の技が強力な力を持っているのは分かるが、どういった攻撃なのか、その瞬間まで分からない。

蒼芭との距離は三メートル。

神楽坂の間合一步手前だが、彼女の体を覆った靈氣が此方の攻撃を弾く恐れがあった為、カウンターは狙わない。

神木刀を握る手に力が入る。

互いの距離が二メートルを切った。

技の間合に入った蒼芭は気合と共に、地面に向けていた神木刀を神楽坂に向かって下段から上段へ振り上げた。

「龍虎双神流・奥義！
地烈虎砲斬じれつこうげん！！」

振り上げた神木刀と共に、増幅された靈氣が地面から一気に噴出し神楽坂を襲う。

それは、まるで火山の噴火を思わせ、地から空へ向かって獲物に跳びかかる巨大な虎を想像させた技だった。

「ぐううう！？」

神楽坂の表情が歪む。

靈氣を込めた神木刀で受けて咄嗟に後ろへ跳んだまでは良かったが、余りの力に天河達がいる十メートル後方まで吹き飛ばされてしまった。

神楽坂は空中で体勢を整え、正面を向いたまま足から着地し、左手でブレーキを掛けながら慣性を打ち消す。

「か、神楽坂くん！？」

「だ、大丈夫だ……」

神楽坂は心配そうに駆け寄ろうとした天河を左手で静止させる。

「この木刀じゃなかったら今の一撃でやられてたぜ……」

制服に付いた汚れを叩き落とし、右手に持った神木刀の状態を確認する。

今の凄まじい攻撃にも関わらず神木刀には傷一つ付いていない。十分な靈気を込めることが出来る耐久力のお陰だ。細身の長箒では簡単にヘシ折れていただろう。

蒼芭の力は脅威だ。だが、これで此方も武器の状態を気にせず全力を出すことができる。

「双神流の奥義を防ぐとは……なんて人だ」

風を纏いながら歩いてくる蒼芭も驚きを隠せない。

「コイツ（神木刀）のお陰だな」

「ご謙遜を。今の一撃、神木刀と言えども防ぐ事はできなかったはず、先輩の技量（靈能）が如何に高いか分かりますよ。ですが、私も負けるわけにはいかない」

目付きが変わったかと思うと蒼芭は再び構えた。

しかし、その構えは正眼でも、先程の構えでもない。

右足を一步前に出して腰を落とし、右肩を引いて半身になる。

そして、右手に持った神木刀を地面と水平にし切先を神楽坂に向けた構え。

（また構えが変わった……？）

神楽坂は神木刀を構えて警戒する。

「次は私の本気でいきますっ！」

蒼芭は気合を入れながら霊力を高めていく。

同時に周囲を吹き荒れていた風は、目を開ける事が困難になる程に激しさを増す。

そして、彼女の体を覆っていた霊気が増大する力により地面を大きく抉りだした。まるでクレーターのように円形に抉れた地面は、一段、また一段、と霊力の段階が上がる度に地響きを立てて大きくなっていく。

（なんて霊力だ……）

感じられる蒼芭の霊力からも、先程の技とは明らかにレベルが違う。

「先輩も手加減をしようなどとは思わぬことです」

「そんなつもりは無かったんだが……。お前の言う通りだな」

神楽坂は不敵に笑うと精神を集中させて霊力を高める。

すると、体の至る所から無数の火花が現れ、稲妻状のスパークが発生した。

これが神楽坂の霊質『雷』だ。

「それが先輩の霊質ですか。最初に感じたイメージ通りですね」

「これはただの副産物だ、こいつを使う為のな！」

神楽坂は更に霊力を高めて霊気を神木刀へ注ぎ込む。

神木刀から眩い光が放たれ、周囲にいる全員が目細めながら注

目した。

光の中で神木刀はその姿を変えていく。

靈氣が刀身を包み込み、新たな刀身を形成する。

それは元となった木刀ではない。

光が治まったあと神楽坂が握るものは、靈気で構成された巨大な両刃の剣だった。

「なるほど、無刃剣の応用ですか」

無刃剣は靈具の一つで、使用者の靈気で刃を形成する靈剣。

「技の名前はまだ決めてないんだが、そうだな『れいそうじんらいけん靈装迅雷剣』とでもしとくか」

その大剣は長さ十メートル、幅六十センチ。剣身の色は雷を想像させる薄っすらと光を放つ黄色、剣全体からは体と同じスパークを纏っている。

神楽坂は重そうな迅雷剣を片手で軽々と肩に担ぎ天河達に言った。

「天河、危ないから皆と一緒に下がっててくれ」

「う、うん……」

「あの電撃は洒落にならないからねえ、電圧計壊すくらいだし」

「……黒こげになりたくないなら下がれ。篠崎、お前もだ」

長緒が篠崎の肩を掴む。

「わあーってるよ、長緒先輩」

神楽坂は、長緒に肩を引かれて後ろに下がる篠崎に言う。

「篠崎」

「んだよ」

「俺がしてやれるのは此処までだ。後はお前が收拾をつける」

「言われるまでもねーよ。それより、あの技は佐由理の十八番だ。おはこ気を付けねーと死ぬぜ？」

「え？ ちよつと篠崎君！ 死ぬってどうゆう――」

「健ちゃん、頼む」

「……分かった。人目にも付き始めている。早めに終わらせろよ？」
「そのつもりさ」

グラウンドの土手には何時の間にか大勢のギャラリーが集まっていた。

下校する生徒や、部室で待機しきれなかった運動部員、柔道着や空手着、そして和弓を持ち弓道衣を着た武道系部員たちもが、神楽坂と蒼芭の戦いに足を止め注目していた。

017：勝負の行方とその後

グラウンドは再び静寂に包まれた。

迅雷剣を肩に担ぐ神楽坂は、激しい風を纏う蒼芭を正視する。

彼女も真っ直ぐな目で神楽坂を睨み返す。

現時点での二人の距離は十メートル程。神楽坂の迅雷剣一振りですぐに届く、一足一刀の間合いだ。

流石に不利だと感じたのか、蒼芭は無言のまま摺り足で後ろへ下がって間合を広げる。

神楽坂は彼女の行動を黙って見ている。自分の間合の内側にいるうちに攻撃しようと思えば出来たが、これは互いの全力をぶつける勝負だ。神楽坂はあえて見逃した。

ギリギリと後ろに下がっていた蒼芭の足が止まる。

彼女との距離は三十メートルにまで開いていた。

（この一撃で決まるな。……望み通り受けてやってやるぜ！）

神楽坂は迅雷剣を蒼芭と同じように地面と水平に寝かせ、切先を相手に向ける構えを取った。

二人は睨み合ったまま動かない。

これは最初の打ち合いの時のような相手の隙を探しているのではなく、呼吸を整え、必殺の一撃を放つタイミングを計っているのだ。それは蒼芭も同じだった。

お互いバラバラだった呼吸が、この距離では計りようのない相手に合わせるように次第に揃っていく。

今では彼女の息遣いが聞こえてくるようだ。

そして、初めて二人の呼吸が同調した。

一回、互いの利き足に力が入る。

二回、互いの汗ばんだ手に力が入る。

三回目の呼吸をゆつくりと終えた時だった。

言葉を交わした訳でもなく、神楽坂と蒼芭は同時に地面を蹴って跳び出した。

先に攻撃動作に入っただのはリーチのある神楽坂ではなく、圧倒的に不利なはずの蒼芭だった。

彼女は数メートル走った後、まだ二十メートル以上も離れた地点から右足に力を入れて前へ跳ぶ。

「龍虎双神流・奥義！ 猛虎襲突破！！」

構えていた神木刀を神楽坂に向かって突き出す。

体に纏っていた靈氣の風が、蒼芭を地面から数センチほど宙に浮かせ、地面を削りながら凄まじい速度で押し出した。

まるで鋭い牙と爪を剥き出しにして獲物に飛び掛る虎。彼女の姿は、その技名の通り体全体を使った突撃だった。

先程の虎砲斬とは桁違いの力を秘めた大技に対し、神楽坂は特に対策などは考えてはいなかった。どの道、小細工をしたところで靈氣の塊となって突進してくる彼女には通用しないだろう。

相手が全力で向かってくるなら、こちらも全力で応えるのみ。

神楽坂は無言のまま自分の間合になるまで構えを崩さず走る。

その顔には汗一つ掻いてはいない。

鼓動も穏やかだ。

それは自分の力を信頼している現れだった。

神楽坂は両手で握った迅雷剣を、蒼芭に向けて気合を込めながら突き出した。

「おおっ!!」

二人の距離が縮まるにつれ、互いの霊気が干渉し合い、激しい音と共に火花を散らす。

そして……。

二つの強大な霊気が激突した。

力と力。それが真正面からぶつかり、衝撃波と金属同士の衝突音に似た高音がグラウンドに響き渡る。同時に、直径十メートル、深さ数センチのクレーターを作り出した。

神楽坂と蒼芭の霊気と技量は互角。

拮抗する力が逃げ場を無くし、左右に分かれて地面を切裂いていく。

一方はギャラリー達がいる土手、もう一方はグラウンドの奥にある朝礼台にまで達した。

「俺の剣を捉えるとはな……!!」

神楽坂は剣先から両腕に伝わってくる感覚に驚いた。

蒼芭はただ突進してきた訳ではなかった。

彼女は迅雷剣の針先程の細さしかない剣先を正確に捉え合わせていたのだ。

激突からの膠着状態が続く中、神楽坂は右足に力を入れて押し切るうとするが、蒼芭もこのまま捻じ伏せようと押し返してくる。

「くっ……!!」

幾ら頑張ってもその地点から前に進む事はできず、地面との摩擦

に負けて右足が僅かにずり下がる。まるで自分自身を相手にしているかのような錯覚を覚える程だ。

前に押し出すことは出来ないが、力負けしている訳でもない。蒼芭もまた、神楽坂という壁を押し切れない状態なのだ。

勝敗は靈気でも技量でもない、靈力（精神）で決まると思われたが、神楽坂は蒼芭の力が不安定に揺らいでいることに気が付いた。そして、力の釣り合いがジワジワと崩れて行く。

「どうした！　靈力が弱まってるぞ！」

神楽坂は、そのままの体勢で蒼芭に向かって叫んだ。

この距離と靈気が衝突し渦巻く状況では、大きな声を出さないと相手に聞こえないが彼女からの返事は無く、僅かながらに持ち直した靈力が返事として返ってくるのみだった。

だが、その靈力に初め時のような力強さや勢いは無い。

「な、何故、力が出ない……！？」

蒼芭は戸惑いを隠せない。

勝利の二文字を渴望する自分の心とは裏腹に、靈力は衰え、力は弱まって行く。

力の均衡が崩れ始めてからジリジリと後ろへ押し返され、ついには技の体勢を維持することすら困難になってしまっていた。それでも最後の力を振り絞り、耐え忍ぶがそれも時間の問題だった。

「わ、私は絶対に慶を連れ戻すと決めたんだ……！　ここで負ける訳には——」

起死回生の叫びも虚しく競り負けた蒼芭は大きく体勢を崩した。何とか立て直し攻撃に備えるべく構えようとしたが勝負は既に付

いていた。

蒼芭の喉元には神楽坂の剣が突き付けられている。

「勝負あり、だな」

「そ、そんな……」

蒼芭は持っていた神木刀を地面に落として俯いた。

足元はふらつき、彼女の体を被っていた靈気は消え、周囲に吹き荒れていた風も止んだ。

神楽坂は迅雷剣を解除し、元に戻った神木刀を肩に担いで蒼芭の元に歩み寄る。

天河たちも駆けつけた。

「俺達の力は互角だった。それが何故負けたのか、初めから分かってた筈だ」

「わ、私は……ただ……」

「どうしても言い辛いつてんなら、俺が代わりに言つてやるよ。」

篠崎がどう思っているのかは知らねえ、だが、それはコイツ自身の問題であつて他人のお前が口を出すのは間違つてるんだよ」

「う……」

言葉を返せない蒼芭。

「その事に気づいていたからこそ自分の言動に疑問を持つようになった、結果その迷いがお前の剣を鈍らせた。お前は最初から矛盾した中で、ただ剣を振るってただけに過ぎなかったんだよ」

「仰る……通りです……」

蒼芭は崩れるように地面に両膝を付いた。

「佐由理……」

顔を俯かせた蒼芭の前に篠崎が立つ。

神楽坂は無言のまま、後はお前の仕事だ、と言わんばかりに彼の尻を軽く蹴り出してやった。

篠崎は恥ずかしそうに頭を掻く。

彼に気付いた蒼芭は俯けた顔を上げた。

「……済まない。筋違いであることは初めから分かっていた。こんな事をしても慶は迷惑するだけだ……」

「ま、過ぎちまったことは仕方ねーよ。それより、わざわざ福岡まで足を運んだのは、親父達から頼まれたからか？」

「いや、慶の御両親、特に小父さんは既に諦めていたが……」

「じゃあ、なにか？ お前の独断で六学に乗り込んできたってのか？」

「そ、そうだ」

蒼芭は顔を逸らす。

その頬は薄っすらと紅く染まり、恥ずかしそうな口調で言う。

「わ、私は……け、慶と一緒に同じ高校に通いたかっただけ……なんだっ」

「俺と一緒に？ お前、中学三年の夏休みに実家に帰った時そんな事一言も言わなかったじゃねーか！」

「い、言えるかバカ者！」

急に顔が赤くなる蒼芭

「言ってくれねーと分かる訳ねーだろ！」

「それくらい気付け！」

いきなり口論を始める篠崎と蒼芭。

彼を何としても連れ戻したかった本当の理由。

その振る舞いから彼女の本心を感じ取る事ができた。

神楽坂を除いて。

「結局、蒼芭に無茶をさせたものが何だったのか、それだけが分
らなかったな」

「え……？」

天河は思わず神楽坂に聞き返した。

「神楽坂くん、本当に分からないの？」

「分かってるぜ？ 蒼芭は篠崎と同じ高校に通いたかったから、こ
んな無茶やらかしたんだろ？」

「そ、それはそうだけど……」

「先輩、流石に鈍感すぎるっしょ……。恋は盲目って奴ですかねえ。

……ってちよつと待って？ シノケに、か、か、かの——！？」

「……上村、それ以上余計な事は言っな」

「ん……？」

やはり神楽坂は分かっていたいなかった。

鈍感さでいえば篠崎よりも神楽坂の方が一枚上手だった。

一通り言い合ったのか、蒼芭は竹刀袋をからって神楽坂の元へ歩
み寄った。

「神楽坂先輩、ご迷惑をお掛けしてしまい申し訳ありませんでした」

蒼芭が深々と頭を下げてきた。

「謝ることはねえよ、俺も久々に愉しませてもらったしな」

神楽坂は借りていた神木刀を蒼芭に手渡す。彼女もそれを受け取り竹刀袋へ納めた。

「そう言つて貰えると助かります。あの、また機会があつたら手合わせ御願ひしても宜しいでしょうか？」

「京都に行く予定が有ればいいが、そんな時は何時でもいいぜ？」

「有難う御座います。その事でしたら心配いりません」

「心配いらない？」

「いえ、此方の事です」

今度は篠崎が蒼芭に言う。

「佐由理、京に戻るのか？」

「ああ。勝負には負けたからな、武士に二言はない」

「相変わらず堅苦しい奴だな……。その、ま、悪かったな心配かけちまつたみてーで」

「そう思うなら一緒に帰つてくれるか？」

「そ、それは……」

「フ……冗談だ。それに解決法をつい先程考え付いたところだ」

蒼芭は心なしか嬉しそうな顔をしていた。

これで彼女が巻き起こした騒動は無事収まったように見えた。しかし、神楽坂たち六人の前に招かれざる客が現れる。

それは、早朝、神楽坂に絡んできた坂木達だった。

「見つけたぜえ！ 神楽坂！」

タイミングを見計らっていたかのように登場した坂木は、朝よりも多くの手下（不良）を引き連れている。ざっと見て二十人はいるだろうか。

「なんだ、坂木の先輩か。何の用だ？」

「何の用だとお？ 決まってんだろ、朝の礼をしにきてやったんだよっ！！！」

蒼芭の風による威嚇で、神楽坂は坂木に対して礼をされるような事すらも出来なかったのだが、取り合えず舐められたままにしておけなかったようだ。不良としてのプライドが許さなかったのだろう。神楽坂は面倒そうに指で頬を掻きながら坂木に言う。

「そついうのを、逆恨みってんだぜ？」

「う、うるせえ！——ん？」

坂木が一人だけセーラー服を着ている蒼芭に気が付いた。不良らしく威勢の良い声で彼女に向かって叫ぶ。

「女！ お前どこ中だよ！！！」

「い、いや、坂木、俺ら高校だから……」

同学年らしき手下の一人が坂木に突っ込んだ。

「やれやれ……」

坂木一味を見ていると何だか疲れてくる。げんなりしていると両隣に篠崎と蒼芭が揃い、坂木達と対峙した。

「またあいつ等か……」

「佐由理、あの連中のこと知ってんのか？」

「まあな。……あれだけやられてまだ懲りなかったと見える」

やる気満々の篠崎と蒼芭。

「ちょ、喧嘩は駄目よ！」

「もう誰も止められないよ天河先輩。見てよ、あの神楽坂先輩とシノケの目をさ」

神楽坂と篠崎の目は、少年のような輝きを放っていた。
喧嘩というよりは暴れるのが好きで、早く暴れたいと思っている
目だ。

「蒼芭さんは女の子なのよ!？」

「先輩、あの惨状を作り出した本人に性別は関係ないかと……」

上村は先程まで神楽坂と蒼芭が戦っていた場所を指差した。
これには天河も何も言えない。

「な、長緒君も何とか言つてよ!」

天河に助けを求められた長緒は、神楽坂に向かって強い口調で言
った。

「……分かった。光志、先に手を出させれば正当防衛だ」

長緒はグッと親指を立てた。

「そ、そういう問題じゃなあーいつ！」

グラウンドに天河の叫び声が虚しく響き渡った。

そして……。

神楽坂、篠崎、蒼芭、と坂木ら不良二十名の喧嘩はあっけなく幕を閉じた。

「く、くそっ！ 覚えてやがれよっ！！」

服だけが汚れた坂木と数人は、『風特機』と大きく書かれた腕章をつけた風紀委員会に取り押さえられ連行されていく。

人数では神楽坂たちが不利だったが、所詮は集まらなければ何もできない連中ばかり、最初の数人を制圧したところで勝てないと感じたのか半数以上が拳を交えることも無く離脱していった。結束力の欠片もなく、腹も据わっていない虚勢だけの集団を蹴散らすのは造作もなかった。

神楽坂は汚れた手を叩く。

「もう終わりか。見掛け倒しだな」

「あれ、確か高校入学と同時に、同じクラスの奴に歯を折られたっていう四年の坂木だろ？」

「篠崎、お前詳しいな」

「その手の話は中学の不良界にも入ってくるんだよ」

「ああいう連中は一度懲らしめた方が良いと思いますが……」

「それなら心配ねえよ、今頃風紀にこってり絞られてるだろうからな」

「風紀が？ その役目は先生のような気もしますが……この学園は

変わってますね」

蒼芭は竹刀袋をからい直し、正門でも裏門でもない学園の敷地を囲むレンガと格子で造られた壁の方を向く。

「やつと行けるな」

「空気の読めない連中でした」

「だな」

苦笑う神楽坂

「皆さんには、特に神楽坂先輩にはお世話になりました」

蒼芭は改めて神楽坂たちに深々と頭を下げた。

数秒ほど下げた後、再び頭を上げ踵を返して背中を向ける。その際に篠崎が彼女に声をかけた。

「佐由理、その……」

「何だ？ 慶？」

蒼芭は背中を向けたまま答える。

「また今年の夏休みにでも戻るからよ……それでいいか？」

「夏休み……？」

蒼芭の反応が止まる。

篠崎の言葉にまた口喧嘩が始まるかと思われたが、彼女は何故か機嫌の良い返事を返してきた。

「ああ、構わないぞ。今年は一緒に帰省しよう」

「一緒に？ 佐由理、それってどういう――」

篠崎は聞き返したが、蒼芭は答えることも、振り向くこともなく手で挨拶をしてグラウンドの奥へ歩き去って行った。

蒼芭が起こした騒動から二日後、あれから特に事件や靈障は発生する事はなく、神楽坂は何時も通りの朝のHRを受けていた。

担任である山城の話を聞きながら、窓からグラウンドを眺める。前回、神楽坂と蒼芭が繰り広げた壮絶な戦いの爪跡は、場をグラウンドに選んだお陰で簡単に処理する事ができ、大きなクレーターや地割れも奇麗に整地されていた。

「……ん？」

外を眺めていると机の上に紙切れが投げ込まれてきた。

また吉原からのようだが、今、教壇に立っているのは泣く子どころか鬼すらも黙る恐師山城だ。こんなやり取りが発覚したら命はない。

まだ命は惜しいので神楽坂は暫く放置していたが、やはり好奇心には勝てず山城に見つからないように紙切れを広げて内容を見た。

『光志！ 一昨日、六学に乗り込んできた女の子！ 俺の確かなスジからの情報では八十七センチは有るそうだぜ！』

「……」

神楽坂は思わず紙切れを握り潰しそうになった。

山城の目を掻い潜り、冷や汗まで掻いて何が書かれてあるのかと

思えば八十七センチという意味不明の内容だったとは。怒りを通り越して呆れてしまった。

取り合えずHRが終わってから吉原に文句を言ってやろう、と思いつながら神楽坂は再び外の景色を眺めた。

「……………なんだ？」

今度は神楽坂の視界に、下から煙が入り込んできた。

前にも同じような事があったなと既視感を感じながら、少し体を乗り出して下を覗いてみると二年七組の窓から煙が出ている。しかも、騒々しい声と、また上村の悲鳴が聞こえてくる。

「まさか……………」

嫌な予感が神楽坂を襲う。

しかも、身の覚えのある霊気まで発生している。

神楽坂は苦笑いながら隣に座る長緒を見た。

「……………また来てしまったようだな」

長緒も覚えのある霊気に気付いているようだ。

神楽坂は仕方なく立ち上がり、教壇に立つ山城に出動許可と取って長緒と共に二年七組へ向かった。

予想した通り、二年七組前の廊下には担任を始めクラスの生徒達が避難していた。

もうクラスの中で何が起きているのか、手に取るように分かっていた。

神楽坂は長緒と共に生徒の間を縫って進むと、また上村が、今度は嬉し泣きで走ってくる。

「セーラーも良いけど、ブレザーも良い！ 凄く良いっ！！」

「お前もか！」

「ぶへっ！？ ブ、ブレザーは八十七センチが更に強調される……」

神楽坂の拳が炸裂。

上村はその場に倒れた。

クラスの中に入ると同時に、男子と女子の口論が聞こえてきた。

「私と一緒に通うのがそんなに嫌なのか！？」

「落ち着け！ そんな事一言も言っただろ！ キレル度に抜刀する癖をどうにかしろよ！」

篠崎に迫る背中を向けた女子は右手に抜き身の日本刀、灰色の髪に腰まで流れる長髪だ。

凄じ剣幕で凄んでいた彼女は、此方の気付いたのか振り返った。

髪はポニーテールではなく後ろに流した長髪、虎と書かれた額当ても外して一瞬誰かと思ったが、少し古い喋り方と凜々しい声は忘れることはない。

神楽坂の目の前に立っていたのは六学女子指定制服であるブレザーを着た蒼芭だった。

「今日から御世話になります、蒼芭佐由理と申します。以後、宜しく御願致します。先輩」

蒼芭はギラリと光る刀を握ったまま深々と一礼した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8924t/>

六愿学園 六学除霊部

2011年12月10日07時55分発行